

GE357
43



0000735000

0000735-000

GE357-43

滿洲生活案内

滿州事情案内所・編

1941

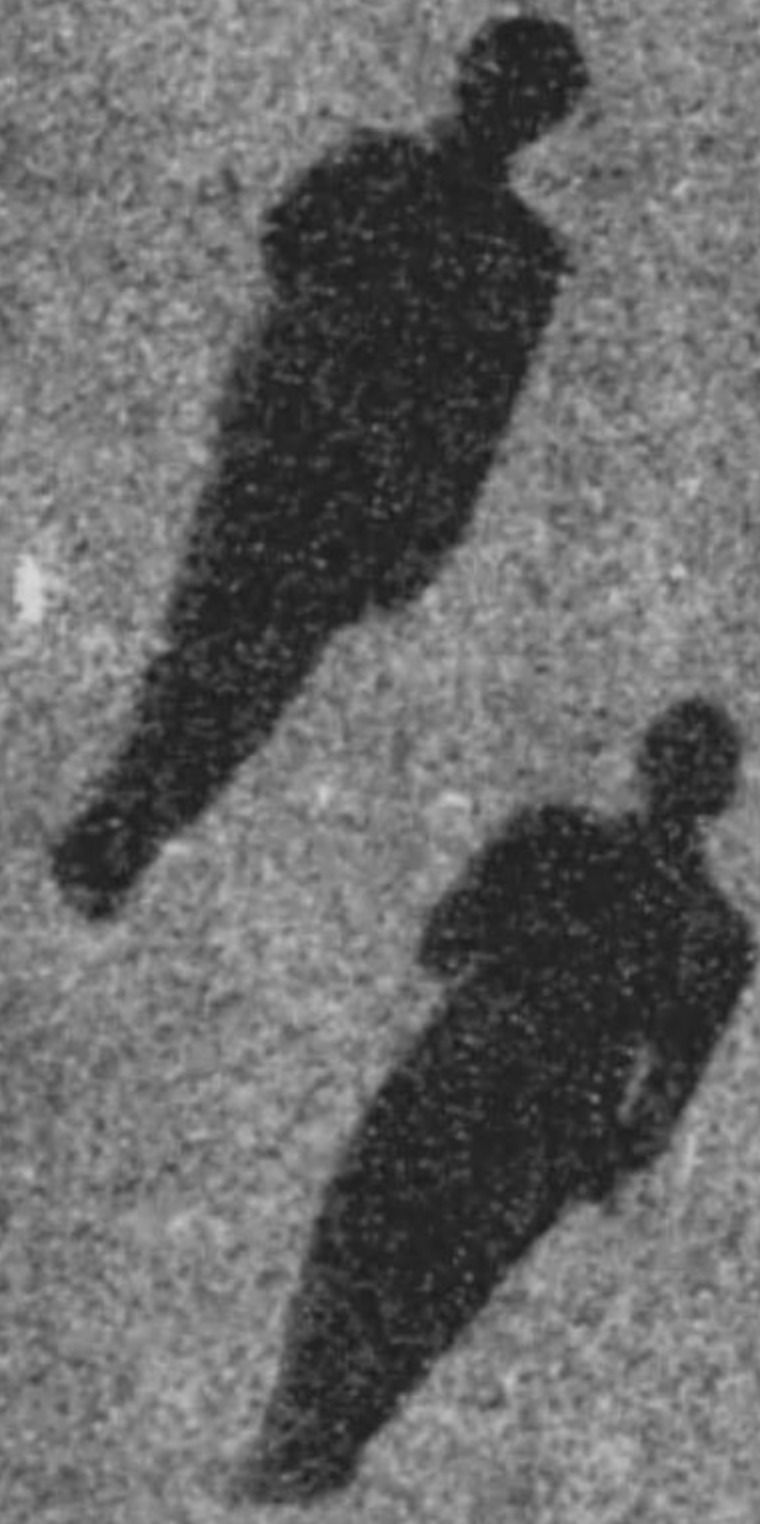
AAB



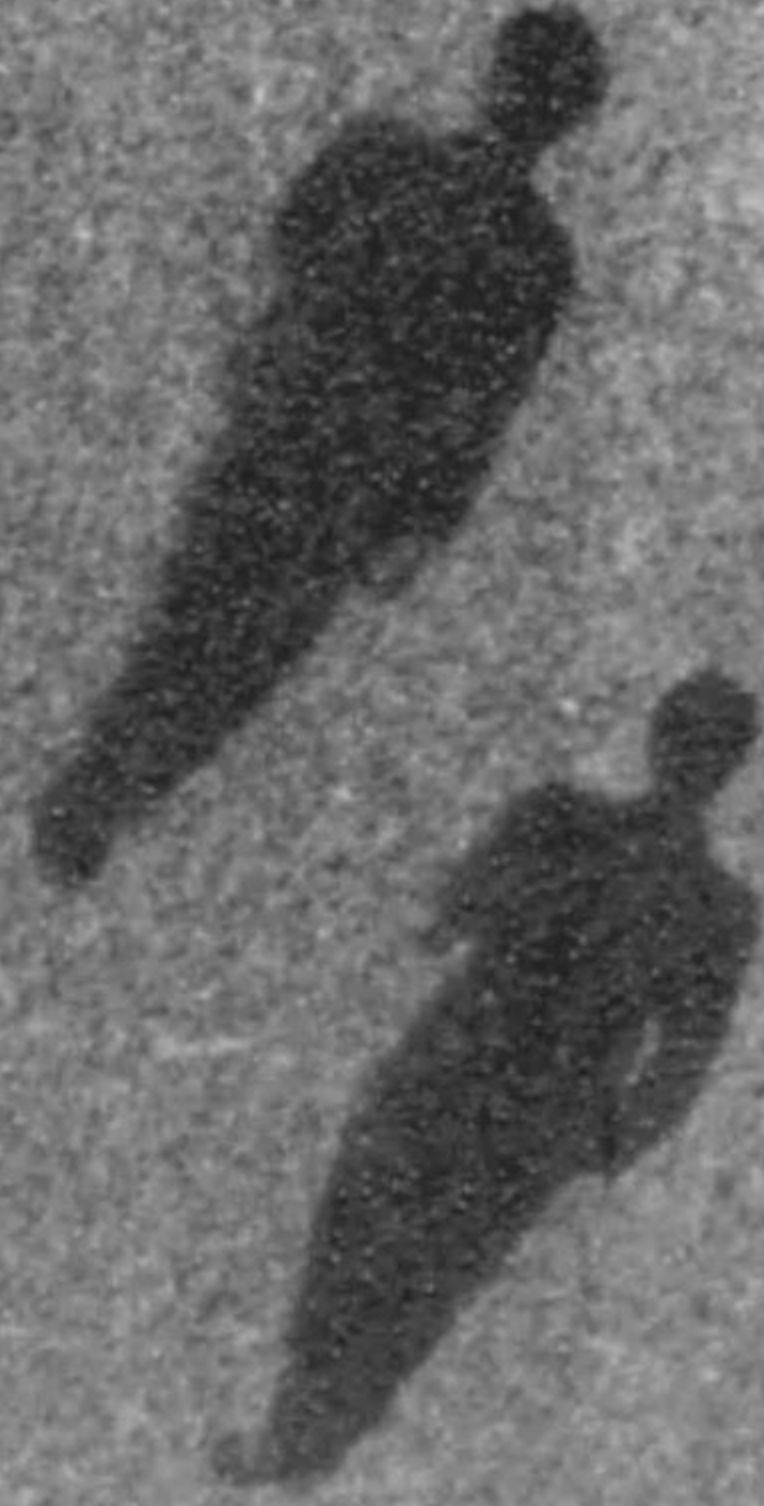
GE357

43

滿洲生活案內



滿洲事情案內所編



滿洲事情案內所報告
(92)

滿洲生活案內

滿洲事情案內所編

GE357
43



835811

は し が き

日本人は由來創始性と云ふよりも、寧ろ模倣性に富む民族で、日本が明治時代より近々七十年にして今日の如き異常なる躍進をしたのは歐米諸外國の文化を模倣し、或ひはそれを攝取、培養且つ生ましめ日本独自の多彩なる文化を形成するに至つたからである。

扱て、滿洲に於ける日本人の過去三、四十年間の生活過程を回顧して見れば案外左様でもなく、寧ろ傳統的、保守的で先住民族の亞寒帯に順應せる生活様式の如き、一向研究調査もしなければその長所をとり短を補ふ努力精進の跡すら殆んど見られなかつた。

抑々先住民族の生活と云ふものは多年の寒氣の酷しい滿洲に於ける生活より自ら體驗せられたものであつて、その生活は寒氣に適應すべく種々の對策が行はれてゐるのである。即ち日本内地の如き溫暖なる氣候の所とは自ら生活様式に於いて趣を異にしてゐるのである。

然るに在滿日本人の「風土順化」の研究不足は滿洲をして不健康地なる汚名を附したものと云ひ得られる。而もそれが日本内地に喧傳せられて今尙日本内地人間にかゝる滿洲觀を持つてゐるものが少くないのは全く日滿兩國の發展を阻害し、歎かはしきことと云ふべきである。

茲に於いて本書は先に發行せる「滿洲生活案内」を基礎として書き改め、滿洲先住民族の生活を略述し、

更に日本人の滿洲生活は如何に行ふべきか、これに關する諸問題を取扱つて、渡滿せんとするものゝ疑惑を除き、併せて滿洲生活に關係のある各種の事項に亘つて編纂したものである。即ち滿洲生活法の一指針を示したものと稱すべきものである。然し生活と云ふものが各家庭によつて夫々工夫されて營まれてゐる以上本書の持つ内容の悉くが理想的な生活方法であるとはもとより斷定し得べきものでない。唯本書によつて從來の生活に關する滿洲觀を讀者諸氏に是正して戴ければ本書の使命を過分に果せるものと云ふべく、又本書は在滿邦人の生活を多分に取扱ひ、その缺點、改良すべき點を指摘せる箇所が少くないので、渡滿せんとするもののみならず、一般在滿邦人にも敢へて一讀を乞ふ次第である。

本書の執筆擔當者は本社調査科職員鬼頭三郎である。

康徳八年四月

滿洲事情案内所にて

奥村義信

凡例

一、本書には滿洲人と漢民族なる語を用ひた。而して滿洲人は滿洲國に住むものと云ふ意味に使ひ、必ずしも本來の滿洲族のことを指すのではない。然し本書に云ふ滿洲人はこれを人種的に云へば滿洲國內住民の大多數を占める漢民族を對照として用ひた。

二、年次は日本のものを使用せず敢へて滿洲國の年次を用ひたのは、滿洲國に移住した當座暫くの間年次による不便を感じることが少くなく、この不便を緩和させる意圖からで、附録の最後に年次對照を附してその便に供した。

三、滿洲民族の話の項で各民族の家庭年中行事を記したのは、一つには先住民族の生活がより明瞭に了解出来ると思つたからであり、一つには一般在滿邦人の生活には日本古來より發展せる優秀な家庭年中行事が忘れ勝ちでこれがひいては滿洲生活にうるほひをなくする原因で、日本人の滿洲生活には日本人の年中行事を内地と同様行ふべしとの意圖からである。

四、本書に使用せる寫眞は總べて當所寫眞科に於いて撮影せるものである。

滿洲生活案内 目次

	一、日滿關係……………	一
	(一) 建國前の日滿關係……………	一
	(二) 滿洲建國と日滿不可分關係……………	四
	イ、建國の意義 ロ、建國精神 ハ、日滿不可分關係	
	(三) 滿洲國の發達と日本人の使命……………	八
	二、滿洲と日本人の生活……………	一〇
	(一) 日本人の進出と一般生活状態……………	一〇
	(二) 日本人の日常生活と滿洲人との交際……………	一三
	三、滿洲住民の話……………	一五
	(一) オロチヨン族……………	一五
	(二) 滿洲族……………	一八
	(三) 蒙古族……………	二〇
	イ、衣服 ロ、食物 ハ、住居 ニ、蒙古人の年中行事	

(四) ロシア人……………三〇

 イ、衣服 ロ、食物 ハ、住居 ニ、年中行事

(五) 漢民族……………三七

 イ、衣服 ロ、食物 ハ、住居 ニ、家庭年中行事

四、氣候の話……………五九

 滿洲の氣候と保健……………六五

五、在滿邦人の服装……………六八

 (一) 男子の服装……………六九

 (二) 婦人の服装……………七一

 (三) 服装の加減……………七四

 (四) 防寒衣料としての毛皮……………七五

 イ、毛皮の用途及び種類 ロ、毛皮の購入法 ハ、毛皮の手入並びに保存法

六、食物の話……………八五

 (一) 食物と健康との關係……………八六

 (二) 混食奨励……………九〇

 榮養より見た滿洲人の食料

(三) 滿洲の水……………九六

 イ、晒粉による場合 ロ、濾過器を使用する場合

(四)、食糧品の貯藏……………一〇〇

 蔬菜の貯藏法

七、住宅の話……………一〇三

 (一) 防寒と保温……………一〇五

 イ、外隔による防寒、保温 ロ、煖房

 (二) 室内温度……………一二〇

 (三) 滿洲住宅の管理並びに健全生活……………一二一

 イ、目張り ロ、滿洲生活と疊 ハ、窓の防露法

 (四) 滿洲の住宅並びに家賃の統制……………一二六

 イ、滿洲房産會社 ロ、家賃統制法

八、滿洲生活と物價……………一二〇

 (一) 滿洲物價騰貴の原因と統制……………一二〇

イ、生活必需品 ロ、糧穀 ハ、石炭

(一) 統制品の購入法……………二二七

 イ、申告の方法 ロ、購買通帳又は購買カード

(二) 生 活 費……………二二九

九、滿洲の病氣……………一三五

(一) 醫 療 施 設……………一三六

(二) 在滿日本人の健康状態……………一三七

(三) 病 氣……………一三九

 イ、經口傳染病 ロ、寄生蟲その他の原因による傳染病 ハ、體內寄生蟲 ニ、風土病

(四) 滿洲保健生活要項……………一五三

一〇、文化、教育……………一五六

(一) 日本人教育施設……………一五七

(二) 滿洲國の教育施設……………一六三

(三) 社會文化教育施設……………一六八

 イ、放送 ロ、映畫 ハ、音樂、演劇 ニ、圖書館 ホ、博物館

(四) 娛 樂・趣 味……………一七七

一一、滿洲人に接する心得……………一八一

(一) 滿洲人の特性……………一八一

 イ、面子 ロ、利慾の念に就いて ハ、社交宣傳に巧みなこと ニ、悠長、忍耐力

 ホ、個人主義 ヘ、妥協性に富むこと ト、現實的

(二) 姓 名 と 字……………一八六

(三) 一 般 的 尊 稱……………一八七

(四) 敬 禮……………一八九

(五) 名 刺……………一八九

 イ、男用の名刺 ロ、婦人用の名刺

(六) 訪 問 時 の 心 得……………一九一

(七) 招 待 時 の 心 得……………一九四

(八) 贈 物 の 心 得……………一九九

(九) 滿洲人の習慣と態度……………二〇〇

(一〇) 滿洲人ボーイの使ひ方……………二〇二

一一、彩票の話……………二〇五

附 録

(一) 渡滿後注意すべき届出……………二〇七

(二) 國家的祝祭日……………二〇九

(三) 滿洲事情紹介……………二一一

(四) 滿洲事情紹介圖書……………二一三

(五) 滿洲國內で發行される主なる日語新聞……………二一八

(六) 滿洲國度量衡……………二二〇

(七) 年次對照表……………二二三

一、日 滿 關 係

滿洲國で生活するには滿洲國が如何にして成立されたか、又日本と滿洲とは如何なる關係にあり、又日本人の使命に就いて一通り述べる必要があると思ふ。

滿洲は以前は境界も今日の如く判然とせず本來の滿洲と云ふのは今日より遙かに廣く現今の滿洲の外にロシアの東部シベリヤ外部シベリヤ、外蒙古の地を含んだもので、現在の滿洲國の境界は近年に出來たものである。而もこゝには滿洲國と云ふ判然とせるものはなく、幾多の民族が交互に興つては滅び、種々の國を樹て、興亡盛衰を繰返し、此の間に日本と滿洲との關係は複雑なるものがあつたが、特に清朝起つて以來ロシアが歐洲より進出し、日本のロシア驅逐、大陸への發展が行はれ滿洲の狀況は一變した。次いで日本の援助により滿洲國が成立されて今日に及んでゐる。従つて先づ最初日滿關係を述べるに當り滿洲國成立前及び成立後に分け、その後日本人の使命に就いて述べることにする。

(一) 建國前の日滿關係

日本と滿洲との關係は可成り古く史實に就いてこれを見るに、兩國間に始めて外交交渉の行はれたのは今

より千二百年前聖武天皇の神龜四年のことで、當時の渤海國王は寧遠將軍高仁義を大使とする廿四名の一行を始めて日本に派遣したのであるが、一行は途中難船の厄に逢着し、蝦夷と出羽の境に漂着せるため、蝦夷人によつて高仁義以下一六名は殺害され、首領高齊徳以下八名は辛じて難を逃れて出羽國府に來着したのである。このことが中央に聞えると、朝廷は遠路長くも慰問の使者を出羽國に派遣せられて、衣服を賜つたのであるが、高齊徳一行は上京し、翌神龜五年正月參内し國書と寶物を奉獻した。この渤海國王の國書は頗る鄭重を極めたもので、その内容は要するに渤海王は日本を宗主國と仰ぎ、同時に日本に服屬して朝貢の禮をとると云ふことであつた。

斯くして日本と滿洲との交易はその後二百年間續いたのであるが、延長四年(日本)渤海國が契丹によつて滅亡するや、日滿兩國の交渉は杜絶し、その後の交渉は干戈によるもので、即ち後一條天皇の寛仁三年には女眞族の入寇があり、又文永十一年、弘安四年には蒙古の襲來があり、更に又豊臣秀吉の朝鮮征伐がある。この朝鮮征伐に於いて加藤清正は圖們江を渡り、兀良哈^{ウラシカイ}即ち現在の間島地方にまで侵入して居るのである。徳川時代に於いては日本の鎖國時代であるため記載し得る事件はなかつたが、明治維新以後は日本も急速な發展を遂げ、當時滿洲一の海港たりし牛莊に日本領事館が開設され、續いて明治二十四年には三井物産會社が出張員を牛莊に在留させ、又日本郵船會社は定期航路を開いてゐる。

斯くして滿洲在留邦人も逐次その數を増加して來たのであるが、清の日本壓迫があり間もなく日清戦役と

なつた。この戦役に於いて皇軍は滿洲南半の野に殺到し輝く戦勝を收め、朝鮮の獨立を確保すると共に遼東半島を獲得するに至つた。

然るにこの遼東半島も當時極東の侵略に全力を傾倒してゐた帝政ロシアを發頭人とする三國干渉によつて失つた。これに反しロシアは遼東半島還付の成功を口實にロシア自ら同半島を租借し、同時にロシアはその傳統政策たる侵略主義を露骨に現はして着々滿洲經營を實現し、露西亞の勢力は滿洲全土に及び極東の海陸をも壓せんとするに至つた。斯くの如きロシアの滿洲侵略は漸次朝鮮の獨立を危殆ならしめ、同時に日本の存立を脅威し、東亞全局の平和を破壊するものであつた。茲に於いて日本は従來の露清交渉問題を日露直接談判に移し、以つて清國の發祥地たる滿洲奪回の衝に當らざるを得なかつた。然しロシアの頑迷は日露交渉を受けつけず、遂に日本は滿洲の靜謐と東洋保全のために敢然と起ち強敵ロシアと戦ひ、赫々たる戦勝の凱歌をあげロシアの野望を粉碎し去つた。

斯くして滿洲の天地を蔽つてゐた多年の暗雲が帝國の威力に依つて一掃され、日露戦役終結後、日本は帝政ロシアに代つて滿洲開發に乗り出し、滿洲の治安維持、經濟建設、文化の向上に盡力して來た。斯く日本の開發政策が樹立せられるや、滿洲の光景は一變し、かつては軍隊輸送のために造られた滿鐵線は純然たる經濟線化し、滿洲の農産物、鑛産物はこれによつて羽の生えたるが如く積出され、滿洲の産業は劃期的に振興すると共に、その住民は陸續として激増し支那本土の相繼ぐ騒亂を外に内外人の安住地となり、經濟的に文

化的に飛躍的發展を遂げるに至つた。これも日本が日清、日露の兩戰役を通じて忠勇なる十有餘萬人の英靈を犠牲とし、二十數億の國帑を費し、更にその後において十有億圓に達する巨額を投資せる結果が集積されたために外ならない。

然るに張作霖が政權を握るや、上述の如き日本の滿洲に於ける重大なる特殊關係を何等顧慮する處もなく滿鐵に併行せる鐵道を作り、經濟的に壓迫を加ふると共に極端なる排日、侮日運動を激成し、尖鋭化する結果、昭和六年九月十八日夜半、張學良正規軍の手によつて行はれた柳條湖の滿鐵爆破を直接の導火線として遂に滿洲事變が勃發し、皇軍の神速なる行動により張政權は一朝にして瓦解し、以つて張政權と是を繞る民衆擄取の政商は滿洲より掃蕩され、茲に王道樂土滿洲國が出現した。

(二) 滿洲建國と日滿不可分關係

滿洲國は滿洲事變による張政權の没落、及びこれを繞る民衆擄取の政商が滿洲より掃蕩された結果、多年張父子軍閥の壓制下に呻吟してゐた東三省民は、この機會に於いて舊政權と絶縁し、奉天を始め各地方に於いて獨立を宣言した時恰も民衆を基礎とする新政府を組織して王道政治を行ひ、滿洲をして理想的樂土たらしめんとする希望が鬱勃として抬頭全滿に漲り、遂に昭和七年(大同元年)三月一日、王道政治を建國の理想とし、民族協和をモットーとする滿洲國は誕生し、アジアの地圖は新らしく塗り替へられたのである。

(イ) 建國の意義

滿洲國の建國はその事象に於いて世界史上の劃期的事實であるのみならず、政治、經濟、文化、その他一切の問題に新しい課題を與へたもので、同時に滿洲國の誕生は、(一)舊軍閥によつて激成された極端なる排外運動の尖鋭化に伴ひ東洋のバルカンと稱せられ、アジアの火藥庫と唱へられた滿洲を東洋平和の基礎と變ぜしめたこと、(二)動もすれば「化外の民」又は「塞外の棄民」として何等國家的施設と恩恵とを蒙ることなく、而も粒々辛苦による勞働の美果を、この地に盤踞し支配せる舊軍閥によつて誅求擄取された三千萬民衆をして塗炭の苦より救済したこと、(三)王道政治を實踐し、民族協和、機會均等、門戶開放の新政治形態を樹立し、世界の樂土を具現したこと等幾多の重要意義を有してゐるのである。

(ロ) 建國精神

抑々滿洲建國精神は近く自治指導部時代に胚胎したものである。自治指導部と云ふのは建國の前年十一月十日奉天に設立されたものである。而して自治指導部の眞精神は部長于沖漢氏の名を以つて發表された布告第一號に明記されてゐる。即ち

天日の下に過去一切の苛政、誤解、逆想、紛糾を掃蕩し、極樂土の建立を示すに在り。住民の何國人たるを問はず、胸奥の大慈悲心を喚發せしめて信義を重んじ、共敬、相愛以て劃時代的天業を完成すべく……謂ふところの亞細亞の不安は纏て東亞の光となり、全世界を平被し、全人間に直誠の大調和を齎らすべき瑞光なり。此處大乘相應の地に史上未だ見ざる理想境を創建すべく、全努力を傾けるは即ち興亞の大濤となりて人種の偏見を是正し、中外に悻らざる世界正義確立を目指す。

と民族協和の大理想を掲げ、又大同元年三月一日公布された施政大綱によつて明示されてゐる。即ち

政は道に基き、道は天に基く、新國家建設の旨は一に天に順ひ民を安んずることを主とす。施政必ず真正の民意に詢ひ、私見を存することを容さず、凡そ新國家の領土内に居住するものは皆種族の岐視尊卑なし……王道主義を實行して必ず境内一切の民族をして熙々嗶々として春臺に登るが如くならしめ、東亞永久の光榮を保ちて世界政治の模範となさん。

と王道政治が明示してある。即ち滿洲國の建國精神は民族協和を基調とし、王道政治を實踐して人類の樂土を顯現せしめんとする、崇高且つ深遠なものであるが、これを換言すれば、滿洲國は日本建國の大理想たる八紘一宇の精神の具體的の顯れで、長くも日本 天皇陛下の御稜威を發揮して、その皇澤を四千萬民衆に及ぼしこゝに 皇帝陛下を中心に協和し、東洋古來の道徳、家族制度の麗しき精神、隣保共愛の精神を基調とする道義國家を建設し、又大和民族の優秀なる文化を中心としてこれに土着民族固有文化を統合し、新しき大陸的文化を建設して行く處に存するのである。

(ハ) 日滿不可分關係

日滿兩國關係は一徳一心、不即不離の状態にあると云はれるが、それには種々の理由が存するのである。即ち國防的には日滿兩國共、常に世界平和の攪亂を謀りつゝあるソ聯に近接して居り、従つてその防衛には常に立場を同じうしてゐるのである。かゝるため滿洲國の防衛は日滿議定書に基き、日滿兩國が共同して擔任することとなり、所要の日本軍隊を滿洲國內に駐屯せしめ、而もその國防費の一部を負擔し、その不可分

關係を益々深からしめてゐるのである。次に經濟問題に就いては、ブロック經濟に進みつゝある世界の大勢に鑑み、日滿兩國は有無相通じ相倚り相助けて、以つてその經濟ブロックの實を擧げるべき立場にあるのである。

この政治的、經濟的に相互依存關係の外に、滿洲國成立に基く不可分關係がある。即ち建國の宣言に示す如く、滿洲國は五族協和、王道治國を理想とし、日本の努力によつて新しく建設せられたる國家であり、この國に居住する滿、漢、蒙、日、鮮その他の諸民族は夫々平等の待遇を享けるものである。換言すれば滿洲國は滿、蒙、漢人のみによつて成立する國家でなく、その建設育成に貢獻する日本人も亦滿洲國の最も有力な構成分子であつて、滿、漢、蒙人と均しく、公私諸般の業務に従事し、所謂王道國家の實現、安居樂業の完成に邁進すべきである。従つて滿洲國は嚴然たる獨立國ではあるが、建國の道程及び理想より觀れば、日本と對立或ひは競争する他の國家と異なり、國際的には日本と不可分の依存關係を持ち、國內的にはその中樞的存在たる日本民族と同一體の間柄にある、謂はゞ肉親關係にある國家である。これ即ち滿洲國と日本と不可分一體の關係にありとせらるゝ根基である。

以上は主として世界の現勢に對應すべき國防、經濟上の見地より、日滿一體不可分の關係を述べたものであるが、兩國の一體不可分關係に就いては、かつて世界にその例を見ない日滿兩國の精神的特質があることを見逃してはならない。これは、單なる利によつて結ばれ、害を以つて離れるが如き繊細脆弱なものでなく、

滿洲國 皇帝陛下は御登極に際し詔されて

守國ノ遠圖、經邦ノ長策ハ當ニ日本帝國ト協力同心以テ永固ヲ期スヘシ

とあり、又御訪日御歸國後即ち康德二年五月二日に渙發せられた回鑾訓民詔書の中に

朕、日本 天皇陛下ト精神一體ノ如シ、爾衆庶等更ニ當ニ仰イテ此ノ意ヲ體シ友邦ト一德一心以テ兩國永

久ノ基礎ヲ奠定シ東方道徳ノ眞義ヲ發揚スヘシ則チ大局ノ和平人類ノ福祉必ス致スヘキナリ

とある如く、滿洲國 皇帝陛下は、日本 天皇陛下ノ大御心を以つて自らの心とすると仰せられ、日滿兩國は永久に同一運命を荷ひ同行すべき盟約を持つてゐるのである。

(三) 滿洲國の發達と日本人の使命

右に述べた日滿兩國の不可分關係を實質的に強化し、民族協和を實現して輝く王道樂土を建設するためには、日本人が多數この間に移住定着して滿洲人を始め、その他の諸民族と相提携して且つその中樞たる指導的地位に立ち、これ等諸民族を指導啓發する時に眞にその目的が達成せらるゝのである。斯くてこそ日滿同昌共榮の實が顯現され、東洋永遠の平和が確保されるものと考へられる。

殊に最近支那事變を始めとし、内外の諸情勢を觀察する時に、滿洲國自體の地位如何と云ふことが、諸般の情勢を有利且つ迅速に指導して行く上に於いて極めて重要な意義を有すること頗る明瞭である。即ち東亞

協同體結成の前線的據點たる滿洲國が不動磐石の儼然たる存在であり、從來執つてゐるところの建設的態度、工作等が何等の動搖なく又停頓なく、順調に着々進捗してゐることが最も重要なことである。而して斯くあるためには從來滿洲國建國の中心的諸政策を更に堅實に且つ平靜裡に進めて行くことが必要で、これには特に大和民族を中核とする民族協和の實を擧げ常に發展して止まない状態にあらしめることが必要である。これは東亞の民衆に對しその進むべき道を教へることであり、アジア大陸に於ける一切の禍根を絶つと同時に東洋永遠の平和を確保する所以であり、又この民族協和による堅實なる發展こそはその指導的地位にあるアジア大陸の盟主たる日本の實力を世界に明示する所以となる。かゝるために、滿洲國の住民をして民族協和の要訣を缺きたるまゝ推移せしむることは一日も忽かに出來ないところであつて、全滿洲國民は協力一致、萬難を排して益々これを擴充し以つて國運の進展に寄與しなければならぬのである。

要するに滿洲國は、日本の協力に依つて育成されるのであつて、この育成に協力することはとりもなほさず日本の發展を促進するもので、これは日本人特に滿洲國に居住する日本人の崇高なる義務であり、又光榮ある大使命と考へられる。

一、滿洲と日本人の生活

滿洲に居住する日本人は上述の如く、日滿兩國の發展上、政治、産業、文化等凡ゆる方面に亘り向上を期さねばならぬと同時に又民族協和と云ふ大使命を帯びてゐる。その責を完全に果たすためには我々日常の活動のエネルギーの根源たる日常生活を先づ合理化し、以つて常に健全なる體力と精神力とを養ふことに心掛ければならない。特に日本内地と異なり激しい氣候、特異なる風土を持つ滿洲に於いてはその必要が痛感せられるのである。日常生活の研究は重要なことであるが、民族協和と云ふ立場より滿洲人の性質風俗習慣等も亦研究することは極めて重要なことである。

(一) 日本人の進出と一般生活状態

在滿邦人の生活状態は先づ滿洲生活に最も關聯のあるその集團狀況より述べることにする。而して在滿邦人の集團状態は大體これを開拓地、滿洲人部落及び都會等に進出せる場合の三様式に大別することが出来る。

開拓地に於ける邦人の集團は開拓事業そのもの、性質上滿洲人部落より離れたところに點々と設けられそ

の部落は大體同縣人のものよりなつてゐる。

滿洲人部落に日本人が進出せるところは滿洲人と混淆の状態で生活が行はれてゐるが、その混淆状態は寧ろ全なる混淆状態にあるのではなく、その間にあつて可成り密なる集合をなして居る。斯くの如き日本人の集合状態は産業開發、開拓等の國策事業の發展により全滿各地に見らるゝもので、これ等事業發展に伴ふ日本人の進出により將來益々かゝる集團の數は増大し且つ日本人集合状態も漸次密なものにならうことは容易に想像し得られる。

最後の都會に於ける日本人の集合状態は前記の滿洲人部落に數多の日本人が進出せるものと云ふことが出来、部分的には混淆状態となつてゐるところもあるが日本人の居住地と滿洲人の居住地とは概ね明瞭に區別され、滿洲人居住地が城内（滿洲人は從來都市の周圍にも墻壁を廻らし、都市を外來者の暴力的侵入より防いでゐた）にあるに對し日本人の居住地は城外にある。

在滿邦人の集團は斯くの如き状態となつてゐるが、近來邦人の進出は産業、經濟その他凡ゆる方面に目覺しきものがあり、康徳元年末在滿邦人二十一萬餘り（關東州を含む以下同じ）に過ぎなかつたものが康徳六年末には八十三萬餘りに達し、この五箇年間に約四倍に増加してゐるのである。

而もこの日本人の著しき進出及びこれに伴ふ滿洲人の生活向上を他の原因によつて、各種日常品の莫大な量が年々日本内地より輸入されて居り、現今は生活必需品の七〇%餘りが日本に依存してゐると稱せられ

てゐる。かゝる結果都會たると田舎たるとを問はず、在滿邦人の生活様式は衣、食、住その他の生活様式に至るまで略日本内地と同様の習慣によつて行はれてゐる。

然し日本の生活様式は元來日本の如き暖國に於いて發達せるもので、滿洲の如く寒暑の差が激しく、特異なる風土を持つたところでは適しない。従つて滿洲に於いてこれを克服して完全に健康を保持し、更に積極的體力の増進並びに精神的に常に樂しみと希望とを見出し、潑刺たる活動力を保有するためには滿洲の特殊な氣候風土を知悉し、それに適しない日本の生活様式を放棄し、滿洲に即應せる合理的な生活態様を研究打ち立てなければならぬ。然しそれは大陸生活に全然無經驗なる日本人にとつて可成り難しい問題であるが幸に滿洲には寒地生活に長年の經驗を有するロシア人、滿洲人等比較的文化的の高い住民が居り、その生活様式の學ぶ點が少なくなく、又現在日本人の衣食住その他一般生活問題に對する種々の研究及びその改善運動が盛になりつゝあり、而してその科學的な研究は各種大學を始め、滿鐵その他の各會社、工場等で行はれて居り、改善運動は滿洲國政府、協和會(註)に於いて夙に種々の形で唱導してゐるのである。従つて滿洲に來て直ぐ生活の改善を行ふことは必ずしも困難でないと云ひ得る。

(註) 協和會と云ふのは滿洲國政府と表裏一體となり建國理想の達成に努力する實踐的な組織體で、日本の一部で想像されてゐるが如き、秘密結社でもなく、單なる政黨でもなく、又權力團體でもない。

協和會は滿洲國政府が官吏を以て構成され、法を以て建國理想の達成に努力するの對し、官民及び人民により構成され且つ何等の權力、法律も持たず道義を中心として一般人民を指導して建國理想の達成に努力する機關であつて究極の目的は兩者とも同一である。而して協和會の最大事業は日本と滿洲との一徳一心關係を中心として、各民族協和し、王道樂土を建設して行くための人民指導にある。このため上の意志を下に、下の意志を上へ傳へ官民一體となつて建國理想を作らんとするその實踐をなすのであつて、この目的を達成せんがために、中央には滿洲帝國協和會中央本部があり、省(日本の縣に相當する)には協和會省本部、縣(日本の郡に相當する)には協和會縣本部、街(町)又は村に協和會分會があり、市には協和會市本部がある。

(二) 日本人の日常生活と滿洲人との交際

日本と滿洲國が不可分關係にあり、その兩國家を構成する夫々の民族間に於いて凡ゆる事業に互り絶對無關係にあり得ないことは既述せるところであるが、我々日本人の日常生活に於いても亦直接滿洲人と頗る密接な關係がある。而して田舎の滿洲生活に於いて滿洲人との交際の多いことは、容易に想像し得らるゝであらうが、新京、奉天等の如く日本人居住者が十萬人以上も占むるところの生活に就いても同様で、日本人の町と稱せらるゝところには日本人を客とする滿洲人の野菜、肉、雜貨等の營業をなすもの或ひは野菜、豆腐等の如き日常消耗品を賣りに來るものが少くない。又日本人經營のデパート、商店等に於いては使用人として滿洲人を傭つてゐる所が頗る多く、日本人の客のみならず滿洲人の客も少くない。更に主要交通機關たる電車バスの運轉手、車掌を始め馬車(客馬車)、洋車(人力車)の馭者は總べて滿洲人で、斯くの如き日本人日

常生活に於ける滿洲人との接觸の機會は極めて多いのである。

又言語はこの日本人と滿洲人との交際が多いことにより、必然的に言語に影響し、日本人で滿洲語を話すものが少くないのと同じく滿洲人で日語を話すものが少なく、寧ろ日本語習得熱は日本人の滿洲語習得熱より遙かに盛で、滿洲人の公務に携はるものは勿論、平常日本人と接觸する機會の多い商人も亦日本語が巧みである。

以上簡單ではあるが滿洲人と日本人の日常生活の交際關係を述べたが、こゝで一言を要することは滿洲人に對する日滿人の交際が頻繁であり、又彼等が日本語に巧みになりつゝあること、更に民族協和の重要なこと等より日本人の一般通有觀たる滿洲人の劣等視觀を捨てることで、滿洲人劣等視程兩民族の發展の障害となるものはない。又これに關聯して彼等の性質及び風俗習慣を研究し、以つて日本人たるの襟度を保ちその行動を慎重にしなければならない。

三、滿洲住民の話

滿洲は古來幾多の民族が興亡した所で、今日の滿洲即ち滿洲帝國の版圖内に居住する民族はその系統並に種類の複雑多岐にして種族的名稱も現在尙二十餘の多きに達してゐる。然しこれを概略的に區分すればツングース、蒙古、漢及びトルコの四大系統に分けられる。この中ツングース系の滿洲族、ゴルド族、及びオロチオン族等は、主として東北の山地、河邊、山谷に住み、狩獵を以つて生業とし、蒙古系のハルハ族、オレート族及びブリヤート族は主として西部の草原にあつて放牧を以つて業とし漢系の漢民族は南滿より中央の沃野にかけて、トルン系のロシア人は中央より北滿にかけて居住し、その多くは農業商業を營んでゐる。又朝鮮人は殆んど全滿各地に居住し農民が最も多い。

斯くの如く滿洲國を構成する諸民族は多種多様にして、種族により居住地或は生業を異にし、又それに附随して生活狀況も夫々異にしてゐる。

(一) オロチオン族

オロンはツングース語の馴鹿と云ふ意味でオロチオンとは馴鹿の民と云ふ意になる。この民族は原始的な

狩獵によつて生活するツングース系の民族で滿洲國には凡そ三千人位が小興安嶺の山中に點在してゐる。

古來狩獵を以つて生計としてゐたのであるが最近では農耕を行ひその生計にあてゝゐる者も極く一部に見られる。然しその大部分は狩獵を以つて生業を営んでゐるのであつて大體春より夏に木茸、麂、鹿茸を狩り食糧には木茸、獐肉、山茸等をあて、秋より冬にかけて栗鼠、狼、狐、猪、獺等を狩獵し、それ等のものを食糧と交換して生計をたてゝゐる。

この狩獵は男子の仕事で、狩獵の巧拙は喰へないと云ふ切實な問題となるためか、舊式の露西亞銃により百發百中と云ふ成績をあげ、頗る射撃に巧みである。尤も射撃には擬箭を用ひ、獲物を近くに誘寄せ或は自らこれに接近して然る後射撃し射撃範圍内に獲物に近寄れぬ間は決して發砲せず、接近の出来るまで何日迄もこれを追跡して射止めるのである。

次に女の生業は如何にと云へば女は大體普通の女子と同じく家事に當つてゐるやうであるが、その外彼等は副業として種々の手藝品を作る。即ち主人の獲れる鹿の皮或は麂鹿の皮その他各種野獸の皮等を利用して種々の鞆、物入れ等を作る。革の鞆し等も全部女の手で行ふ。その他薪炭の採集、水の運搬、馬乳酒の製造等は全部女の仕事で、男は狩獵以外に殆んど何も行はない。

オロチオンは先に述べた如く狩獵民族であるため、獲物の關係に依つて住居を變へることは云ふまでもないが、交通の關係、死人の出た場合等に依り隨時に移動する。春秋の季に於いては殊にこの移動が激しく二

三日で移動することもある。大體冬は下流の方に下り夏は山奥に移動するのが原則の如くなつてゐる。この移動は自己の家一軒で行ふのではなく、彼等の親しい者達と集團になつて移動する。移動する際に家族の誰か不在の時は途中木の枝を折つて目印とし、その移動先を知らせると云ふ様な方法をとつてゐる。

然し彼等は目印がなくても家族が何の邊に移行したか第六感で解るやうである。次にオロチオンの住食住に就いて述べる。

オロチオンの服装は、その衣服は毛皮が主體であるが、近來は彼等の間にも文化が入り、夏季に毛皮を着る者は少く、綿服を着る者が大部分で、綿服を購入することの出来ない者は毛皮の毛の抜けたものを夏着てゐる。冬は勿論毛皮製の衣服で、その材料は大體鹿皮、麂鹿皮等を用ふるが、毛の方を内側にするのがオロチオン族の風習である。又、帽子、靴、手袋等の如き附屬品も總べて毛皮で作る。裝飾は男の方は殆んどせず、子供は白樺で造られた魔除けの飾り或ひは人形を首飾りとしてつけ、女子は耳環、首飾り、指環等をつけてゐる。

住居は多くは河川に臨む山腹又は丘陵に、少きは一、二戸、多きは十戸位のテントを構へ、テントは一、二間の間隔を置いて並列するのを常とする。テントの構造は極めて原始的なもので、白樺の丸木二、三〇本を直徑四米、高さ三米位の圓錐形に立て、之に夏は白樺の樹皮を蔽ひ、冬は麂の毛皮六〇枚位と乾草にて包み、更に抑への丸木若干を立てかける。尤も頂部には少し空間を残して煙出しとなし、入口には樺皮又は鹿

皮等を吊して扉の役目がさせてある。住居の中にはその真中に爐が作つてあり、奥の方には大抵神棚が造つてあつて、狩獵の神、娘々（現在は滿洲國一般大衆の信仰する女神となつてゐるが、元來は漢民族の信仰せる女神）等數多の神が祀つてある。この神を祭るのは家長で女はその神棚に近づくことを禁止され、戸口近の席にゐる。戸口には食器、食糧品、衣服等の包みが並べられてある。面積は大抵四疊敷位に相當するので、一家族の者が一つのテントに收容の出来ない場合があるが、かゝる時には別にテントを作り、特に大きなものを作ることはしない。

食事は夏季粟の多い時以外は一日二食の風がある。粟は總べて滿人、ロシア人等より交易によつて得るもので、粟に麴の肉を入れて食べたり、或ひはその肉のみを水煮又は焼いて平常の食事を行ふ。

以上オロチヨンの生活に就いて大體述べたが、滿洲國王道の光を浴び、この原始的民族の間にさへ小さい乍らも小學校の設備が設けられ、漸次その文化的向上が圖られてゐる。

（註）オロチヨンの狩獵によつて生活を営むのに對し、漁撈を以つて生活を営む民族がある。これはゴルヂ族と云はれる民族である。

（二） 滿 洲 族

滿洲族は現今の所謂「滿洲旗人」と稱せられる民族にして古く周代の肅慎、漢代の挹婁—勿吉、隋—唐代の

靺鞨、宋代後の女眞等と幾變遷せるも一七世紀の始めより隆々たる威勢を加へて清朝を興し、遂に支那統一の偉業を完成した滿洲固有の民族で、その過去は古く東洋史上、絢爛たる光彩を放つてゐるが現在滿洲國內の滿洲族人口は約五百萬人で總人口の四千萬人に比較すれば、僅かに一割餘を占むるに過ぎず、漢民族の人口に比ぶれば微々たるものである。斯く滿洲に滿洲を故土とする滿洲人が少いのは次の如き理由に基づくものである。

元來滿洲には滿洲族の人口が少かつた上に清朝は支那本土統一のため、壯丁の大部を擧げて漢民族の統治に使用し又統治後北京各地へ移住したため、滿洲は益々空虚になつた。その空地を奪はるゝことを慮つて漢民族の滿洲移住を禁止したが、斯くの如き不自然の状態は永續する筈がなく、やがて漢民族が潮の如く滿洲に流入するに及び、滿洲族は全く漢民族に壓倒され、清朝の支那に於ける統治力を失つた時には、故郷たる滿洲は既に滿洲族のものではなかつた。而して滿洲族固有の文化、言語等は漢民族の發達せる文化及び數多の漢民族の流入により、殆んど同化され、更に滿漢交婚の結果人種的にさへも漢民族化の傾向が見られるに至つた。

滿洲族は滿洲國內に於いては全國的に分布してゐるが叙上の如く現在は漢民族に殆んど同化されてしまひ比較的その民族的獨自性を濃厚に保有してゐるのは吉林省、牡丹江省、黑河省、濱江省地方の北滿に居住するものである。これ等の滿洲族は清初に於いて羅刹の征戰後滿洲族の軍隊が逐次松花江を経て黑龍江を溯江

し黒龍江(現今の愛琿)及び墨爾根(嫩江)、齊々哈爾の各城に基幹旗兵として分駐した外、松花江流域の呼蘭、通肯を中心として單獨にて滿洲八旗を編成し、鐵山包及び東興鎮等の地方に定住した者の子孫で、漢民族の流入遅く、比較的近年までその文化に影響されなかつたものである。

而して滿洲國建國後はこの民族も民族的自覺を示す者が多くなり、現に滿洲國政府の大官となつてゐる滿洲族出身の者も少なく更に人口的にも、産業、經濟的にも或ひは政治的にも滿洲國に於ける滿洲族の地位は頗る重要である。宗教はシャマン教を信じ、率直で比較的利にうとく、勇武の氣象に富み、肉親の情愛に濃かで、長上に對する尊敬服従の念に厚い等好ましき性情を有する。

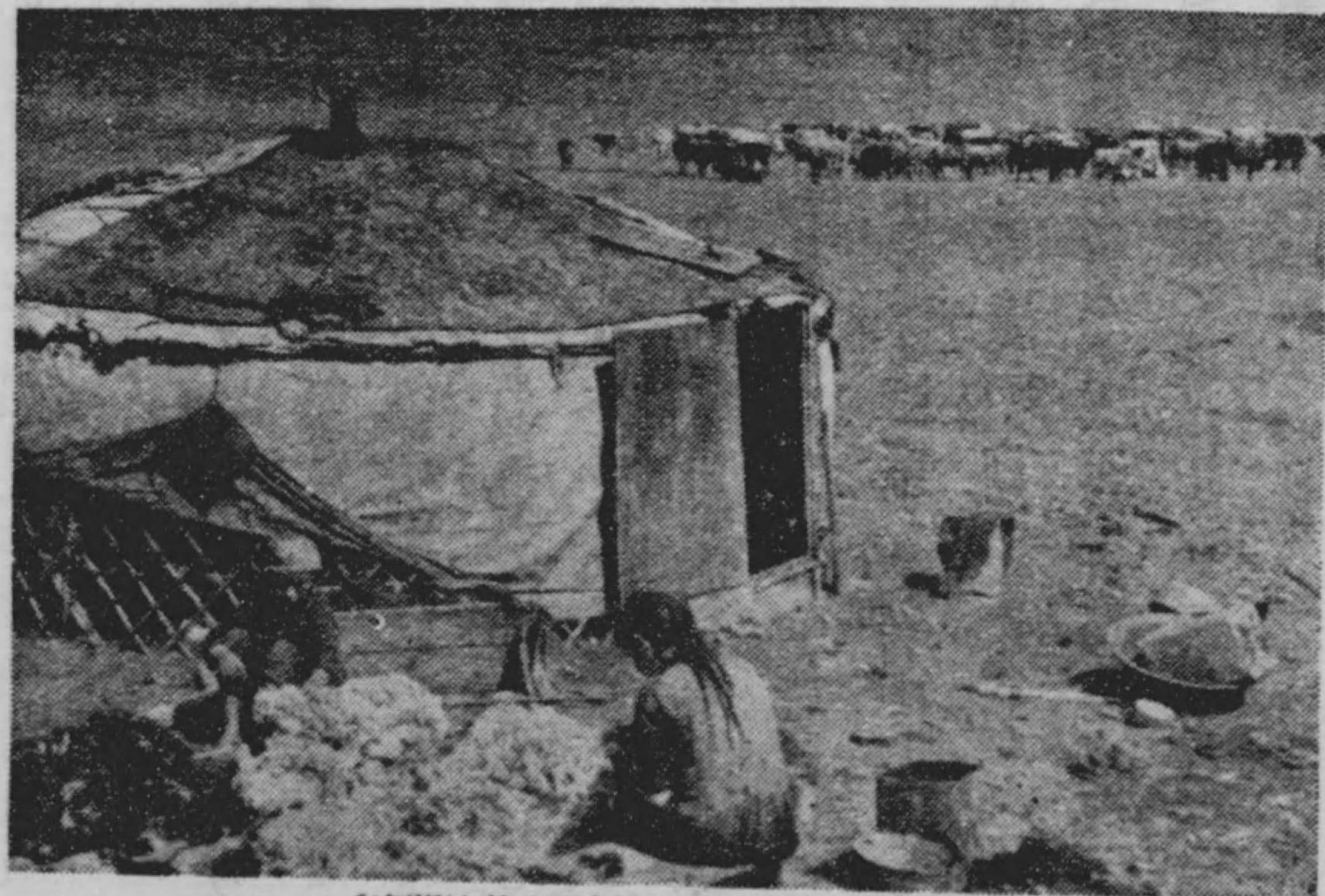
風俗習慣は既述せる如く殆んど漢民族のそれに同化されてしまつたが、滿洲族本來の風俗習慣を述べると家屋の形式は屋根は草葺で日本の神社風の千木を屋根に置き、門は鳥居の如くなつてゐる。正月には門に日本と同様門松の如きものをたてる。又薩滿の信仰上より庭に神杆を立て、その上部に椀形をつけ豚の骨を突きさす。

尙、婦人は高いまげを結びこれによつて漢民族の婦人とは容易に識別し得られたが、近時これも頗る珍しい風習となつた。

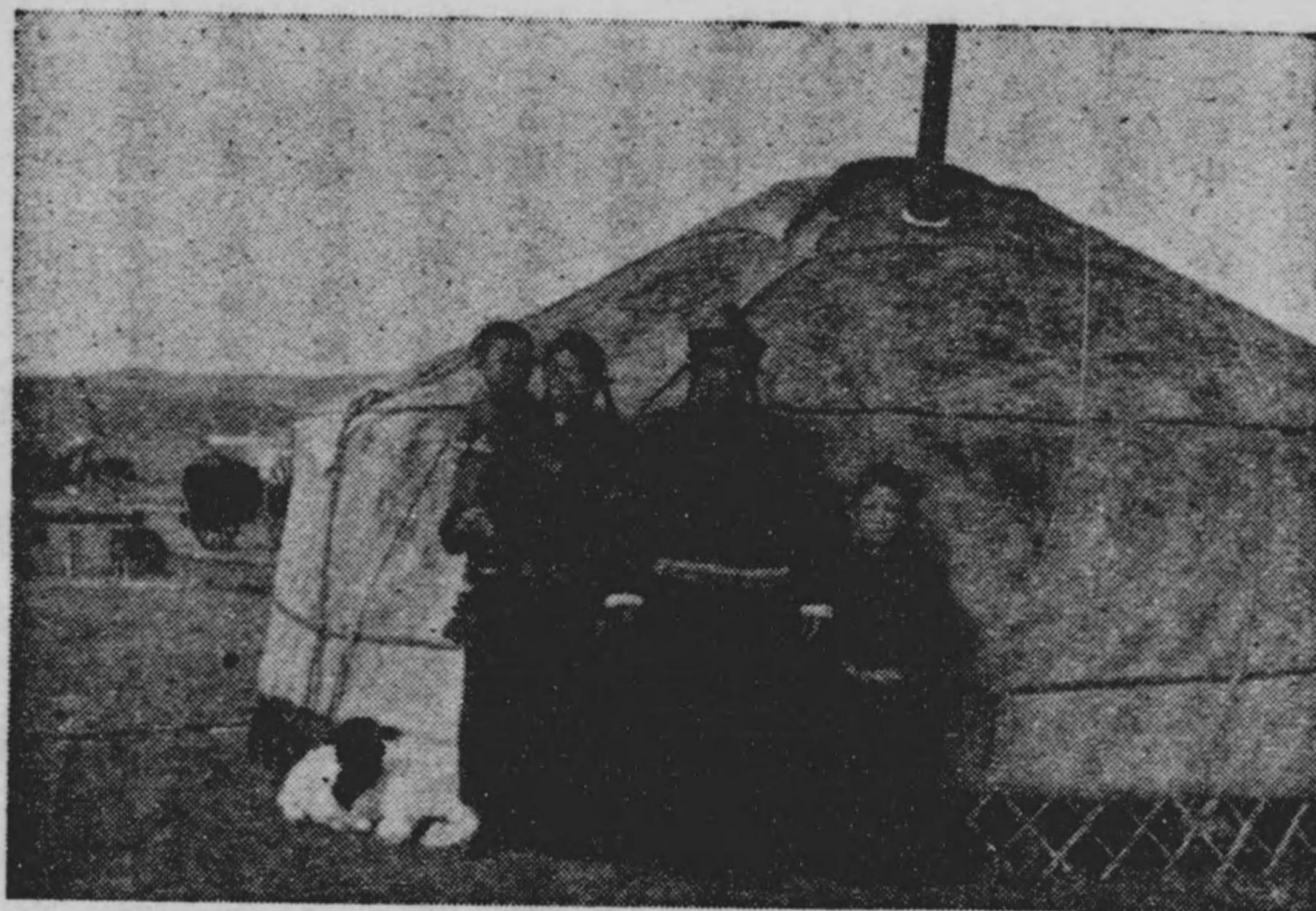
(三) 蒙 古 族

蒙古族は今より七百餘年前、不世出の英傑成吉思汗に率ゐられ一時は歐亞を掩有する空前絶後の元大帝國を建設せる勇敢なる民族であるが、元朝崩壊後は唯の一度も統一國家をなすことなく、現今に至るまで砂草の蒙古高原あつて、専ら水草を追ふ原始的な遊牧を行ひ、封建的社會を維持して來たのみで、政治的、經濟的に、將又文化的に遙かに世界の大陸に隔絶し、更に清朝の蒙古人懐柔政策により勇武なる性質を失ひ、また漢民族の進出により牧地は耕され爾後民族衰亡の一途を辿つて來たのである。されば滿洲國政府は建國以來國土内に最も多く居住する地域を以つて興安各省を設け、蒙古民族擁護のために特別行政区となし、又省外の地方で蒙古人多數有する地方はこれを蒙旗として特別行政の傘下に抱擁して蒙古人の安住地たらしめてゐる。蒙古人の國內人口は約百萬人と稱されてゐる。

この中、今尙騎馬に跨り、放牧を事としてゐるものもゐるが、滿洲族と同様既に漢人化され農耕に従事してゐるも



(濟 閩 嶺 部 安 治) 牧 放 と 包 古 蒙



蒙 古 人 の 装 服 (治 安 部 関 濟)

のが極めて多い。
(イ) 衣 服

蒙古の衣服は支那服と略々同形で、色彩は紅、黄、紺等の濃厚な原色を用ひ、模様は全然ない。蒙古服の特徴として挙げられる點は、(一)上衣の袖が支那服よりも遙かに長く作られて居り、夏はノトラカと稱する部分を折り返して置き、冬は延ばして手の甲を被ひ手袋の代用としてゐる。(二)腰には帯を必ず締めてゐることである。冬季はこの服に毛皮をつけて着用する。

頭髮は一般に男子は辮髪をして居り、女子は未婚のものは髪を左右に分け、これを後頭で結へてお下げにし、その先端に紅紐等を結んでゐるが、既婚の女は髪を左右に分け別に巻いて結へて餘り長くは下げない。これに瑪瑙、珊瑚碧玉等を象嵌せる銀の髪飾りをつける。帽子は男子は青、

黒、褐色で作つた幅の廣い蒙古帽、赤及び黄色の布で作つた圓錐形の冬用蒙古帽或ひは清朝官吏の帽子が時

節或ひは身分に應じて夫々用ひられる。女子は殆んど皆赤色或ひは青色の布を頭に巻いて後頭部に結んでゐるが、冬季には男子と同様圓錐形の帽子を被つてゐる。靴は男女共に獸皮製の長靴を穿く。

以上は蒙古人本來の服装であるが、漢人化された蒙古人は辮髪も行はず、衣裳も支那服を着、殆んど漢人と同一の服装をしてゐるが、唯婦人は髪飾りを垂れて居りこの點が漢民族と異なつてゐる。

(ロ) 食 物

蒙古人の食物は家畜特に羊肉が主食物で、羊肉を骨つきのまゝ荒刻みにして軽く煮、蒙古刀で未だ血の滴るやうな肉を削いで鹽もつけずに食べる。然し牛馬肉は贅澤品とし稀に食べるに過ぎない。蔬菜は如何にと云へば漢民族化せし蒙古人が稀に食ふのみで一般には食せず、穀類(糯米)は若干漢民族より購入し、これを炒り、茶に入れて飲みながら朝食べる程度で補助的食物に過ぎない。

蒙古人は馬乳も用ひるが主に羊、山羊の乳を用ひ種々の乳製品を作る。即ち乳を大鍋に入れて煮沸せる後木桶に移して冷却しながら静かに放置すれば、脂肪分は表面に浮んで凝固しその他は沈澱する。この上層の脂肪分よりなる部分が奶皮子で、下層に沈澱せるものを、乾燥せしめたものが奶餅子である。蒙古人はこの脂肪分に富める奶皮子を恰も我々の菓子の如き氣持で食し、奶餅子は小刀で削つて茶に入れて盛に飲用するが、これは酸味に富み、渴を醫やすと云はれてゐる。又乳よりは獨特の酒を作つて男女共に愛飲する。

嗜好品として茶と煙草があるが、何れも蒙古人の大好物で常に愛用し、特に茶は暇さへあれば飲んでゐる。

茶は磚茶で、これを木臼の中で粉碎して鍋中に投じて煎じ、これに鹽を加へ又屢々牛乳を入れて飲む。尙蒙古人が蔬菜類を殆んど攝らなくとも健康を保持してゐるのは一見不思議に思はれるが、これは絶え間なく茶を常用してゐるからだと言はれてゐる。

(ハ) 住居

現在の滿洲國內に住む蒙古人は、殆んど半牧半農の生活をなし、従つてその住居も蒙古獨特の包は漸次少くなつてゐる。現在移動式包に住む蒙古人は外蒙古と、滿洲國の興安省の西及北部にあるのみで、少數は漢民族式の住居に住むやうになり、一般の半牧半農の蒙古人は固定式の包に住んでゐる。次に蒙古人獨特の住居である蒙古包に就いて書いてみる。蒙古包には固定式と移動式の二種類があつて概してその規を一にするが、便宜上固定式包に就いて説明する。

蒙古包の大きさは大中小の三つがあり、大包は内部の直



(濟閔檢部安治) 居轉の人古蒙

徑六米、中包は四米内外、小包は三米位で、その高さは中央の最も高いところで直径より少しく短かく、大包五米内外、中包三米、小包二米半位である。

固定式包は地盤もよく固め、側壁の下部も埋め、周囲には地盛りをし、側壁に沿ふて石又は木材で圓形に固定した上で、毛氈の側壁を立てる。夏に限つてこの壁を葦の様な植物で造ることもある。上部の蓋も亦毛氈製で、この毛氈は牧畜を生業とする彼等にとつては最も手近かな材料である。牛、馬、羊の毛を糊で固めて壓搾した一種のフェルトである。厚さは大概六耗内外であるが、冬の寒い時にはこれを二重にも三重にも張るのである。包の組立は極めて簡單で、所要の長さの棒を圓圍に立て、屋根には楊柳で造つた棒を傘形に組んで繩でしばりその上を毛氈で覆ふだけである。中央にはかならず臭氣及び煙突用の穴をあけて置く。出入口は東南々の方向に造る。入口には幅一米高さ一米三〇釐(大包は大きい)の木製の扉があり二枚の板が觀音開きに開くやうになつてゐる。包によつては入口にも毛氈の暖簾を掛け、時に兩者を併用してゐる。

包の内部は(圖)に示す通り出入口から中央まで幅約三尺長さ七八尺の間を土床とし、土床の中央に爐を切り一切の炊爨をこゝでする。爐には直径三〇釐乃至四五釐位の鐵の五徳が据ゑてある。この爐に焚く燃料は牛糞を乾燥させたものでこれを草木の稀な沙漠地帯では唯一の燃料である。

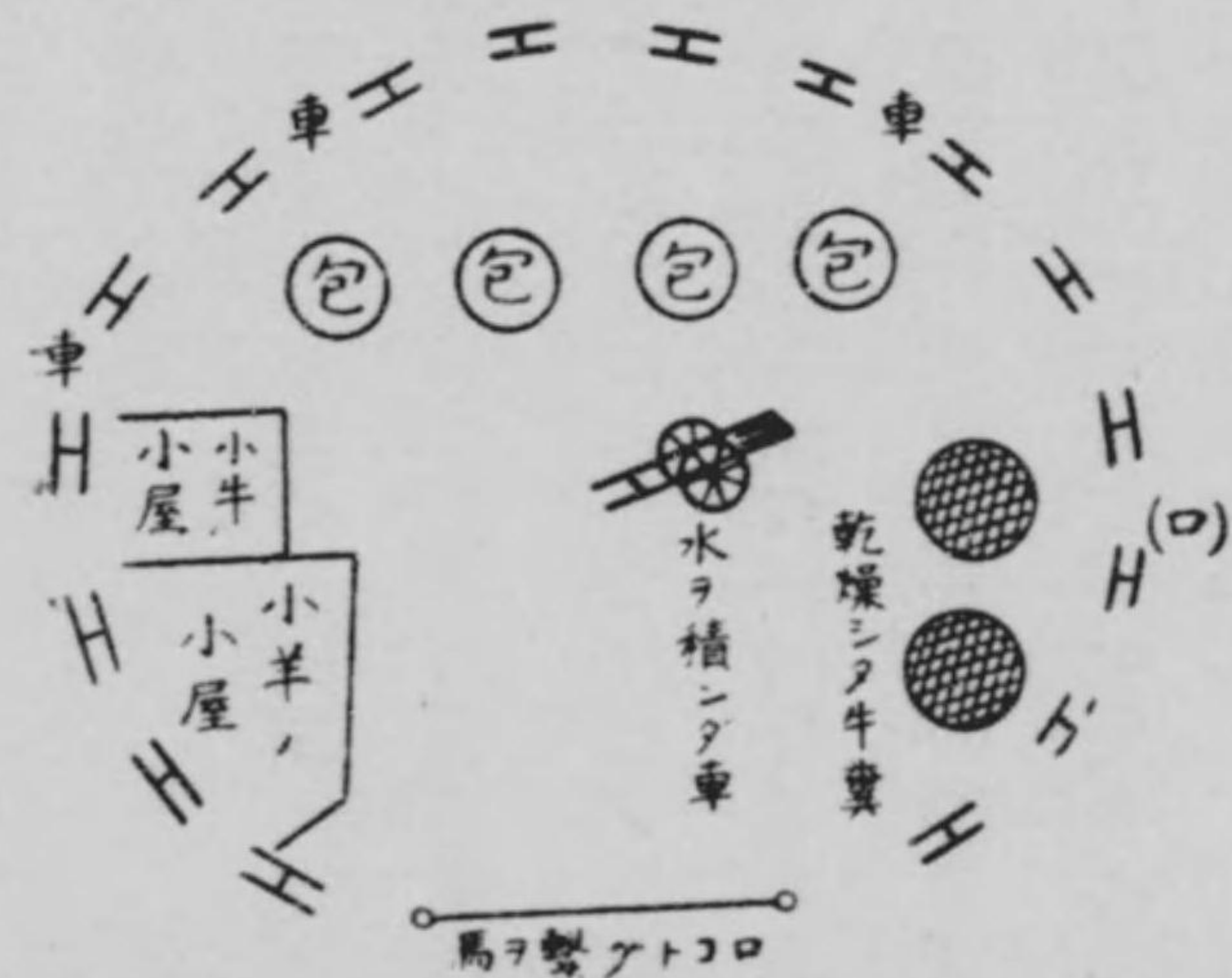
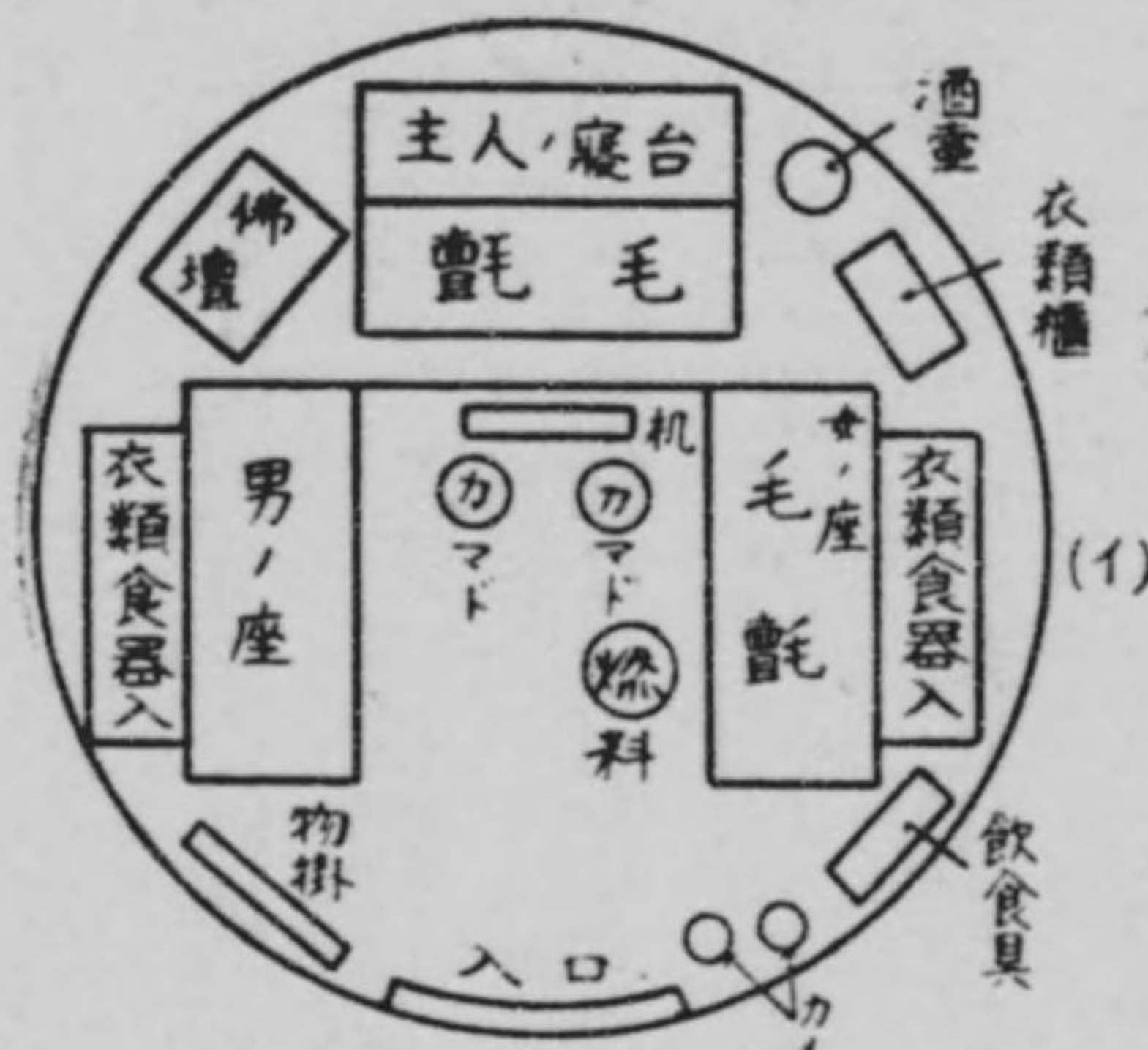
土間の邊には框を置き、高さ五六寸のところを床を造り、この上に毛氈を敷く。

包の正面と左方は男子の座席とし、普通正面が主人の席になつてゐる。正面の少し高いところに木製の着

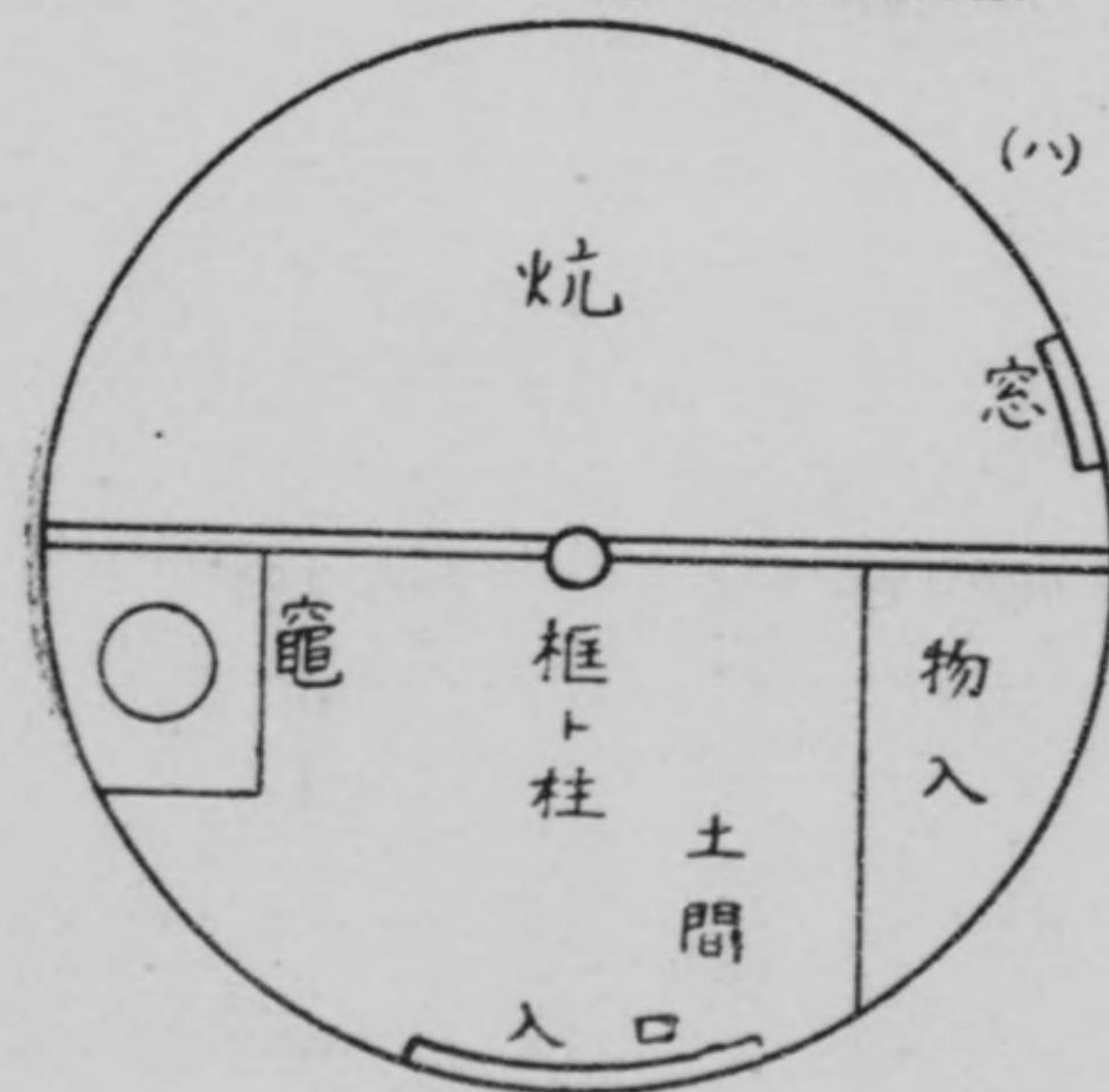
物櫃があり、その左に佛壇を安置し、佛前には佛具や供物を並べ、佛壇の左右には食器入れの棚や食糧入れの箱を置く。主人の座の前に炊事場を設け、そこには牛乳入れの甕等が置いてある。

移動包の内部は殆んど同じ配置である。そして一つの包は専ら一夫婦と眷族に限られ、子弟が妻帯すると新たに一つの包を造つて分れる。従つて大きい家族は二つも三つもの包を持ち、裕福な人程眷族の多いのが普通であるので、かゝる場合は圖(ロ)の様に數個の包を連設してゐる。この數個の包のうち一番左のものが尊族長の住居である。

固定式蒙古包の平面配置



漢民族居住方式の入り取固定式蒙古包内部平面圖



これ等の固定包の周囲には方形、圓形に榆樹の枝で棚を造り、棚の内に車輛を置く。その他乾草の貯藏、碾子、農具を置き外周に沿うて別に木棚を造り牛羊を收容し、或ひは羊毛敷物貯藏のための倉庫を造り、附近に井戸を穿つ。

移動式包とその内部に就いて次に述べる。純牧民式の移動式包のことを(ウ)と云ふ。

純牧民であつても春夏秋冬その移動して行く個所は一定してゐる。夏の居住には漢民族式の倉庫(土圍子)を持つてゐて、冬になつて避寒する時は家具をこの中に藏つて、日當りのよい山の南麓に移住して行くのである。移動式包の組立ては固定式と同様で、より以上に簡單であり、固定式のように周囲を固定する必要もなく、傘の様な折疊み式の半圓形の屋根を、矢張り折疊み式に出來てゐる壁の部分に繩でくくりつけて毛氈を張るだけである。

地上には牛や羊の生皮又は毛氈を敷きつめるだけで、その上に坐臥し固定式のように土間も床もない。この分解組立てには二三人かゝれば二時間で終了すると云ふから、その簡單なことを推して知るべしである。一つの包はその内部の家財とともに牛車一臺に積んで運搬出來る。移動式包の周囲には車輪を置いて柵に代用する。

(二) 蒙古人の年中行事(舊曆)

蒙古人の儀式は獨特のものもあるが漢民族の感化を受けた儀式が少くない。特に漢人雜居地方に於いては

正月の拜賀、端午節、中秋節、重陽節等の漢民族本來の行事を行つて業を休むものが多くなつてゐる。

布和樂と供佛(十二月三十日) 除夕のことで曆が輸入されて始めて正月と云ふものが出来たため、正月としての歴史は比較的新しいのである。

この日早朝豚、羊を殺して熱湯につけ、毛を去つたものを佛前へ供える。菓子、饅頭等も盛られ、一家擧つて朝飯に布和樂と云ふ食事(牛、羊、豚などの肉を大きな塊に切つてそのまゝ出す)をする。夜には佛壇が綺麗に飾られ、喇嘛が来て讀經する。そして爆竹が三發放たれ、ば越年の儀式と佛に對する御禮が済むのである。又漢民族の風習を眞似た壓歲錢を一同に呉れる。この夜最も大切なことは火を絶たないことで、若し絶てば衣食に窮すると云はれる。

交拜(一月一日) 元日の風習は最も漢民族のものを眞似てゐる如く見受けられ格別蒙古人としての正月に特色がないやうである。即ち起きて四方の諸神を拜し、家の佛を拜すると一家のものは皆家長の前に集まり、跪いて敬意を表し、家長からはめでたい言葉がかけられる。

廻禮(一月五日) 四日までは概ね家に居て楽しみ五日頃より親類等を廻る。新婚夫婦の如きは是非何を措いても舅家に行かなければならない。この場合先方では烏叉(ウイチャ)(羊豚の後脚の股肉)を御馳走する。

祭星(一月八日) 一部落の共同祭禮で、星が満天に輝く頃を見計つて喇嘛の讀經が始る。参集せる老弱男女は自己の歳に相當する歲錢を献じ會費を分擔し、線香を焚き喇嘛にきかされてゐる自己に屬する星の前に行

つて拜み、且つ四方の神を拜して儀式は終了する。

打花脛と撒供(一月十六日) 嫂と弟、弟の嫁と兄といった間に互に墨と油を交ぜた眞黒いもので塗り合ふ習慣がある。うまく塗りつけるとその年の穀物に烏朱が出来ないと云はれてゐる。夜星の出揃つた頃各家庭に於いては正月以來佛前に供へたものを撒布するのである。

出行 正月が過ぎて十五日頃までの間を吉日を選び、男子は騎馬で出行と云つて二、三支里位のところへ出かける。出發に當つてヒイメルと稱する咒符を四方に撒布する。これは何の方角にも自分の運氣が散つてゐるため安心して何處へでも行くことが出来ると云ふ意味からだと言はれる。

旗鄂博の祭(五月十三日) 主祭者はその旗の王爺が自らこれに當り、旗内の住民は殆んど數を盡くして参集する。これも喇嘛の讀經があり、終つて肉粥の寄進にあづかる。尙、主祭はこの時競馬のことを宣して餘興に移る。

村落鄂博の祭(五月十五日) 祭神は村長がこれに當り、祭禮用の品物も祭禮の様も旗鄂博祭と大差はないが、たゞ餘興として競馬の代りに角力が多く行はれる。

(註) 鄂博(オボ)と云ふのは蒙古語であつて堆と云ふ意味でこれに石又は土を堆んだ二種類がある。その形状は一般に尖頂の圓形である。蒙古人は由來天地山川豁谷原野等皆これを神と視て居り、従つて何を見ても有難いと云ふところより遂に鄂博なる標式が出来て仕舞つたのではないかと云はれてゐる。何れにしろ鄂博は天地崇拜の對象で急ぎの旅の外は途中馬を下りて禮拜する

太平經 六月、七月頃各部落は喇嘛に請ふて太平經を讀む。この喇嘛を招いた家には親類、朋友が畜類までつれて参集し、家族と家畜の太平を願ふのである。その時家畜が懐胎して居れば喇嘛は紅い布を尾や角に結びつけて一切殺すことをしない。これを太平紅と云ふ。

祭火(十二月二十三日) 火神を祭り福縁を願ふのである。喇嘛は「福縁は来たか」と三度問ふ。主人は三度來たと答へ、一切の祭品を火鉢の烈火に投じて神に酬ゆる。

掃塵 十二月十三日を過ぎれば諸神が上天するため、その留守中年末の大掃除をして正月を迎へる。

打鬼 悪鬼を殺し、太平を祈る儀式で、観音の化身に扮するもの四、その守護神に扮するもの八、併せて十二の神が跳舞して出で、又別に十地菩薩に扮せる喇嘛十人が出でこれに多數の喇嘛鼓と鉦とを撃ちその調子の緩急につれて跳舞する。この時牛と鹿の面を被れる僧が刀を持つて出て地を砍つて鬼を殺す風をする。

(四) ロ シ ヤ 人

ロシアは清朝時代より漸次滿洲にその魔手を伸ばし、日本の安泰を累卵の危きに至らしめ、遂に明治三十七、八年の日露戦役となつたが、日本に大敗を喫し、これよりロシアは滿洲に於ける勢力を漸次失ひ、而も滿洲國建國後は滿洲國の東支鐵道買収により、完全にその勢力を失ふに至つたもので、これは餘りにも著名な事實である。東支鐵道がロシアより滿洲國に讓渡されて以來、東支鐵道従事員を始め、それを目的とし



るへ備に健保の冬てし浴に光日分充夏は人ヤシロ

て商賣を營んでゐたロシア人は殆んどロシア本國に歸り、現在滿洲に居住してゐるものは種々の事情により本國に歸れなかつたもの及びロシア革命によつて逃避して來たものであつて日本人間に於ては一般に白系露人と云はれてゐるものである。(白系露人と云ふのはロシア革命によつて逃れて來た帝政時代の軍人)

現在滿洲國內には濱洲線及び濱綏線(舊東支鐵道)沿線に最も多く居住してゐるが興安北省三河地方にも居住してゐる。前者は鐵道沿線の各驛を中心として主に農業を營んでゐるが、鐵道警備の任についてゐるものも少くない。哈爾濱、新京の如き北滿の大都會では毛皮商或ひは各種食料品店を經營してゐる。後者即ち三河地方に居住するロシア人はロシア本國革命によつて逃れて來た軍人であると云はれ該地方に於いて農業を營んで自活してゐる。

而してロシア人は從來寒地に居住し、而も可成り高度の文化を持つた民族なるためその生活状態には日本人の滿洲

生活上参考とすべき長所を多分に有して居る。

而して日本人が比較的無關心の夏の生活に於いて、哈爾濱に居住するロシア人は寫眞の如く松花江岸に密集して、水浴びを行つてゐるものも少くないが、別に水浴する目的でなく海水着を着て日を過してゐるものが少くない。これは一體何を意味するのであらうか。その目的とするところは來るべき冬、而も日が短く日光浴の不足する冬季を健康に過さんがための一動作である。ロシア人の生活の注意深きことは衣食住に於いても充分見られる。

(イ) 衣服

ロシア人の衣服は都會居住者と農民とは可成り相違があり、都會居地者の衣服は我々の見聞する西洋人のそれと異ならないが、農民の服装特にロマノフカ村(濱綏線)のロシア人服装は昔のロシア農民の服装そのままを今に傳へて居り、女は總べて頭に美麗な色彩の頭布をかぶり(都會地のロシア人でも春季頁の激しい時又は嚴寒期には、防塵、防寒用としてこれを被り、日、満人間に於いてもこれを實行してゐるものがある)、肩より吊る様になつた前掛をかけ、帶紐をして居る。又男は日曜祭日には赤、綠等で色彩あざやかに施されたルバシカを着、手編の帶紐をつける。

ロシア人は衣服に就いては滿洲生活上合理的なる觀念を持ち、その特記すべきことは冬季に於けるその取扱ひ法にある。即ち冬季室内にゐる時は室温に適せる服装をしてゐるが、一旦外出するとなるや衣類を増し

又如何なる近距離の處へ行くにも必ず外套を着用し、再び室内に入つた時には外套を直ちにぬぎ、日本人の如く何時までも外套を着用してゐないのである。

(ロ) 食物

ロシア人は食物に就いても可成り深長なる態度をとつて居り、日本人が滿洲生活を営む場合、漢民族の食物と同じく學ぶ點が多い。一般家庭に於いても地下室を設けてこゝへ生野菜を貯藏し、又胡瓜、キャベツ、まくわうり、西瓜トマト等を特殊な漬物として保存してゐる。又乾燥野菜も盛に各家庭で作り、南瓜、人蔘、赤かぶ等はその主なる材料で、これを細刻して露式ベーチカ(掃房の項参照)の中で乾燥して冬季の蔬菜類缺乏時期に備へてゐる。

ロシア人の習慣として朝夕はパン、じゃが薯、紅茶、牛乳、スープ、ソーセイヂ等で簡単にすますが、晝は時間と金をかけ肉類を多く用ひ、一日の中で最も豪勢な食事を攝る風習がある。



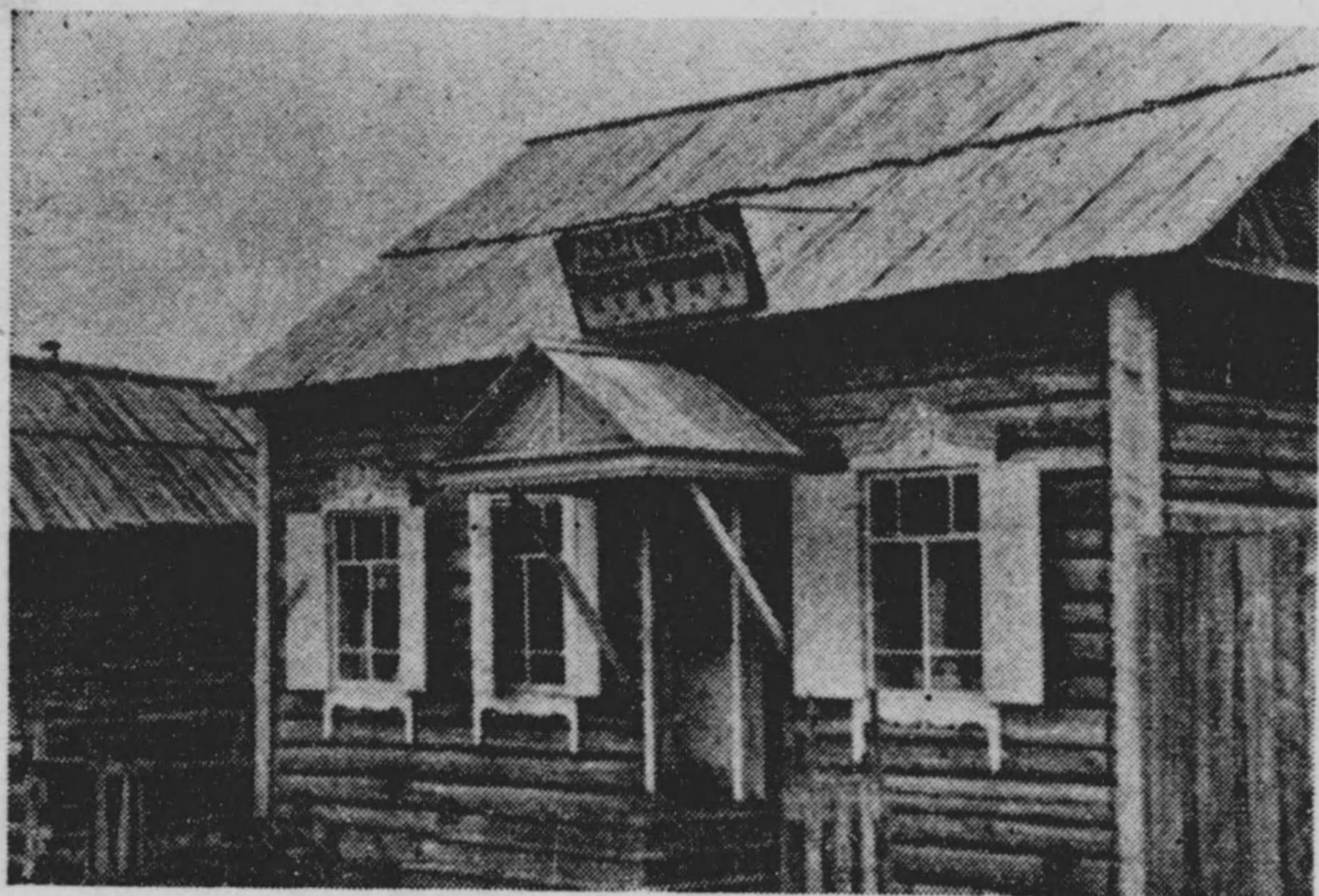
態状飾装内室の人ヤシロ

彼等の食物は元來寒地に發達せるものだけに、支那料理と同様、油濃いものが多く、而も彼等は四季を通

じ盛にじやが薯、牛乳を利用し、又都會居住者は林檎も頗る愛用してゐるが、それは滿洲生活保健上、合理的な飲食法と云へよう。

(ハ) 住 宅

ロシア人の住宅と云つても、洋式に過ぎないが、滿洲では壁體頗る厚く、新京附近に於いてもその幅五〇厘に達するものが少くなく、在滿邦人の一般住宅の壁體の厚さ三、四〇厘位なるに比べ遙かに厚く造られてゐる。窓は二重窓で開閉（観音開き）の出来る窓もないではないが、開閉の出来ない窓の方が多く、その場合は普通上部に廻轉式開閉小窓が取りつけられてゐる。而も窓には観音開きの板戸さへとりつけられて頗る防塞的に作られてゐる（板戸のない所では内部よりカーテンを一般につける）。斯くの如く防塞的に造られてゐるだけに四季を通じ室内の換



築 建 造 木 の 人 ヤ シ ロ

氣は一般に悪く、特に冬季ロシア人はボテ、絨氈等を用ひて完全に目張りを行ふ性質があるので相當非衛生な室内にゐることになる。然しロシア人は冬季と雖も努めて外出を行ひ、室内の空氣が悪くとも常に健康を保持し、且つ乳幼児の如きも毛布等で充分包んで外出する（この習慣は滿洲人にも時々見られるが、日本人には殆んど見られない）。

室内は間數の多少によつて臺所、食堂、居間等を夫々別々にし或ひは適宜臺所と食堂、食堂と居間と云ふやうに兼用してゐる。臺所の中心は竈であるが、物を調料する場合その餘熱を以つて室内が暖めらるゝ装置となつてゐる。竈の側には料理臺付棚が竝んでゐるが、棚には料理に必要な器具が入れられてゐる。

室内の裝飾は周圍の壁を利用し頗る巧みである。今その例を擧げてみると、部屋の出入口は三方カーテンを吊し、又窓にはカーテンとレースを吊し、以つて出入口を始め、窓に温か味を添へ、部屋の周圍にはベツト（居間と兼用の時はカーテンを天井より吊す）、食器棚、長椅子、机等を置く。而して机とか額縁入りの親の寫眞、兄弟姉妹、子等の寫眞又友人よりの贈物、旅行先の土産物等は夫々机の上に竝べ或ひは壁の上にかける。又窓側テーブルには必ず少くも二、三鉢の常緑植物又は草花を置いて室内に新鮮味を加へてゐる。

尙、ロシア人の室内を述べるに當つて記述を怠ることの出来ないのは、その最も神聖なる場所に必ず聖像を祭つてゐること、ロシア人は朝夕規則正しく禮拜を行つてゐる。

(二) 年中行事

ロシア人の家庭には各種の年中行事があるが何れも豊富な御馳走とウオツカと民謡はいつも重大な役割を演じ、僅かな収入と切りつめた日常生活にありながらその生活を存分楽しんでゐる如く見受けられる。彼等の酒宴は慶びを領つ氣持より自分等が苛酷なる自然或ひは人生の中に太くたくましく生きて行ける喜びを遺憾なく發散させる氣持の方が遙かに多く、大晦日、元旦(露曆一月元旦)その他は單なる名目に過ぎないと思はれる程放恣に享樂する。

クリスマス 一月七日のクリスマス、イヴより一月十九日の洗禮祭までの二週間が所謂「ヨルカ祭」とでも云ふべきもので、露人の家庭に於いてはクリスマスを控へて、飾物、食物、贈物の準備に多忙を極める。外國のクリスマスと同様で特別相違するところはないが、キヤビヤ(テフザメの卵)、イクラ(筋子)を鱈腹たべ、ウオツカの酔にまかせ盛に氣焰をあげ、唄と踊に夜を徹する。復活祭と共にロシア人の二大祝日である**氷上祭** 露曆の一月六日、陽曆一月十九日頃に行はれる。キリストがヨハネに洗禮を受けた所謂洗禮祭である。ハルビンでは早朝市内各寺院へ押し掛け、打鳴らす祈りの鐘と暗い蠟燭の光で心からなる敬虔な祈りを捧げて後、金欄の大幟、聖像を押し立てながら松花江へ長蛇の列を作る。酷寒零下三十度の氷上にたてられた大十字架(氷上祭の前日立てらる)又氷の切目より水の淀むのが見える。氷製の祭壇の前で儀式が行はれて後嚴かなる讚美歌の齊唱裡にスンガリーの水で洗禮を受ける。

(註) 松花江は夏季は混濁せる水が滔々と流れてゐるが、冬は水が著しく減少し六〇厘餘の水が張りつめ、その下を流れる水

は頗る透明で、この水を飲めば一年中病にかゝらぬと云はる。ロシア人は當日瓶を持ってこの水を汲んで持ち歸る。尚ハルビンの如く盛大に行はるゝ洗禮祭は世界にも甚だ稀と云はる。

猫柳祭 四月の初め、猫柳を持った善男善女が寺院に參詣する。イエスがエルサレムに入つた日を祝ふもので、墓地には猫柳が供へられる。永い冬籠りより漸く解放された喜びを感じるのである。

復活祭 猫柳祭の約一週間後に行はれる。希臘カトリックの復活祭は毎年一定してゐない。普通露曆三月二十一日以後の満月に次ぐ第一日曜となつてゐる。この各寺院より「主は甦り給へ」の聖鐘が響くと共に老若男女、知人たると否とを問はず自由勝手に接吻する習慣がある。尤もこれは最近祝ひ廻りの客との間に限られるものゝ如くである。復活祭は日本のお盆、正月のそれにも増して一年中の稼ぎ及び精魂を盡せる御馳走をして悔ひない。

青草の祭 復活祭の第一日目より數へて五十日目に行はれ、實際は三位一體祭と稱すべきもので、この日は各家庭に於いて床に青草を撒く。

(五) 漢 民 族

漢民族は現在の滿洲國總人口の八〇%以上を占め、人口に於いて滿洲在住諸民族の首位を占むるのみならず滿洲國に於ける社會的に、經濟的に、又政治的地位に於いて頗る重大な存在となつてゐる。

現今、斯くの如き状態にある漢民族も、元は北部支那より滿洲國中央の沃野に移住し來たつた民族で農業を主業とする所謂農耕民族である。これを文献に徴すれば漢民族の滿洲移住は周代若しくはその以前より始まつたものゝ如く、漢代に至つては甚だ活潑なる移動が行はれた。續いて渤海、契丹、女眞等に對する彼等の影響も強きものがあつたが、清朝の興起すると共に、滿洲封禁の政策がとられたため、少くとも表面上一時漢人の滿洲進出は不可能となつた。それにも拘らず公の眼を掠めて潛入せる者は相當あつたらしく清朝の衰へるに及んで漸く盛となり、十九世紀の後半清朝の倒壊すると共に決河の勢を以つて滿洲へ流入するに至つた。かくて漢民族の滿洲進出は古くよりこの地に先住せるツングース民族を壓迫して東北に退かしめ、又蒙古民族の居住地たる草原を耕作して西北に追ひ、而も滿洲到る處先住諸民族と漢民族との雜居地帯を現出しつゝ後者はその人口、文化の程度に於いて斷然前者を壓し、漸くこれを同化する過程を示した。

然るに滿洲事變が勃發し、滿洲國出現の結果は、上述の如き漢民族の無制限、無秩序なる流入が不可能となり、自ら故郷へ歸つたものもあつたが大部分は滿洲國に止まり、現今は滿洲の中央は勿論のこと、北滿の奥地大興安嶺の森林中にまで營々として働く漢民族の根強き姿が見られるのである。

而して漢民族は過去數千年に亘つて大陸に居住し、その生活様式は他の民族に比し最も大陸に即したもので、滿洲に生活する日本人の参考すべき長所を先のロシア人と同じく多分に有してゐる。

(イ) 衣 服

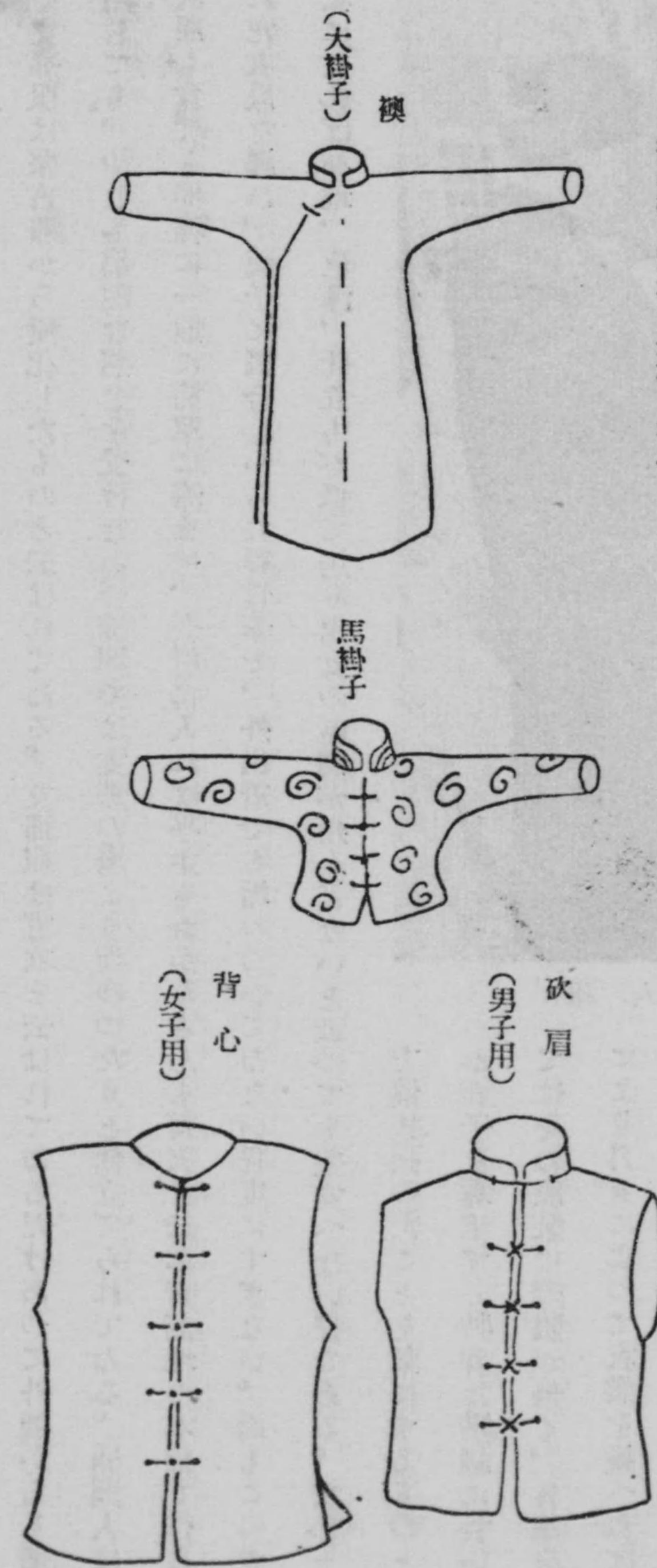
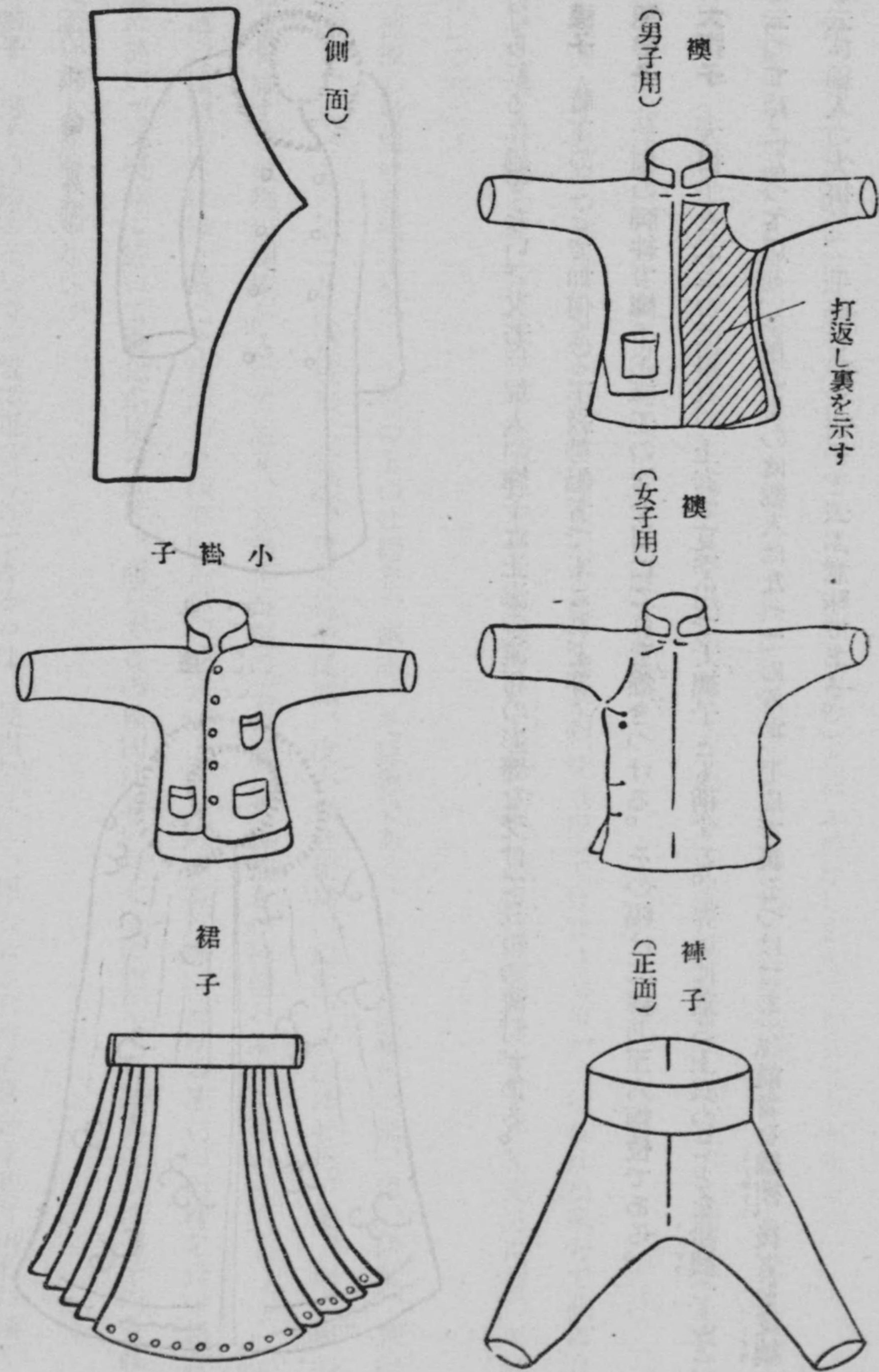


裝 服 の 人 滿

支那服は蒙古服から變化したものと云はれてゐる。支那服は寛衣と云はれてゐるだけあつて外觀からも着用しても、少しも窮屈な感じを受けない。滿洲では支那の服より尙ゆつたりと仕立てられてゐる。滿洲人は衣服も食住と同様に一般に簡単に濟ませ、農村に入れば亭主もおかみさんも青衣と云ふ青無地の木綿で作られた衣服を纏ひ、面子に似合しからぬ程質素で、外出着でも垢のついてゐない程度にすぎない。而もこの青衣になれば布地、色澤、仕立方が似て居り男女の區別が殆んどないと云つても差支へない程である。然し一

方儀式張つたことを氣にするものとか面子を尊重する特殊な階級に於いてはその服裝に際限が無く、各季節により月々によつて衣裳を換へねばならぬ面倒な習慣がないでもない。支那服は小褂子・褲子・襪子・腿帶子・大褂子・馬褂子の部分からなつてゐる。

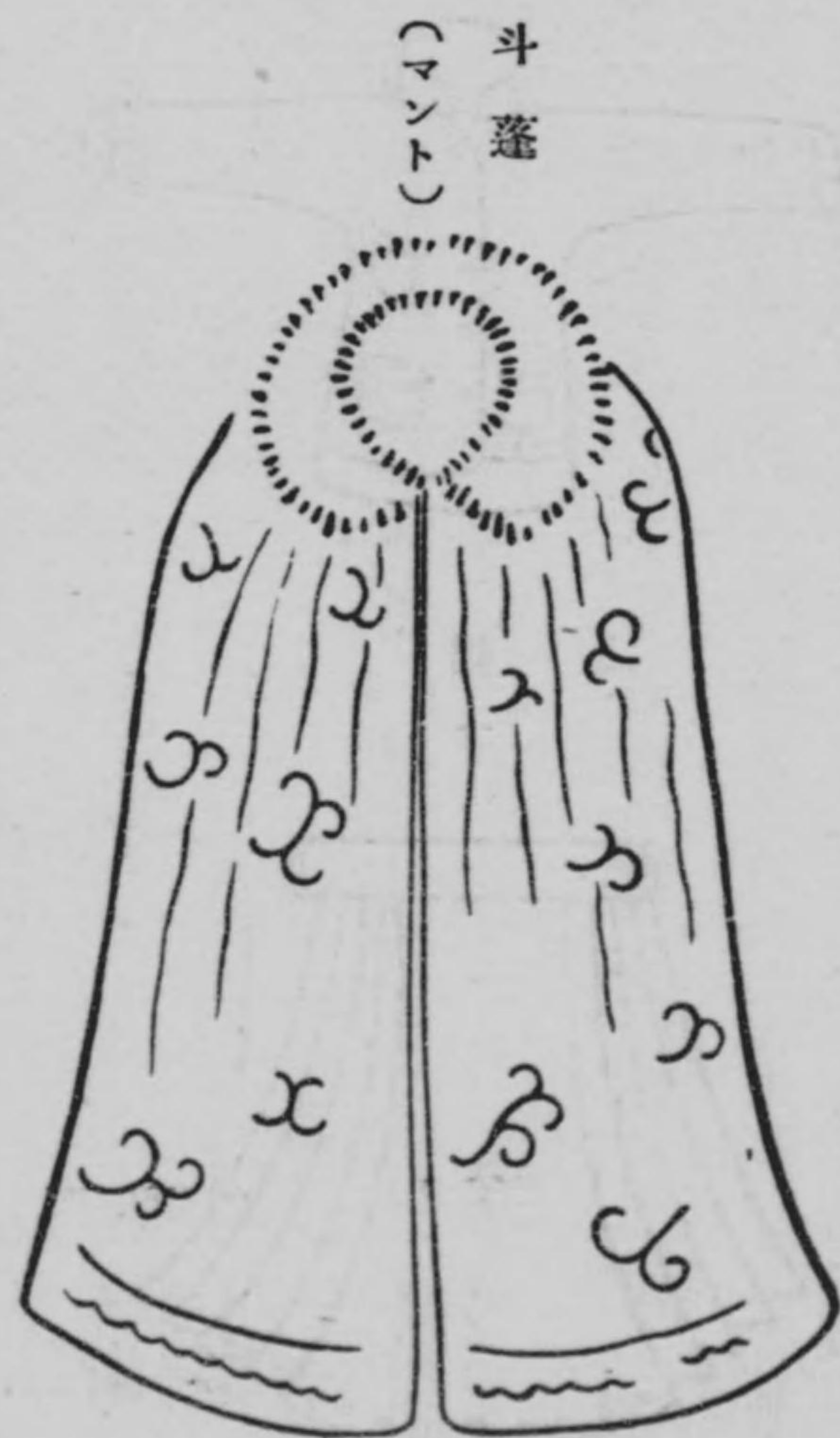
小褂子 袖なしの襦袢で夏季には汗取りの用をも兼ねるものである。



時期により小袴襖(春秋)、小綿襖(冬)を用ひる。
 袴子 スボンのことで股の上が極めてゆつたりと作られてゐる。これを穿き體に合はせ腹部の所で折曲げ帯子(帶)で締める。然し労働者の如きはこの帯さへ使用せずして袴子の合せ目の部分を端折つて内側へ挿込んで置くだけである。
 尚、婦女子は本來は裙子(ヘレンツ)を穿くのであるが、近頃は都會では袴子が多く、裙子は女學生に於いて僅かに見
 襖は袷、單衣を長衫と云ふ



大 嚙 (外套)



斗 蓬 (カント)

受けられるに過ぎない。又若い婦人の褲子は上海の流行の影響を受けて長短の流行がある。

襪子 靴下のことで如何なる下級労働者でもこれを書く。

腿帶子 一種の脚絆で褲子と襪子の合せ目にこれを巻きつける。その幅は三纏乃至六纏位である。

大褌子 大褌子と云ふのは單衣の上衣で夏季用で大褌子とも稱する。春秋に着る上衣のことを給襖(子)とも云つて給になつて居り、冬用のものは綿入になつてゐるか、毛皮で裏をつけてある。前者を綿襖、後者を皮襖と云ひ綿入の大褌子、毛皮付の大褌子と云ふ意味である。

馬褂子 簡単な禮服で日本の羽織の様な格がある。清時代の軍人が着てゐたのが民間に移り、何時のまに

か禮服になつたものと云はれてゐる。

尙、非公式の時には砍肩又は背心(チョツキの如きもの)と云ふ袖なしを着てゐることがある。

支那服を着てゐる状態を見れば、ズボンや上衣は和服或ひは洋服の如く折目の線がはつきりとつけられてゐない。寧ろ之を目立たない様にして着てゐるが如く我々日本人には感じられる。たゞみ方も簡單で上衣は袖を背中合はせにして下の方で二つに折る程度である。

滿洲人は被服の簡單なものは家庭で作るが大抵は成衣局(仕立屋)で仕立させるか、或ひは出來合で間に合はせ洗濯も普通の服は仕立直しや洗張りをせず丸洗ひをする。然し高價な衣服は手入を平常充分に行つて保存してゐる。

被服の材料は普通木綿で、上等のものは絹布、麻布、毛織物である。色は普通單色の黒、青、淺黄、黄白赤等で、良いものはこれに雷紋形、雲縞、唐模様や鳳凰、虎の如き瑞鳥、瑞獸、或ひは牡丹、蘭、菊、梅の如き愛好する植物の圖案が入つて居り、又壽とか福の字の崩した線描きの模様のもも多い。

流行は以前には餘り激しくなかつた様であるが、近來は上海、天津等支那に於ける流行の影響を受け相當型に於いて又模様は於いて變化が見られる。而してこの傾向は若い婦女子に強く、老婦人或ひは男子のそれは若い婦人程著しくない。

帽子 男子の帽子として一般に用ひられてゐるのは、便帽兒又は小帽と云ふ六辨に縫合はせた椀形の帽子

で、その頂端には更に各色の紐物或ひは寶石の摘みがつけられてゐる。この摘みの色は習慣上なか／＼重大な役割を有しこの帽子を被つて人を訪問する場合には行先の家の状態によつてその色を變へなければならぬことが往々ある。即ち紅は結婚、壽祝、誕生、開店等慶事に用ひ、普通紅色の絹紐をまるめたもので、紳士間では珊瑚珠、紅玉の如き寶石をつけてゐる者が多い。又平常の好みより紅の摘みをつけてゐる者もある。黒は最も無難な平常用である。白は父母の喪中の時か子供を亡くした時に使用される。尙、便帽子の材料は黒絨、緞子、天鵝絨、綿布等が用ひられる。その他の帽子に就いて記してみると次の如くである。

毡帽 織物製の帽子で多くは労働者が被り、必要に応じて耳や額を覆ふ事が出来る様に垂れがついてゐるものと然らざるものがある。實用としては最上のものである。

草帽子 高粱稈製の圓錐形をした帽子で農民が常用して居るもので恰も日本のスゲ笠の如きものである。



以上が昔からあり、今なほ盛に用ひられてゐるものである。昔の支那風俗の代表である頭よりスツポリかぶる處の頗當てのついた男子用の風帽とか女子用帽子の兜は現在では殆んど見られない。尙若い満人男子間にはソフトの如き外國帽子が被られるが、婦人は外國型の帽子すら被つてゐない者が多い。

履物 履物は渡來履物の影響を受けて從來用ひられてゐたものも壓倒されてしまった。例へば油鞋(油靴)の如く雨天用の桐油を引いた布製の靴は、ゴム靴によつて殆んど都會では見られなくなつた。滿洲の履物は底に紙、布、皮の類を用ひ、上面は襦子、綿布、紗、羅紗、ネル等いろいろなものを使用する。靴には短靴に相當する鞋子と、長靴に當る靴子とがある。鞋子には昔は種々の裝飾がついてゐたものであるが現今はたゞ婦人靴に時折見受けられる程度で男子は模様のない所謂素鞋である。その他鞋子と靴子の中間のもので快靴と云ふのがあり、これは以前乗馬用として用ひられたが軽快なところより、一般に廣く穿かれる様になつたものである。その外に澤山な靴の種類があるが、一風變つた靴に一枚皮で巾着風に紐締とし、その中に冬季は防寒用として軟く叩いた乾燥靴草を入れて使用するものがある。この植物の名をとつて靴草と云はれてゐるが、現今はフェルト製の防寒靴に押され、僻地でないと思はれない。

(口) 食 物

滿洲料理も支那料理と同一系統のものである。支那料理は世界各國の料理中第一の技巧を持ち、その右に出るものはないが、その反面材料の眞味を發揮せしめる點では日本歐米の料理に劣つてゐる。支那料理は凡そ北、中、南の三系統に分けられるが滿洲料理はその中の北京料理に屬するもので、中支南支のものに比べると味が濃厚で鹹味が強く湯羹は少く、寒い滿洲の地に至極適した食物なるため日本人にも喜ばれ、その料理屋は日本人間の會食にも盛に利用されてゐる。然しその料理法が日本人の家庭で應用されてゐるのは僅か

な種類に過ぎない。

一、主 食 物

滿人の飲食物はその生活状態によつて上級、下級に區別せられこの兩者間には甚しい差がある。

農民や都市の下層労働者は高粱、小米(粟)、包米(玉蜀黍)、大豆粉を主食とし、米飯を食べることは殆んどなく副食物も植物性で動物性の食品を用ひることは少い。一般に生葱、大蒜を好み、路傍の飯屋で薄粥、雜饅饅、饅頭等で簡単に食事を攝つてゐる者が多い。食事の時間は一定してゐるが回数は一、二回が普通である。中流以上の家庭では主食として大米(米飯)及び高粱、小麥粉をその材料とし、副食には比較的動物性食品を攝つてゐる。然し米は一日に一回用ひる程度である。尙間食には點心と云つて菓子、果物、麵類等を用ひる。

主食には飯及び粥の様な湿性のものと、饅頭、餅の様な乾性の二種類があり、後者は携帯に便利で保存にも適する。又日本人には豚饅頭として知られてゐる餃子及び包子の如くメリケン粉を材料として中に肉餡を入れた食物があるが、肉餡とは云へ種々の野菜が切りまぜてあるので一品でも各種の栄養素を豊富に含んでゐる。これ等の主食物を交互に用ひることは生活を合理的ならしめるのであつて殊に朝夕の炊事に多くの時間と費用とを費す日本人には参考とすべき點であらう。

二、副 食 物

材料、料理共に多種多様で中流以上になると専門の炊事夫を備ひ、相當の献立のもとに惣菜を調理させる下流社會では牛骨等のスープ、或ひは豆腐、野菜の油でいためたもの、味噌をつけた生葱、漬物などで食事一茶が普通のやうである。支那料理で特筆すべきことは、動物の臓物や皮は勿論、腦髓等食用になる處は總べて食用に供し殆んど捨てるところがない。次にその主な材料を示してみよう。

イ、肉 類 豚、羊、鴨、鷄、鶩、鳩、鶩、雉等。

ロ、魚貝類 蟹、蝦、鮑、蠣、蛤、海鼠、木母、鯉魚、鯰、白魚、鮒、ヒメハギ遍花魚、グチ、太刀魚、鰈、

ホウボウ、蛙等(鯖、鱈等は好まぬ)。

ハ、蔬菜類 葱、大蒜、萵苣、白菜、瓜類を愛好する。その他各種蔬菜。

ニ、果實類 鮮果(桃、梨、林檎、柿、マクハ瓜等)

乾果(落花生、蓮の實、胡桃、栗等)

ホ、其 他 菌類、筍類、種物類

これらの食品中肉類は決して生食しないが蔬菜類はかなり生食する。

支那料理の材料に魚翅(鱸の鱗)、燕巢、銀耳(白キクラゲ)があるがこれは高價で日常の家庭料理には用ひられてゐない。宴會ではその卓の格をつける代表的料理が出るが、燕の巢を用ひたものであれば燕菜席と云つて最も格式が高く、魚翅の料理が出れば翅子席で中等、海鼠であれば海參席と云ひ最も普通な卓である。

三、支那料理の名稱

支那料理はその名前を見れば大體その調理法が解る。代表的なものの上げると

炸油で揚げたもの。

炒炸より油を多く用ひないでためる程度のもの。

煎いためて後に煮た料理。

溜アンカケ所謂「葛カケ」で油で揚げたものゝ上に葛をかけたもの。

膾油でいためた後汁を充分にしてよく煮たもの。

烹油を少くして火力を強くし、材料を入れて直ぐとり出す料理。

湯菜汁物

川スープが多く、中に入つてゐる種物の少い時に川と云ふ。

熬汁物で湯と川との中間で餘り汁が多くも少くもないと云ふ料理。

燜弱火で、蓋をしたまゝ長く煮たもの。

燒一度油でいためるか、焼くか或は炙るかして後鍋で煮たもの。

嫩汁をタツプリにして、時々蓋をあけて見乍ら煮た料理。

蒸蒸す料理。

烤遠火であぶる料理。

燻煙で品物を燻べたもの。

醬味噌を用ひたもの。

蜜餞蜜印と砂糖を使つて拵へたもの。

拌和へ物。

拾酢又は酒で酔ひ殺すと云ふ意味である。

火加減は材料の性質によつて別にする外、油でいためるにも強火、弱火、その中間等の火加減が巧みである。材料の種類が豊富であるのに調理用器具は割合簡單である。

四、調味料

豚油、大豆油、胡麻油の油類を多量に使用する。鹽は油と共に絶對必要な調味料である。その他醬油、味噌、醬(味噌を胡麻で練り砂糖を加へたもの)、酢、砂糖等が多く用ひられ、近來は日本製の味の素とか味の素、ソース等も盛んに用ひられる。

五、嗜好物

酒類 酒は多種あるが滿人に愛飲されてゐるものは次の様な種類がある。

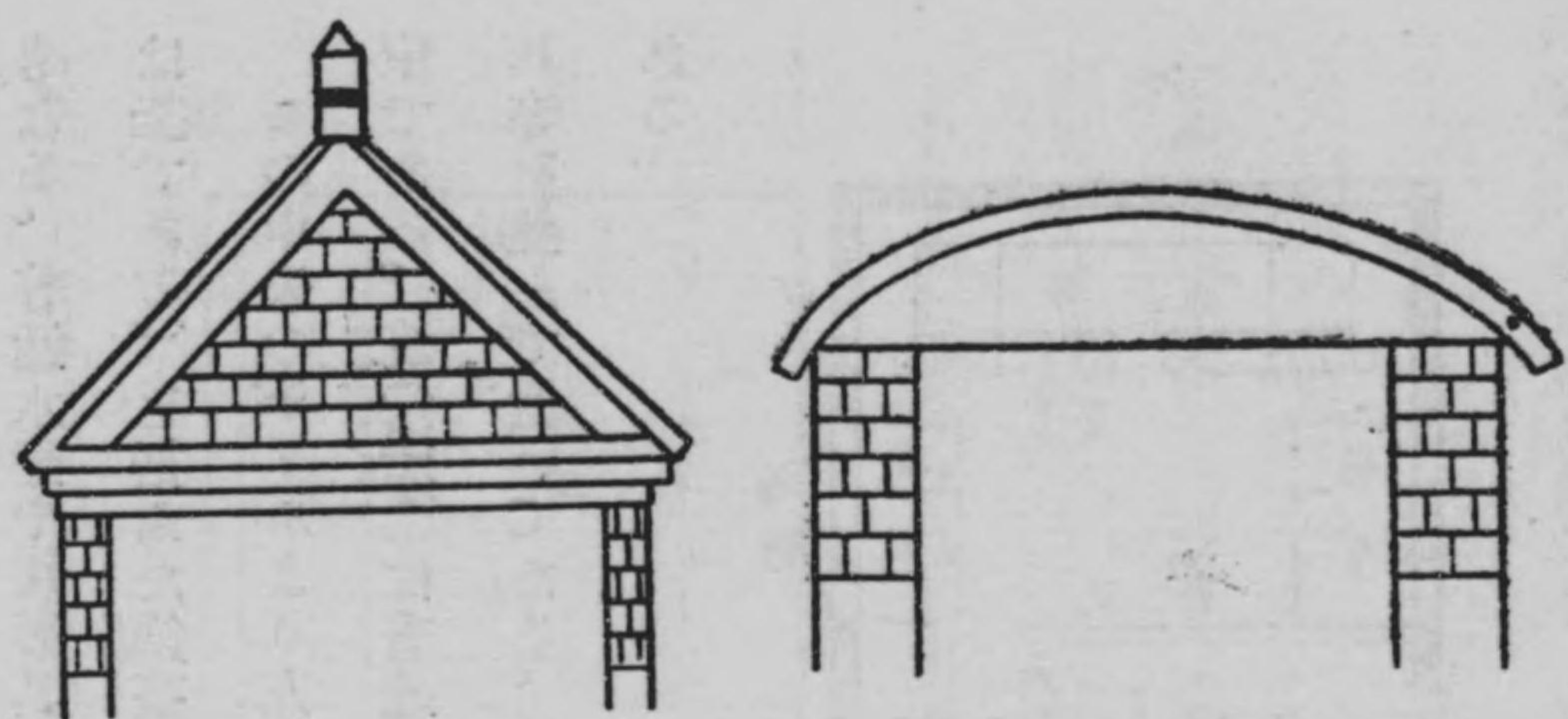
高粱酒は高粱を原料とした無色透明の異臭のある酒で、日本の焼酎より遙かにアルコール分に富み、その

含有量は五五・〇%である。一名白乾兒酒とも云はれ、これは滿洲土語でこの場合には玉蜀黍を原料として醸造した焼酎も含んでゐる。大豆油と共に滿洲に於ける二大農産物加工品で各地で醸造される。黄酒の主原料は粟で俗に老酒とも云はれてゐるがこれは古い酒と云ふ意味でなく良い酒と云ふ意味である。これには清頭兒老酒、混頭兒老酒とあり、前者は淡黄色でやゝ酸味があり後者は茶褐色である。酒精含有量は約一〇・五%である。此の酒は元來山東の地酒であるが、山東人が多數滿洲に移住してゐるところから到る處で造られ、滿洲地酒の觀がある。

紹興酒は宴會用として廣く用ひられ醸造原料は米である。黄金色で酒精分は日本酒より幾分弱く、長年貯藏されたもの程良品とされてゐる。

(註) 尙この外に滿洲で作られる主な酒にはロシア人が主として飲用する火酒或ひはウキスキー、ベルモット、果酒等の混成酒があり北滿各地で作られてゐる。日本清酒及び焼酎も近來在滿日本人の増加に従ひ、大連、撫順、奉天、安東、公主嶺、新京等で醸造される様になつた。

茶 茶は總べての階級を通じて愛用されてゐる。一般に支那産の綠茶には香の良い乾燥花が混入されてゐる。烏龍茶、磚茶は支那名産であるが滿洲人間ではあまり使用しない。滿洲人は夏でも熱い茶を愛好するがこれは水質が悪いので自然に馴致された習慣であつて、チブス、コレラの如き、水によつて特に蔓延し易い傳染病防除の目的にも副つて居り兎角生水を好む日本人にも心してもらひたいことである。



吾妻屋根型

平房

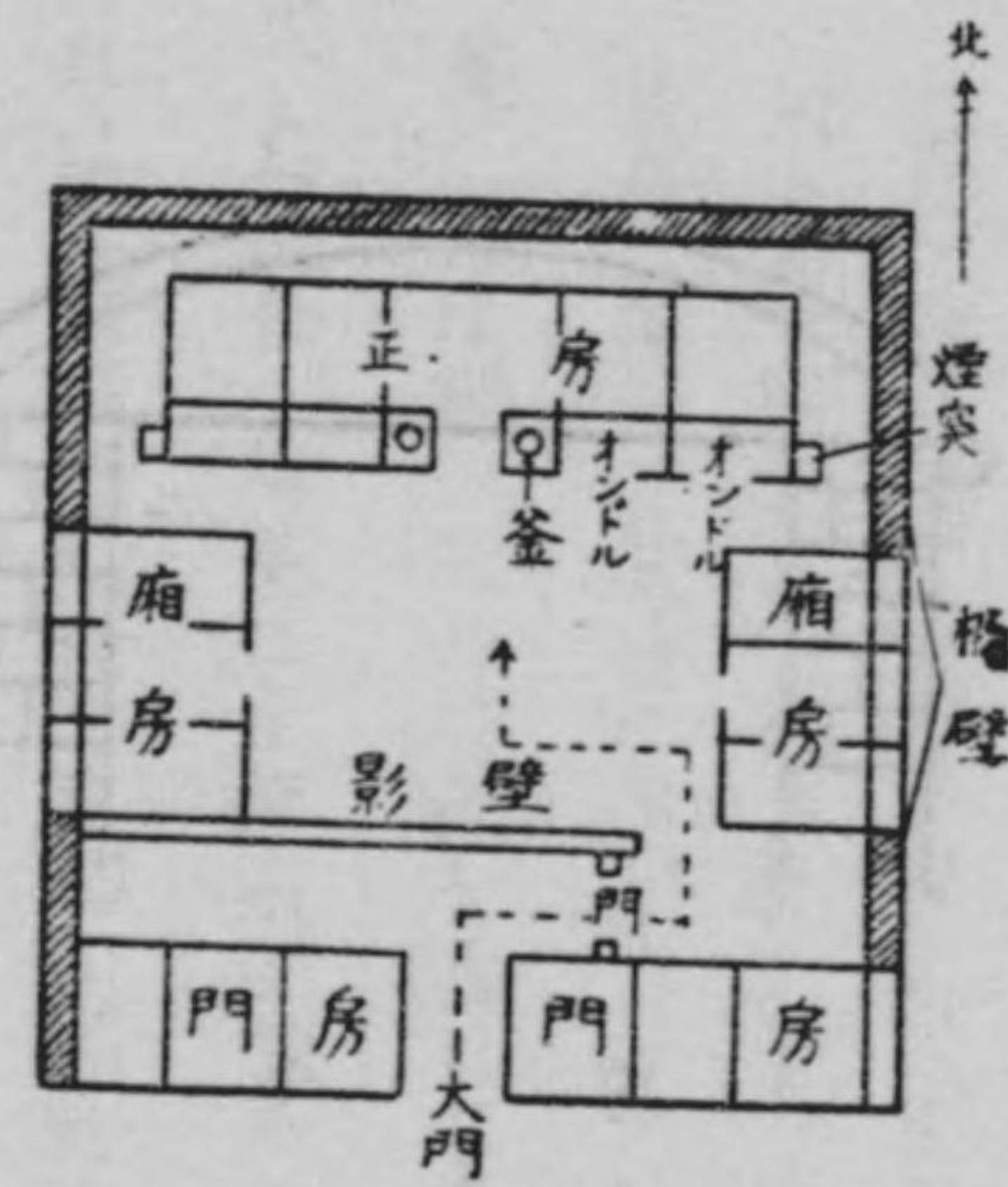
(ハ) 住居

漢民族の住居は古來賊團のため、又迷信が發達したため一種獨特の發達をなした。その建築様式は簡單なるため開拓地に於いて盛に利用されてゐる。漢民族の住居には數種類あるが、最も普通のもの切妻屋根の瓦葺(瓦房)と蒲鋒屋根(平房)の二種類である。切妻式は田舎に行けば葦葺のものも少くないが、都會の切妻屋根は殆んど瓦葺である。平房は滿洲の西南部即ち奉天省の一部、熱河省、錦州省に多い。これはこの地方が雨量が比較的少いためであり、又屋根に塗る土質も適當なためこの形式が多く用ひられるやうになつたものゝ如くで、建築法が簡單且つ經濟的なるため、北滿各地の新開地に於いてもこの平房の屋根が使用せらる。この平房の屋根の缺點は屋根がたゞ粘土を踏み固めて作つてあるに過ぎないので雨に對して弱い。

切妻式と平房とを問はず漢民族の住居は市街地を除き南向きに建てるのが正式である。間数は九間以下は奇數で、十間以上の大きなものは偶數で、偶數を好む漢民族が九間以下に限り奇數の間數を用ふるのは、奇數にしなければ建築後三年で必ず殃禍があると云ふ迷信があるからであ

間取りは非常に簡單である。三間房子であれば中央の入口のある部屋は炊事場ともなり燃料などの置場ともなる。普通水甕や炊事具もこの部屋に置いてあり、入口の兩側又は一側に直徑二尺位の大きな平鍋（實は釜である）を据えた鍋臺がある。

この中央のホールより左右の室に入るところには観音開きの板戸がある。戸を開いて内に入るとそこは居室である。炕（溫突）は普通窓のついた東又は南側に設けてあり、炕の上には衣櫃（衣類櫃）がありその上に夜具等を疊んで置いてある。炕を除く部分は大概土間で正面には机や椅子を据え、その家庭相當の裝飾をしてある。



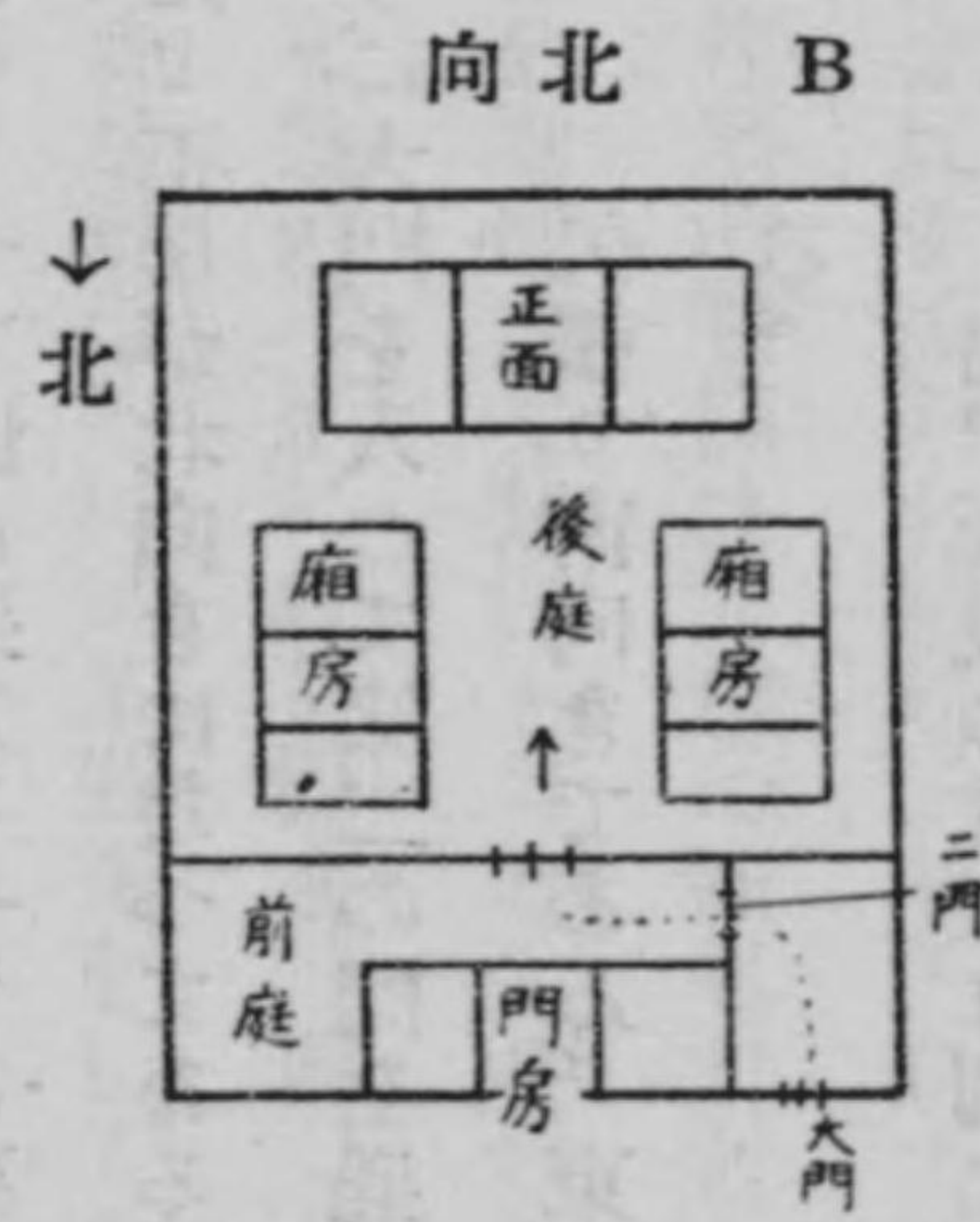
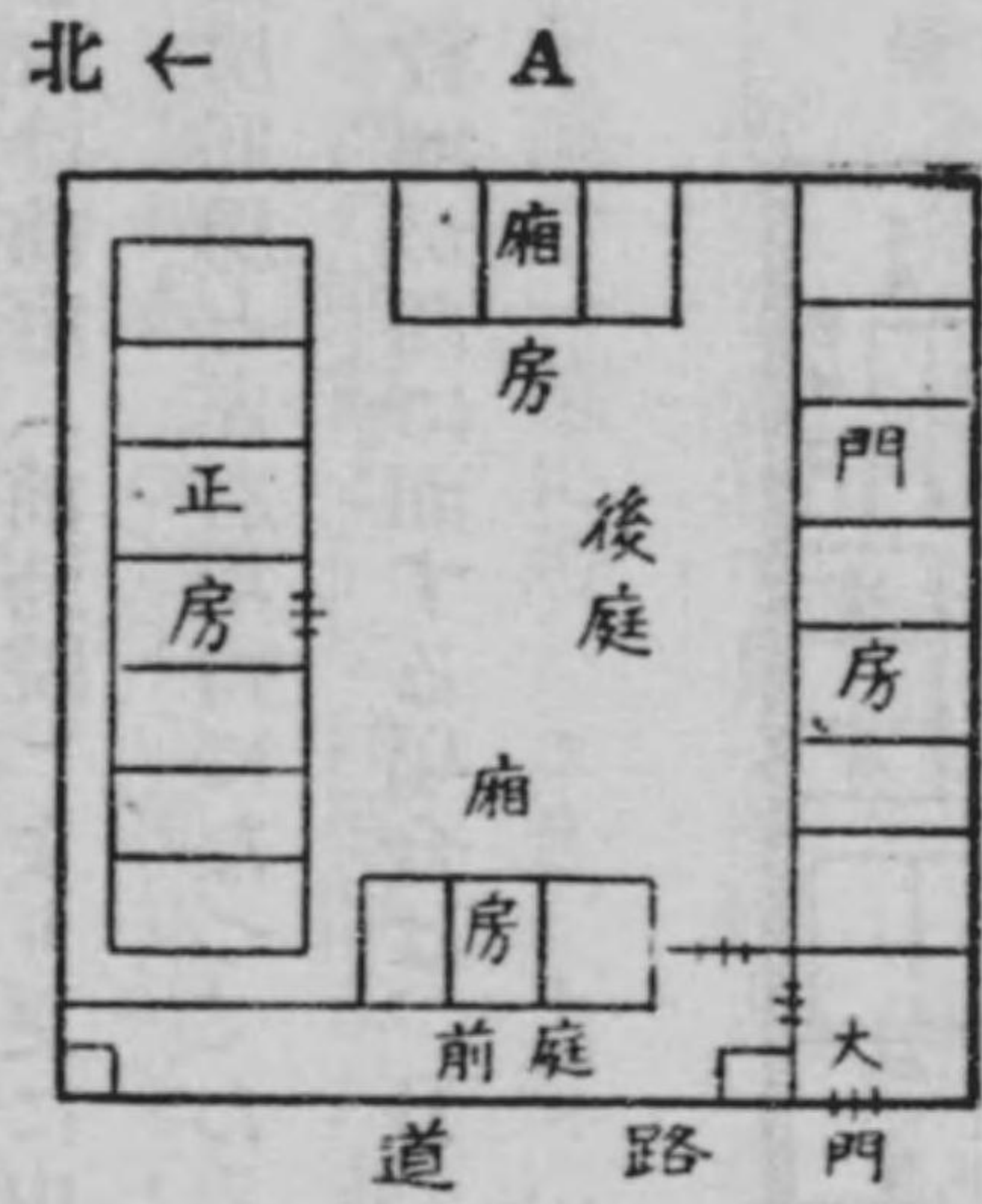
五間房子になると中央は前と同じで左右の居室の第一室と第二室の間には又板戸を設けてある。襖や障子一枚で他の部屋に自由に出入出来る日本式の家屋と異なり、第二室に這入るには内側から下ろされた門を外さねば開かない。こんな點はどちらかと云へば洋室に近い様式である。

五間房子の第一室は炕の向ひに机を置くか又は衣櫃等を据えてあり第二室の机は三間房子と同様である。

七間房子となれば家具の配置も大分餘裕ある配置をしてある。この場

合一番奥の部屋は入口が別につけてあるところが多い。

三、五、七間何れの場合でも正房の向つて右の第一の間は主人の部屋左の第一の間は主婦の部屋としてある（寢所の意味でない）。廂房は家族の部屋であり、上流の中房のある家では中房（過庭）、門房、廂房の何れかに應接室がある。使傭人は門房又は廂房に起居する。炊事場は中房のある大住宅では中房にある場合もあるし廂房、又は耳房にある場合もある。これは餘程餘裕のある住宅の話で、普通の家ではなるべく人の寝ない部屋のない様にぎり／＼に詰めて居室即ち寢室として一炕一夫婦（夫婦でない場合は三、四人）の部屋としてゐる。



宅の特長である。正面の門を大門と云ひ門を這入つたところに衝立の様なものがあるこれを影壁と云ひ、前門を開いた時が見通し出来ない様衝立の用をしてゐる。正面の建物を正房、左右兩側の棟を廂房、門の左右にある棟を門房と云ふ。

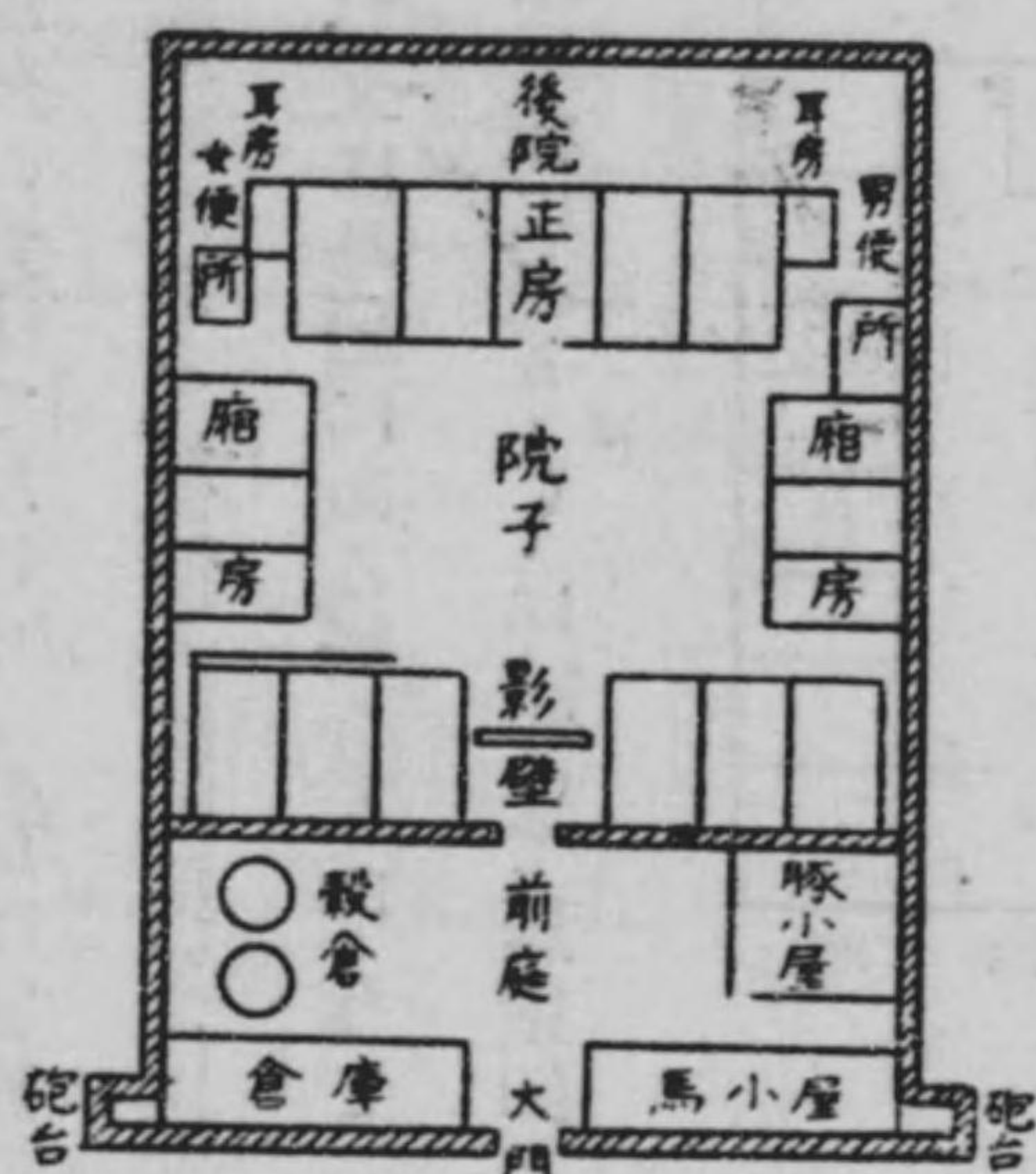
上圖は滿洲に於ける普通住宅の平面圖である。この圖で見る通り間取り外觀及び棟の配置等は總べて左右均齊に造られ南面の家屋の入口はかならず中央にある。一寸した家には三米以上の高低外牆を廻らしてあるのも漢民族の住

庭のことを院子チヤウと云ひ、農家は脱穀作業場として使用することがあるため、比較的廣い庭を持つてゐるのが普通である。

敷地が北向きになつてゐる場合は、Aのやうに前面の西の方に大門があり、前面に門房を建て、第二の門を設け前庭チヤウチヤウ（前跨院）より更に中門をくゞつて庭に這入るやうに建てゝある。この中の様子は前例と同じく正房廂房と左右均齊になつてゐる。たゞ正房が北向きになつてゐるのは止むを得ない。

敷地が西に面する場合は、Bのやうに大門を入つて第二の門を通つたところに前庭があり、後院の正房は矢張り南向きである。東に面する場合はこれを裏返した通りになる。

例一の家農豪



る今日に於いては無用の長物と化してゐる。

壁には馬糞紙の如き粗末な支那紙を沸化した上叩き棒で叩いてよく混合したものを塗る。少し高級になる

尙、豪農の住宅は圖にある如く大きな住宅には耳房と云ふ附屬建築物があるが、これは中房（過庭）の左右にある場合は炊事場又は倉庫として用ひられ、正堂の左右に建てゝある場合は室の補足又は物置として用ひられる。砲臺はかつて匪賊の跳梁せる時代、その防備上重要な役目を有してゐたのであるが、治安の徹底せ

と青灰チンフキと言ふ一種の天然石灰を用ふるところもある。この乾燥した上に石灰汁の胡粉塗りをする。一般の下級な住宅はたゞ粘土を塗るだけでその上に古新聞紙を貼つて、更にその上に色々な紋様のある壁紙を一面に貼るのである。最も粗末な建物になると、たゞ古新聞を貼るだけである。

天井は殆んど紙貼りである。近年、中流以上の住宅では洋風建築法をとり入れ、漆喰天井や、カゼインの壁を塗るのが漸次多くなつて來た。

高貴の住宅の外部裝飾は簷に朱や金銀で極彩色を施してある。赤は漢民族の最も好む色でこの色は避邪の力があるとされてゐる。一本の柱にも意匠を凝らし窓障子や入口には壯觀目をあざむく金文字の扁額など掲げ、善美を盡してあるけれど、室内の建築的裝飾は非常に簡單であり、たゞ家具で裝飾するばかりである。爐を室の一部に取るとき、上部に垂花を取付けて裝飾とするものがある。これを龕と云ふ。

室内の裝飾としては壁間に書畫の軸を懸け、床に机を置き、鏡、金ピカの置時計、茶器、花瓶、香爐その他の骨董品、大理石の衝立等その家の富貴を語るに足る裝飾をしてある。近年日本製の魔法瓶が滿人間に使用されるやうになつたが、これは實用價值よりも裝飾的意味の方が強いのである。雙を喜ぶ滿人はこの裝飾もみな二つづゝあるのが常識とされてゐる。下級社會の家では、年畫といふ正月に賣る吉祥畫や門神觀音等の神佛像を以て裝飾としてゐる。

(二) 家庭年中行事

滿洲の歳末気分は日本の歳末よりもずつと早く街に現はれ、やうやく陰曆十二月に入つた頃より歡樂紙や物語繪紙を店頭に掲げる處もある。廿日以後になれば芋を洗ふ様な雑踏の中に祭壇を飾る種々のものより造花、門神、吉祥畫の數々が色美しく店頭から街路上まではみ出し零下何十度の寒氣も忘れられた様な活氣を見せて来る。いろいろの行事が行はれるが主なものは臘八粥と竈祭である。(以下陰曆による)

臘八(十二月八日) 寒さを防ぎ悪疫を豫防し、凡ゆる災難を免かれると云ふ意味から八種類の農産物で粥を作りこれを食べ、以つて神に感謝すると同時に一家揃つて豊作を壽ぐのである。

竈祭(十二月廿三日) 歳末から正月にかけて最も大切な祭で南方では廿四日より始まり、正月十五日の燈節まで續けられる。一家中の者の善惡の行爲を一年間監視した男女二神(男神は灶君又は灶王爺と云ひ、女神は灶奶奶と云ふ)が廿三日に竈から煙道を通つて昇天し、玉皇上帝に報告すると云ふ傳説に初つた祭祀で飴を繪に描いた神の口邊に塗つて善行丈傳へる様祈ると云つた面白い習慣もある。尙廿三日以後に結婚が多いのは神が昇天されて留守だから何をしても差支へないと考へられてゐるからである。

除夕(十二月三十日) 過大年とも云ふ。接神の禮を行ひ、一年の勞苦を忘れ、祖先と共に楽しむ。一家は頓に景氣と嚴肅の色を呈する。家の内外を掃き淨め、春聯と云つて紅紙に吉祥語、吉祥文字を書いたものを貼る。春聯は日本の門松とも見るべきものである。荷車や馬車にも皆可愛らしい春聯が貼つてあり、春らしい感じを與へる。

元旦(一月一日) 夜の明ける頃に門を開けて新年を迎へ入れ家長が主となつて祭神の儀式をする。即ち天地四方、祖先、竈神、土地廟、家業の神等を拜する。

元宵節(一月十五日) 年の春を迎へた祖先の靈は當日迄家に留まるものと信ぜられてゐるのでこれを禮拜する。十三日より十五日迄を上元々、元宵節又は燈節と云ひ、戸毎に彩燈を掛け高脚蹄等をして街上は雜踏する。この日は元宵といふ白玉團子を食べる習慣になつてゐる。

龍擡頭(二月二日) 立春の前後で一定してない。この日は龍が冬眠から覺めて頭を擡げると云ふ意味のお祝で、農家では茶灰で院子に大きな圓を描いて、その中に五穀の種子を播いて豊年を祈る。商家では大きな龍を作つて町中を練り歩く。この日は婦女子は龍の眼を傷つけることを恐れ縫物をしない。

清明節(春分より十五日目) 春の墓参りである。

端午節(五月五日) 昔から五月を惡月と稱へ、而も五月五日の當日は午月午日午時で午が三つ重なり最も氣の強い集りで、天地の毒氣が蔓るとされてゐる。日本と同様に粽子、五毒酒、五毒餅等を食べて毒除けとする。しかし男兒の福運を祈る意味は薄い。

尙五月一日より同日迄は、商人の決算期となつてゐて、商工業者や勞働者は殆んど休業する。

天贖節(六月六日) 土用乾しの日である。農家では家畜を洗ひ、寺廟では曝書をする。

七夕(七月七日) 巧夕ともいひ、婦女は裁縫の上達を祈るためこれを祀る。水盤に水を入れ、高粱の穂の

細糸を探つてこれに浮べ若しその影が細ければ上達の見込があるものとして大いに喜ばれる。

中元(七月十五日) 鬼節とも云ひ、盂蘭盆會を催す。祖先の靈前に供物を供へ、廟に詣で、紙錢か紙製の着物を焼き、河のある地方では燈籠流しをして靈を送る。

中秋節(八月十五日) 月餅や果物を供へて月を祀るのである。昔は「男不拜月、女不祭竈」といつて、男は竈祭りを、女は中秋節を司る習慣である。中秋節も商業上の決算期である。

重陽節(九月九日) 一般に高い所に登る風習である。これを登高と云ひ花糕といふカステラに似た菓子を食べる。登高はもと危険を逃れる意味であるが、糕の音が高に通じ、身分の高くなることを祈る意味である。丁度この頃は菊の盛りで、その日の事を九花節とも云はれてゐる。

寒衣節(十月一日) 祖先の墳墓に参詣し、墓を掃除し紙衣を焼くのは、冬の衣を死者に贈る意である。

四、氣 候 の 話

滿洲の氣候は日本の如く四圍を海によつて圍まれてゐる處の氣候、所謂海洋性氣候とは著しくその性質を異にし大陸性氣候である。今其の主なる特長を挙げると(一)夏と冬、晝と夜とに於いて氣溫の較差が大なること、(二)冬季に於いて三寒四溫の現象があること、(三)概して降水量が少いこと(日本の降水量の二分の一乃至十分の一に相當する)、(四)空氣は乾燥し、快晴の日が多いこと、(五)風速は海洋性氣候の地に比して小さいこと、(六)溫和な春秋二季が短く冬季が長いこと等である。而して滿洲の氣候で比較的悪い特長と思はれるのは一及び六の特長で、他の特長は決して不健康なものとは思はれない。寧ろ三、四の特長の如く健康上日本内地より遙かに勝れてゐる點もある。次に滿洲の氣候に就いて述べてみよう。

氣溫 氣溫に最も關係の深い滿洲の緯度に就いて調べて見るに、南は北緯三九度四〇分より發し、北は北緯五三度五〇分に終る。丁度日本の東北地方より樺太の日露國境以北に亘る地方に匹敵する。従つて緯度より見れば滿洲が寒いのも當然のことである。然し夏季は全滿的に關東以西の如き高溫となる。而して氣溫の推移は極めて早く行はれ、毎年四月下旬より五月にかけて氣溫急昇し、日本内地の春季に相當するも六、七、八の三箇月は日本の同緯度の地方より高溫で、七月は日本と同様最も暑い月である。九月に入れば氣溫は下

降し、新京以北では九月下旬に結霜を見ることがある。十月より冬季に入り翌年三月頃迄気温低く、一月が最低温を示す。

次に地域的に北滿と南滿との相違を述べて見ると、夏季に於いては北滿も南滿も大差がなく、幾分北滿の方が高い傾向を示し、最高大連では攝氏三五度七分、新京攝氏三九度五分、海拉爾の如きは攝氏四〇度一分にも達することがあるが、これ等は例外で全滿各地何れも例年攝氏三五・六度以上に上昇することは少い。冬季は夏季と異なり北進する程寒氣厳しく、最低大連では攝氏零下九度五分、新京同三六度で、哈爾濱、海拉爾方面に於いては攝氏零下四〇度以下になることも稀にある。然し北滿と雖も零下三〇度以下になる場合は餘り多くない。又冬季は三寒四温と云つて寒い日が三日位あれば次に四日間位暖い日が來る特徴があり、これは冬季比較的暮しよい條件となる。

平 均 氣 温 (攝氏 1は零下)

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
齊 齊 哈 爾	12.7	12.3	12.3	16.2	21.7	21.3	23.7	20.6	13.0	5.8	1.8	1.5	12.6
哈 爾 濱	13.3	12.7	15.9	21.5	23.2	20.1	23.1	22.7	14.8	6.3	1.6	1.6	13.0
新 京	16.9	13.6	14.2	21.5	24.5	20.1	23.5	22.9	15.0	6.7	1.4	1.7	13.7

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
黑 河	13.1	16.9	19.3	26	27	28.8	28	19.5	12.5	3.0	1.1	1.5	13.5
牡 丹 江	10.4	16.2	16.4	25	25.5	28.1	29.9	20.7	13.2	4.8	1.8	1.7	17.2
延 吉	12.2	12.2	16.6	27	27	27.7	29.4	23.6	15.6	7.9	2.4	1.7	17.7
奉 天	12.0	19.2	19.9	28.7	28.0	26	28.8	23.6	17.0	9.3	1.0	1.9	17.7
營 口	10.4	17.1	17.1	25.1	26.0	23.3	24.8	23.3	18.4	6.0	1.1	1.7	17.0
承 德	10.4	17.1	17.1	25.1	26.0	23.3	24.8	23.3	18.4	6.0	1.1	1.7	17.0
挑 南	12.7	17.1	17.1	25.1	26.0	23.3	24.8	23.3	18.4	6.0	1.1	1.7	17.0
海 拉 爾	12.5	17.1	17.1	25.1	26.0	23.3	24.8	23.3	18.4	6.0	1.1	1.7	17.0
滿 洲 里	12.3	17.1	17.1	25.1	26.0	23.3	24.8	23.3	18.4	6.0	1.1	1.7	17.0
大 連	12.2	17.1	17.1	25.1	26.0	23.3	24.8	23.3	18.4	6.0	1.1	1.7	17.0
東 京	11.5	17.1	17.1	25.1	26.0	23.3	24.8	23.3	18.4	6.0	1.1	1.7	17.0
秋 田	11.5	17.1	17.1	25.1	26.0	23.3	24.8	23.3	18.4	6.0	1.1	1.7	17.0
函 館	13.0	17.1	17.1	25.1	26.0	23.3	24.8	23.3	18.4	6.0	1.1	1.7	17.0
大 泊	12.4	17.1	17.1	25.1	26.0	23.3	24.8	23.3	18.4	6.0	1.1	1.7	17.0

次に一日の気温状態に就いて述べてみれば、全滿何れの地方も朝夕は気温低く、午後二、三時頃最高となり、夜明け頃最低となる。この気温の上下即ち日気温較差はこれ亦日本と異なり可成り激しく較差の最も大なる時の記録を見れば、大連攝氏二二度一分(昭和九年五月二日)、新京攝氏二八度五分(大正九年十一月三

日)、哈爾濱攝氏二三度四分(昭和十二年一月五日)となつて居り、一日に夏冬を現出してゐる。然しこれ等の較差は極端なる例で、平常は較差攝氏十數度の場合が多い。

日照 太陽の可照時数は緯度の大きなるに従つて増大する。従つて北滿は南滿より可照時数は長いが、實際の日照時数は雲によつて遮ぎられる結果、可照時数の五二%乃至六七%に過ぎない。然し滿洲の日照時数は日本の同緯度の地方より、次に述べる降水量並びに降水状態により、遙かに長いのである。

日本と滿洲の日照時數比較表

滿 洲		日 本	
緯 度	日 照 時 數	緯 度	日 照 時 數
大連 三六度四分	二七五六	山形 三六度五分	一六五五
新京 四三度五分	二七〇〇	根室 四三度	一八九七
哈爾濱 四五度五分	二五三〇	札幌 四三度	一八四七
太 平 嶺 四四度三	二二〇八	那 幌 四四度	一四四三
克 山 四八度四	二七〇四	大 泊 四六度九	一八八三
滿 洲 里 四九度五	二九七二	香 港 四九度四	一八六六

右の表によつても凡そ知り得る如く、滿洲の日照時數は日本に比較して一千時間内外長いのである。斯く

日照時數が極めて長いことは、日常我々の感ずる温度に極めて重大な影響を與へる。(滿洲の氣候と保健参照)

降水と濕度 降水量は日本内地の二分の一乃至三分の一にして年總降水量五〇〇耗乃至六〇〇耗であるが、南より北進するに従ひ又東より西へ進むに従ひ、漸次降水量は減少し、蒙古のゴビ砂漠に達すれば殆んど雨量がない(近來西滿に於いては雨量が漸次増加の傾向がある)。降水時期は六、七、八の三箇月でこれが滿洲の雨期となり、年總降水量の八〇%を占めるが内地の霖雨とは異なり強く短時間に降り直ぐ晴れる場合が多い。雨期を過ぎ九月に入れば段々雨量を減じ、十一月頃より四月頃までは一箇月に僅か六耗乃至二〇耗位の降水量に過ぎない。

降雪は初雪を十月中に見る地方も多く、新京、哈爾濱は十月中下旬頃であるが大連或ひは承德の如く十月初旬に初雪を見る地方もある。その量は軽い粉雪で、六厘より一〇厘位が普通で、十五厘以上に積るのは珍らしい。雪を終る頃は大連が三月中旬頃で、北に進む程遅れ、奉天、新京、哈爾濱が四月中下旬、海拉爾方面は更にこれより半月位遅れる。

滿洲の空氣の濕度は、降雨降雪の少いことに關聯して一般に低く、平均五六%乃至六〇%で、日本内地のそれに比して遙かに低い。最も乾燥する時期は三月より五月までで五〇%以下となるも、湿度の高い雨期には七五%乃至八〇%位の湿度を保有する。

降 水 量 (耗)

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
新 京	六三	六〇	一五三	二九	五四六	二二五	一七七	一七七	五七三	三六七	一七三	六七	六〇九
哈 爾 濱	四八	三九	八〇	三〇九	五九四	二三四	一四七三	一〇三八	七三三	四九二	一〇三	四五	五七六
齊 齊 哈 爾	一七	二〇	四四	一七五	三六六	八五二	一五二八	一〇〇六	五六三	三三六	七四	三二	四九二
黑 龍 江	三三	七一	四七	一四五	六二	六九四	一七八	一〇五二	五四三	三八	三八	五二	五二八
牡 丹 江	三三	四五	九三	三三六	五六五	八八四	一三二九	一〇八二	六六	三五	五六	五三	五三三
延 吉	二九	三〇	一九三	二二	三三一	六九三	七〇二	一九五	五七三	二二四	六四	一〇七	五〇二
奉 天	四八	六三	一八三	二八九	六二	九四六	一五八五	一五七七	六二	四二	三〇	八六	六二八
營 口	六四	五九	一七六	二七二	五三三	六四三	一七二五	一七八	七三九	四七四	二〇九	七六	六七七
承 德	〇七	一〇	一四二	一八二	九三	九七三	二四八五	八七六	七三	一五三	一五	三〇	六二六
洮 南	一六	二二	一四	一〇〇	二二	六六	一三二	二二九	七四	一四五	四二	一六	四四〇
海 拉 爾	三三	五六	一四	二〇五	二四四	四一〇	八七	八八七	二七四	一三三	六八	二八	三二二
滿 洲 里	三二	三一	一〇	二〇三	二九九	四七四	七三二	七九二	四三六	八四	三〇	二八	二九六七
大 連	一〇六	七八	一六四	二四三	四六三	四九二	一六五七	一三八	九二	二九〇	三三四	二二九	五九八四

風 風は夏季蒙古方面に低氣壓を生じこれがため東風又は東南風が多く、朝夕は春秋の氣温に下降する。冬季はバイカル湖畔に高氣壓が生じ、北或ひは北西風が多い。この風が卓越すれば寒氣が襲來し、風が衰退す

れば緩和されこれが周期的に行はれて、所謂三寒四温と云ふ特殊な氣象を現出する。風は夏冬共に概して弱くその激しい時は夏冬兩季節の交代する春秋の候で、春季は偏西風の所謂蒙古風が猛威を振り、黄塵萬丈の光景を呈し時には小砂利を吹き飛ばす程の強風も吹く。その回数も多い年で年二十回位、風速は案外小で最大の時でも秒速二〇米を越えるのは稀である。滿洲に於いて春季蒙古風が吹くやうになれば、日々氣温上昇し、寒い冬から間もなく解放されるのである。

滿 洲 の 氣 候 と 保 健

滿洲の氣候は大體上述せる如くであるが、かゝる滿洲の氣候が未だに日本内地に於いて一般に想像されてゐる如く保健上有害なものであらうか。滿洲の氣候は決して保健上不良とは云ひ得られないのである。

即ち日本内地人の想像するが如き酷暑酷寒も、滿洲に住む者に云はすれば「良い氣候で餘り寒くない」と云ふ。これは内地の如く多濕でないことに原因してゐる。換言すれば、滿洲の年總降水量は平均六〇〇耗内外で、日本の山形、福島邊りの年總降水量一、二〇〇耗級の半量、福井金澤邊りの二、五〇〇耗内外に比べれば四分の一以下、札幌邊りの一、〇五〇耗の六〇%に過ぎず、而もその六〇〇耗内外の三分の二量は六月乃至八月の降雨時期に降つてしまひ、且つ平均湿度は全年六五・九%(自一五〇九年至一九三二年新京)で、即ち大體最適温度七〇%に近く稍乾燥してゐる程度であつて、毎月の平均湿度は乾燥期の三、四、五月は五〇%臺、二、

六、十、十一、十二月は六四・四乃至六八・九の六〇%臺、一月が七〇・七%で、七、八、九の三箇月は七〇%臺となるが、最高の八月に於いても七七・六%で内地の七、八月の八〇%を越える多湿に比べれば遙かに乾燥してゐるのである。斯く空氣が乾燥してゐることは滿洲の氣候の特性で、頗る滿洲生活に好都合である。今その關係を表に示せば次の如くである。

高 濕 度		高 溫 度		中等溫度		低 溫 度	
		蒸發作業を妨げて熱感を増す 蒸發作用を増し涼味を加ふ		湿度の影響少し 同 右		傳導による放熱を増加し寒冷度を増す 傳導放熱減少して温暖感を増す	
低 濕 度		高 濕 度		高 濕 度		高 濕 度	

而して滿洲の夏季は相當の高温を呈するが、日本内地に比して降水極めて少く又内地に比して乾燥する空氣のため皮膚より蒸發が速かで、體温の鬱積を感ずること少い。従つて日本内地に於けるが如き蒸暑さを感じること少く、恰も高原に生活するが如き快感を我々に與へるのである。又冬季は低温時に於いても低湿なため體温の奪却は少く、かゝるため零下六、七度に於ける日向は暖く全く小春日和で、日本内地の零下六、七度に於ける寒さとは著しく趣を異にしてゐる。要するに滿洲は寒暑共にその温度の割に遙かに凌ぎよいのである。又寒暑に對する感覺に頗る影響のある風は、島國たる日本内地とは異なり、夏季は常に微風があり、冬季には晴天無風の日が多くて寒暑の感覺を軽減する。黄塵萬丈をなす蒙古風は主に四、五月頃の氣温の上

昇する頃に起り、その程度も關東地方と大差はないので寒くない。次に氣候と病氣との關係に就いて述べる。かつて滿洲には結核が頗る多く、その原因は寒氣及び低湿なためであると想像されてゐたが、今日に於いては滿洲の寒氣低湿は共に結核多發の原因となり得ないことが明かにされてゐる。即ちスイス、ドイツの高原には結核療養所があり、又日本に於いても結核療養所は富士見の高原に設置されてゐるのであつて、冬季零下十數度或ひはそれ以下に下降する場合でも、窓の開放のまゝ治療が行はれて居り、その治愈率は極めて高いのである。寧ろ日本内地の濕潤なる空氣こそ結核に悪いと考へられてゐる。然し滿洲の氣候は日日の氣温の變動が激しいこと、冬季煤煙の多いこと等が感冒を起し、肺炎等の呼吸器病を誘發する原因になると考へられないではない。然しそれにもまして冬季低温の割に寒さを感じず夏は日中高温に達するが夜間は氣温下り日本内地の如き蒸暑さに惱まることが少く、又連日快晴が続き何人も爽快を感ずることは滿洲が健康地であると云ひ得るのである。滿洲に行けば肺病になると云はれた所謂滿洲肺病は在滿邦人が植民地氣分でなせる不攝生、特に後述の冬季生活の不健全にその原因があると云はねばならないのである。

五、在滿邦人の服装

衣服は道徳的に或ひは裝飾的に優れてゐることが勿論必要であるが、滿洲の如く氣候の寒冷な處では防寒的、活動的且つ經濟的なものであることが特に必要である。かゝる見地より、滿洲に普通見らるゝ和服、洋服、滿服の三衣服を比較対象せる結果は次の如くである。

和服は三者中最も不活動的にして高價である。夏季の服装としてはともかく冬季の服装として三者中最も非防寒的である。

洋服は活動的なるも高價である。夏季の服装としては他の二者より幾分劣るも冬季の服装として和服より遙かに勝り、滿服に比して殆んど遜色がない。

滿服は正装せる場合は洋服より活動的ならざるも安價である。且つ防暑によく又防寒的には洋服より勝ると云はる。

以上三服装を比較せる結果より滿洲で生活するには滿服が最も勝れ、洋服之に次ぎ和服は最も適しないことが解る。

然し在滿邦人の服装は滿洲の氣候が特殊なものであるとは云へ殆んど日本内地と大差なく、一年を通じて

和服及び洋服が一般に着用され滿服は殆んど着用されてゐない。而して男子と婦女子の服装状態を見れば男子は大體背廣或ひは協和服を仕事着とし和服は家で寛ろぐ場合の外餘り着用されない。然し婦女子の服装は男子より職業にたづさはるものが少いことにその原因があると思はれるが、先づ和洋半々と云ふ状態にある。斯くの如く特に婦女子に和服を着る者が多く、而も冬季に於いてすらも防寒上著しく劣る和服を着用してゐるのである。従つて婦女子の罹病率は男子のそれより高く、在滿婦女子の服装改善は目下重大なる問題となつてゐる。

(一) 男子の服装

男子の被服は普通背廣又は協和服である。協和服と云ふのは一年を通じ一般に着用され、國防色詰襟、背中に襷をとり、バンドを附したもので、平常は勿論慶弔その他如何なる公の席にも利用される。而して康徳五年(昭和十三年)禮帽と胸間の飾り紐が制定され、これを着用すれば宮内府參内にも差支へがなく加ふるにワイシャツは不要で簡略且つ價格も安價なるため、凡ゆる階級に、又民族の差別なく廣く愛用され、名實共に國民服として完璧のものである。而して現今の價格は時節柄品不足で店により布地並びに價格が不同且つ高價で國民服として大なる缺點となつてゐたが、滿洲に於いても日本と同様贅澤品販賣禁止令が佈告され、協和服の最高價格が既製品及び半既製品が冬物六五圓、夏物五五圓、注文品冬物七五圓、夏物六五圓迄(康

德八年一月一日より實施」と規定された。

次に男子の冬季の服装に就いて新京を標準として述べれば、新京に於いては耐寒力に劣る人でも日本内地と同一か冬シャツ一枚を餘計に着る程度である。外出時には一般に日本内地で使用されてゐる外套の襟に、羊毛皮或ひはラッコを着ける程度で、この襟を立てれば凍傷に侵され易き耳も毛皮で被はれ充分保護し得られ、又それ程強く寒さを感じないのである。又帽子に就いては防寒帽を被つてゐるものと然らざるもの即ちソフト等の如きものを被つてゐるものと約半々位の状態にあるが、防寒帽は耳を被ふ如く造られてゐるためこれを着用すれば頗る暖く、通勤者中にはこれを被り毛皮を外套の襟につけずに過すものも少くない。最後に靴はこれも日本内地のそれと異ならないが、外觀がこれと類似せる毛皮製のものも相當穿かれてゐるものの如くである。尙短靴にスパーツ(靴の甲を被ふもの)を着用してゐるものは頗る多い。

而して日本内地に紹介されてゐる防寒帽、防寒靴及びシュニーバ(毛皮製外套)の扮装は、新京に於いては主に終日戸外で働くもの或ひはそれより北方奥地等に居住するものの服装で、新京以南の都會に居住するものには餘り見受けられない扮装である。

以上大體在滿邦人男子の服装に就いて記述したが、一般の男子は冬季和服で外出するものがなく、従つて保健上上述の服装でも差支へないと云はれてゐるのである。

(二) 婦 人 の 服 装

在滿日本婦人の服装は和服或ひは洋装で、洋装には男子と同様女子用の協和服があり、職業にたづさはる婦人が主に着用してゐる。布地並びに色は男子の協和服と同じであるが、上衣が折襟となつてゐる點が男子と異なつてゐる。而してスカートは普通見らるゝ型である。

扱て、滿洲に於いて重大問題となつてゐる在滿日本婦人の冬季服装状態は、洋装に於いては帽子、靴下、手袋等の附帯服装をかへず、殊に靴下は夏季でも嚴寒の時でも絹靴下の一重のものを穿き、他方和服に於いては下着を厚くズボン下を穿けば可成り暖くなるものゝ、一般にはズボン下すら着用せず比較的薄着をしてゐるやうである。尤も和服の場合でも、外出する場合はシュニーバと云ふ毛皮製の外套が用ひられる。然し近來都會に住む日本婦人は、ベルベットのコートに狐の襟巻、白足袋草履ばきの姿で街へ出る傾向が強くなつたやうに見受けられ、履物は防寒の意味で爪先を覆ふ爪草様のものが張つてあるものを使用してゐる。

在滿日本婦人の服装は以上の如くで、冬季男子より和服を着るものが多く、且つ漸次薄着をする傾向にあるものゝ如く見受けられる。而して和服は裾が開き保温上不合理なることは明白であるが、在滿日本婦人の和服を着るものゝ多いことは、一面より見れば滿洲の冬季は必ずしも洋服(ロシア婦人は嚴寒時には脚絆及び防寒靴を穿く)或ひは支那服の如き防寒的な衣服を着なくとも過し得るものと云ひ得るが、反面より見て在滿邦人男

子より同婦人の居住者が少いにも拘らず、各種疾病に罹るものが多いことは在滿日本婦人の服装上大なる缺陷があるものと考へられる。

元來在滿日本婦人は和服が不防寒のため概ね冬季に於ける外出が男子のそれより少く、常に汚濁せる室内に閉ぢ込もつてゐる状態で従つて婦人の體格は寒氣に對する抵抗力が弱められてゐるのである。而も外出する時は男子より遙かに非防寒的な和服で外出するものが多く、かゝるため在滿日本婦人の同男子より各種疾病者が多いのは蓋し當然のことであらう。

要するに日本婦人が滿洲に於いて健康で暮すためには、洋装せる場合はシューベは勿論、防寒的な靴下、手袋、帽子及び防寒靴等を用ひることが必要で、和服の場合には裾より風の入らぬやうな手段を講じた衣服を着用することが必要である。



裝 服 の 冬 の 人 婦 滿 在

然し乍ら滿洲に於ける日本婦人の服装に就いては現在種々研究されてゐるところであるが、未だこれと云ふ解決を見てゐないのである。これと云ふのも元來婦人の服装が衛生的と云ふより先づ第一に婦人の嗜好に適したものでなくてはならず、婦人の服装に對する執着が一にも二にも容姿美で、衣服の重要使命たる衛生防寒、能率等は第三、第四の事項に過ぎないからである。特に和服に於いては嗜好上傳統美を重んじ、容易に新様式を受け入れず、茲に婦人の服装改良の困難が存する。然しその改良は絶対不可能とは考へられない。何故ならば現在の日本人の服装は徳川時代以來のもので、決して古來より存在したものではないからで、上古時代の服装は寧ろ支那服に近く、衛生上、作業上遙かに和服より合理的で、現在の和服は色彩、美術的には進歩したが、衛生の立場から見れば退歩したかの觀がある。然し日本内地には從來東北、北陸、信州等の農村婦人間にはモンペを穿く風習があり、これを着用すれば立居の便利さと冬季の温かさとは、一度身に着けたならば離されないなどと云はれ、滿洲の都會に於いても一部の人には既に着用されてゐる。モンペの着用は日本婦人の滿洲生活にとり必要なことである。尙、現在の在滿日本婦人には餘り着用されてゐないが、滿洲には數千年前より發達せる防寒的上理想的な支那服があり、その着用も亦賢明な方法と云ひ得られよう。要するに日本婦人が渡滿後尙冬季と雖も從來の和服用を日本内地と同じく好むならば日本婦人が體を損ね易いことは云ふまでもないことで、體を損ねるのは單にその婦人、その家庭の損のみならず、婦人の強弱が男子よりも、母としてその子女の健康に先天的に影響することが大で、ために病弱な子女を持った親の心

配苦痛はもとより、人口問題の喧しく云はれてゐる今日、國家の損失も亦頗る大なるものがあると云はねばならない。

(三) 服装の加減

服装の加減は滿洲の生活には重要なことである。何故ならば滿洲の氣温は氣候の處に於いて既述せる如く、四季に依つて極端な差違があるのみならず、一日中に於いても四季を通じて朝夕に依り、又晴雨に依り可成りの變化があり、日本の如き緩慢なる氣候の推移とは全然異なるからである。

然るに從來の在滿邦人にはこの氣温の變動につれて服装を加減する觀念が極めて乏しく、寧ろ日本に於ける四季の被服の定式にこだわり、又冬季に於いては暖房設備が完備し、戶外室内の温度の差異が著しいのに均らず、出入に際して被服を加減することに無精であり、又不注意である。かゝるため在滿邦人は極めて健康を害し易いのである。これに反し滿洲人、露西亞人は季節或ひは日々の氣温に應じ、巧みに衣服を加減し、又冬季室内では薄衣で暮すが、一度外出するとならば、保温上完全なる服装をして出掛けるので、健康状態は在滿邦人より遙かによい成績を示してゐるのである。

かく既住民族が服装の加減に深甚なる注意を拂つてゐることは渡滿せんとする人の参考たるのみならず、在滿邦人も亦大いに學ぶべき點であらう。

(四) 防寒衣料としての毛皮

滿洲の如き寒地では、大連、熱河等の如く、冬季比較的暖い地方に於いても尙零下十數度に達し、防寒具なくしては到底過し得ない。而して防寒具をその材料より區別するならば、綿製品、眞綿製品、毛織物、毛皮製品等各種に分けられるが、防寒用として毛皮に優る材料はない。而も毛皮製品は他の衣服の如く、著しい流行の變化もなく、派手とか地味とかの憂ひも少く、又年齢に大した關係なくして永年の使用に耐へるため、極めて経済的と云ひ得られ、滿洲では毛皮は贅澤品でなく、寧ろ生活必需品と云ひ得るのである。

(イ) 毛皮の用途及び種類

滿洲で主に使用せられてゐる防寒具用各種毛皮の用途は大體次の如くである。

一、男子用帽子及び外套襟

獵虎、臘納臍、河獺、羊嬰兒、羊、兔、猿等

二、男子用外套裏

臘納臍、河獺、貂の一種、浣熊、猫、タルバカン、シベリヤ人たち、狐、仔馬、猿、羊、狼、狸、兔等

三、婦人用襟卷

狐、貂、りす、貂鼠、タルバカン、シベリヤ人たち、猫等

四、婦人用外套

貂、羊嬰子、りす、膾膾膾、鼠、猫、タルバカン、綿羊毛、もぐら、犬、仔馬、山猫、狸、兎等
尙、婦人シュールバ(毛皮外套)で二、三〇圓より一〇〇圓位のものに左の如きものがある。

イ、狐の足又は頭を接ぎ合はせたもの

ロ、兎の頭又は小切を接ぎ合はせたもの

ハ、オーストラリア産りす

ニ、モルモット

ホ、シベリヤ猫

ヘ、ノルカ(ラッコの一種)の頭を接ぎ合はせたもの

五、子供用帽子並びに外套

猫、兎、山猫、羊、猿等

六、敷物

虎、豹、熊、海豹等

以上の外、毛皮の種類には多種多様あるが、それは省略する。但し前記動物中には狐と云つても銀狐、白狐、赤狐、十字狐の如く、又兎と云つても家兎、野兎、跳兎等の如く各種類のものがあることを附記して置く。

而して滿洲に出廻つてゐる毛皮は單に滿洲産のもののみならず、カムチャツカ産、シベリヤ産、アメリカ産、カナダ産、濠洲産、英國産、ハンガリー産及び獨逸に於いて染色加工されたものである。加工品は低級毛皮が巧みに各種高級毛皮の模造品に製造され、その鑑別も容易でなく、購入する場合は餘程の注意を要する。次に最も多く使用されてゐる各種毛皮に就いて記してみよう。(一)内は露名、価格は數年前のものなるに付き、現今はこれより幾分高い。

(一) 獵虎(ベビョール) らつこは毛皮中最高級品で殆んど男子用帽子、外套襟等に使用せられ、価格は短襟二〇〇圓乃至五〇〇圓程度、長襟はその二倍位、接ぎ合せ物は短襟の半値で、帽子は型により又古品は一定しない。

(二) 河獺(ウイドラ) 河獺は一般に非常に愛用せられる。河獺はかつては滿洲にも多量に産したが亂獲の結果、現今は年産僅か三〇〇枚乃至四〇〇枚に過ぎない。従つてカムチャツカ、カナダ、南米より輸入されてゐる。毛皮の價格及び命數はカムチャツカ物は一疋一三〇圓乃至二〇〇圓命數十年以上、カナダ物、南米物は前者が五、六〇圓乃至一五〇圓位、後者が三〇圓乃至五〇圓程度で何れも命數は五、六年位である。尙河獺には良否が多いので購入する場合には注意を要する。

(三) 膾膾膾(マルスコイ・コーチツク) 膾膾膾は高級毛皮で、男子用帽子、襟、外套裏、婦人用外套に使用される。この類似品に河獺の荒毛を抜いて黒色に染めたものがある。その鑑別は河獺は毛が柔く濕氣を含

めば、たつ、くに反し、臘臍は短毛にして色澤を有し恰も天鷲絨の如くで、濕氣に遭つてもべたつかぬ特徴を有することによつて解る。尙、哈爾濱等でコーチクとして販賣されてゐるものは概ねトルコアンゴラ産の白兔を獨逸で黒染せるもの或ひは米國に於いて養殖される鼠の一種(オルンダトル)を染色せるもので、一枚一圓乃至八圓位する。何れも丈夫でなく又命數が短い。

(四) 狐 狐には銀狐、黒狐、白狐、赤狐、十字狐、青狐等約三五種類あるが、これを購入する時は特に染色品でないか、犬の模造品でないか、手足の爪が完備してゐるか、胴と尾又は顔を接ぎ合せたものでないか等に注意する必要がある。

滿洲の市場に現れてゐる狐の高級品は、日本で飼育されたものが少なく、且つ銀狐の如く品物、價格等に於いて遙かに滿洲を凌駕してゐるものがあるので、こゝでは滿洲に於いて豊富に産する赤狐に就いて若干記すこととする。

滿洲に於ける赤狐の産地は三姓方面、吉林方面及び蒙古方面で、この中三姓方面のものは品質優良で往々最良品たるカムチャツカ物として販賣せらる。用途は一般に婦人用襟巻とし、悪いものは男子用外套裏毛皮に用ひ、又足や頭部を接ぎ合せて婦人用外套とする。時には染色して黒狐ともなる。價格は二、三〇圓より一〇〇圓位までである。

(五) 羊嬰兒(カラークリ) 羊嬰兒は羊の胎兒(事實は生れたばかりの赤兒)の毛皮で上品且つ美麗なるた

め、男子用帽子、外套襟、婦人用ロングコート等に用ひられ耐久力も良い品物は二十年位に及ぶ。羊嬰兒の自然色は灰色であるが、黒、鼠、茶等に染色される。而して皮は柔軟にして感觸がなめらかで色澤あり、毛の卷工合が波を打つた様に揃ひ毛の伸び難いもの程良品とされてゐる。卷工合の小さいもの、毛立つたものはよくない。尙これには毛を布へ織り付けたもの、毛を貼りつけたもの、或ひは人工的に毛を縮らしたものの、又古毛皮等を接ぎ合せたもの等があるので注意を要する。價格は一枚一〇圓乃至五、六〇圓位である。

(六) タルバカン タルバカンは海拉爾、滿洲里間で多く捕獲される。體は兎より稍大にして短毛を密生する。毛質は脆く、色は黄褐色にして所々に黒い刺毛を有する。春季に捕獲されたものは黄味を帯び、秋季に捕獲されたものは青味を帯ぶ。而して品質は後者が勝る。春物一枚一圓五〇錢位、秋物二圓前後である。尙該獸はベストの媒介獸なるにつき取扱ひには注意を要する。

(七) 緬羊毛(ツゲイカ) 緬羊メリノウ種の毛を加工染色せるもので、赤茶色、黒色、灰色、銀模様等がある。男子用帽子、襟、外套裏、婦人用外套に使用せらるゝが、防寒用として實用的であり價格も安く頗る需要が多い。價格は大型でハンガリー物一枚一五、六圓、米國物二二圓前後、蘇聯物六圓前後である。

(八) 兎 兎には種類が多いが何れも毛が密生し美麗且つ安價なるため、防寒、裝飾兩方に使用される。子供用防寒具の各種に利用され、又男子及び婦人用防寒具にも用ひられる。價格は白兎九〇錢、家兎四〇錢、灰色兎二〇錢前後である。尙、白兎は染色され臘臍の模造品が作られる。

(九) 羊皮 羊皮は滿洲の北部、西部より多量に産する。羊皮の白色のものは滿服の裏用に供せられ、又子供用外套にも適する。黒及び灰色に染めたものは男子用外套裏に用ひられる。価格は一着分一五圓乃至四、五〇圓位である。

(十) りす(ペールカ) りすは各國に産するが、北滿産りすは毛が最も多いことで著名である。婦人用襟巻外套裝飾用として頗る需要多い。哈爾濱で一疋一圓五〇錢より三、四圓位で婦人用外套には約一五〇枚を要する。

(十一) 猫皮 猫は皮質も丈夫にして色彩も良好なるため、實用的防寒具として頗る需要が多い。主として婦人用襟巻、外套、子供用帽子、外套等に使用する。

但しこの屑皮にて造つた防寒具は極めて綻び易いので注意を要する。価格は一疋一圓前後、婦人用外套五、六〇圓位である。

(十二) 以上主要なる毛皮に就いて記したが、滿洲には未だ多量に優良なる野獸毛皮が生産されるので、それ等の生毛皮一疋分の價格を参考のために記して置く。

鼬の一種(コロク) 七圓前後

獾子(バルスーク) 一二圓前後

山猫 三圓前後

浣熊(エーット) 三五圓前後

狼 二〇圓前後、

シベリヤモルモット 七錢前後

シベリヤイタチ 一〇圓前後

鼠 五錢前後

仔馬 一二圓前後

しまりす 五錢前後

もぐらもち 二五錢前後

野生羊 一〇圓前後

(口) 毛皮の購入法

毛皮の良否を鑑定することは極めて難しい。何故ならば現在の毛皮の染色、植毛、その他毛皮に關する技術は犬や兎の毛皮等安價な毛皮が巧妙に染色され狐その他高級品の毛皮として公然と販賣される程進んで居り、又同じ動物の毛皮と雖も一枚皮のものと同切皮をつぎ合はせたものがあり、一枚皮の中でも個體によつて色澤、鞣しの良否、毛の粗密等によりその價格に大差を生じ、斯く毛皮と云つても千差萬別でその鑑別には相當の經驗を要するからで、素人が相場通りに毛皮を購入することは極めて困難である。次に素人としての毛皮購入法を若干述べてみよう。

一、信用ある店で買ふこと 何品によらず信用ある店で買ふことは購買者の心得べきことであるが、毛皮の如く識別の困難な品物に於いて特に然りと云ひ得る。従つて毛皮購入に際しては若干でも鑑別眼を持つてゐる知人等を同行すればよい。又自分一人で求める時には、毛皮商の中に市價二、三〇圓の品物に四〇圓、五〇圓と法外な正札をつけてゐるものがあるので、少くとも誰かに話を聞いて凡そ自分の買ふ品物に見當をつけ、煩雜ではあるが各皮毛商を一當りして然る後購入すべきであらう。

二、脱毛及び疵の有無 大體毛皮の格安物は禁物である。かゝる毛皮は脱毛し易いもの或は疵の多いものが多く、一、二年位しか使用の出来ないものが少くない。毛皮によつては三、四〇年以上の長年月に亘り保存が出来るものもある。従つて新しいからと云つて樂觀は出来ないし、又古いからと云つて爪はじきすべきものでもない。然し何と云つても新しい毛皮がよいが新しいものでも毛の脱落し易いものがあるので、食指と中指で軽く毛を挟み、毛の寝た方向に引張つてみて抜けなければよい。

次に疵のある毛皮は値段も無疵のものに比しぐつと落ちる。而もそれは又巧妙に縫ひ合はせてあるので、素人目には一寸分らないが裏から見れば直ぐ解る。然し毛皮によつては裏の見えぬものがあるので表より指先にてよく押へて検査する必要がある。

三、鞣しの良否 鞣しの不良なものは、毛皮を手で揉んで剛過ぎるとか、握つてみて厚紙に觸れるが如き感がある。又ガバ／＼音のするもの、所々不平均な感じを與へるもの、或は悪臭を放つもの等は何れも鞣しの不良なるものである。これに反し鞣しの良いものは觸感が柔軟にして又柔和な氣持を與へるものである。

四、毛量 毛量は毛量の豊富なもの程防寒上優れ又耐久性に富むのが普通である。一般的の鑑別法としては、毛を口で吹き分け地肌の見えぬ程度に密生せるものがよく、かゝる毛皮は外觀美並びに抵抗力も上位にある。而して毛量の多少は捕獲時期と密接な關係があり、冬季に捕獲せるものは夏季のそれより良質なること勿論で値段にも大分開きがある。捕獲の最良時期は十二月末より一月下旬迄とされ、この間のもものは毛皮

に色澤多く且つ堅牢である。

五、毛質 毛質は防寒を目的とする場合或は裝飾を目的とする場合によつて自らその鑑別に差相を生ずるが、共通して重要なことは、毛質が滑かにして色澤に富むこと、刺毛が縮れず良く揃つてゐること、巻毛型のもものは、その型なりに整つて綺麗に伸揃つてゐることが必要である。毛質の良否を確定するには、毛色毛艶、毛並、毛の感觸、刺毛と綿毛の多少、毛の弾力性を検査する必要がある。これは肉眼並びに手の感觸によつて推斷するのであるが、弾力性は指頭を以つて逆に毛面を弾くとか、毛面を口で吹いて出来た掃鉢状の窪で判定する。

六、購入時期 裝飾用の毛皮は別として、防寒用の毛皮は初冬は大體高値のやうである。安い時期は正月その他の決済期で商人として現金の入用な時或は春になり毛皮をストックする必要がある時等で、その頃を見計つて購入すれば比較的安く購入出来るものゝ如くである。然しこの時期は品物が豊富でない場合がある。

(ハ) 毛皮の手入並びに保存法

毛皮の手入並びに保存法が悪ければ、一〇年以上も持つものが僅か一、二年にして使用に耐へないことになる。従つて毛皮の手入は常に怠つてはならないのである。今その主なる注意に就いて述べると、毛皮は時々軽く叩いて塵埃を除去するとか或は毛の寝た方向に軽く撫でて毛皮を揃へるとか、又狐の如く頭と尾とを

持つて逆に吊して振り再び毛の寝た方向に撫でて倒れた毛を起す等の手入は常に行ふ必要のある手入である。

春になり毛皮を仕舞ふ時には先づ陰乾して弾力性に富む細い棒で軽く叩いて埃を除去し、汚れの甚しい場合はクリーニングに出し、少々の汚れは揮発油で拭き、数時間風乾せしめる。然る後ナフタリン、ホドヂン錠等の如き驅蟲剤を入れて洋紙にて丁寧な包み箱等に入れ濕氣を呼ばない場所に保存すればよい。保存には桐或ひは樟の木の箆司に下積とならぬ様に入れて置くのが最も理想的と云はれ、トタン等の如き金屬性の箱は濕氣が溜り毛皮を固める憂があるため避ける必要がある。かくして夏季三、四回も蟲干を行へば、蟲がつき毛の抜ける箇所も、早期に発見が出来最も安全である。而して毛皮に寄生した害蟲の驅除法としては最初被害毛皮を乾燥し、櫛をかけて幼蟲の巢を除き、竹棒により充分塵を叩き出した後、揮発油を以つてドライ・クリーニングするのである。

六、食 物 の 話

滿洲に生産される食物は元來食物が居住する地域によつて種類、生産高等に限度があり、而も人によつて嗜好を異にしてゐる關係上その悉くが日本と同一とは云ひ得ない。然し大體日本に生産されるものと大差はなく、日本人の嗜好上全然支障はない。

滿洲に於ける日本人の主食物は日本と同じく米であつて、滿洲へ來て日本人の主食物が粟、高粱、玉蜀黍等になると云ふことはない。尤も米は日本人の急激なる増加により國內生産のみでは不足を告げ、年々朝鮮、泰國より莫大な量が輸入され、且つ日本内地と同じく康德七年より切符制によつてその配給が行はれてゐる。

蔬菜に就いては(物價の項参照)夏季多量に生産されるが冬季は嚴寒になるため、南滿の一部を除きその生産は殆んど不可能である。従つて冬季市場に出廻る蔬菜は秋季收穫せる蔬菜を貯藏せるもの及び日本内地、臺灣より輸入されたもので、冬季の蔬菜は年中生産することの出来る日本と異なり、極めて貴重視される。茲に於いて滿洲人も露西亞人もその貯藏の知識が頗る發達して居り日本人の學ぶ所が少くないのである。食物は我々の保健に直接影響を及ぼし、殊に氣候、風土の著しく異なる滿洲に於いては特にその攝取方法に注意

しなければならぬ。

(一) 食物と健康との關係

滿洲の夏季は食糧に不足は無く充分に榮養が攝れるが、冬季は殆んど生産が不可能となるため、野菜は少なくなつて高價となる。従つて經濟的原因から榮養の不足となつて、健康を害することがある。さうしたことのため日本人としては滿洲に於ける先住民たる滿洲人、蒙古人、露西亞人等の食物の種類、貯藏法、調理法に學ばねばならぬ點が多くある。即ち家畜を追つて暮す蒙古人の冬の生活状態を見ると、彼等は殆んど野菜を食へないが、黄油(蒙古バター) 奶豆腐(蒙古チーズ)等の乳製品を食し、羊乳、牛乳、酪酒を飲み茶を愛好してゐるがこれも經驗の齎した合理性と云ふべきである。又露農人の慣習を見ると各戸に牛を飼ひ牛乳を飲み、バターを作り、冬季は馬鈴薯と玉葱を多量に貯藏して食膳に上げてゐるが、これも亦簡にして要を得た榮養の道である。

元來日本人は一部の人を除いて大部分が野菜、果物に恵まれ、野菜の有難味は殆んど知らない。寧ろ反對に野菜は下等な物として魚肉及び肉を尊しとしてゐる。斯様な人が滿洲に來れば野菜は高くこれに比し肉類は比較的安いため米と肉類が主となり、不知不識の間に榮養不良となつて健康を害ねて行くのである。この潜在的榮養不良こそ最も恐るべきもので凡ゆる疾病に罹り易い原因となることは自明の理である。

抑々穀物及び肉類は體內で吸収され、ば元來中性が中性に近い微アルカリ性であるべき血液の均衡状態が破れ、アチドーシス即ち酸血症となる。我々の體が若し酸血症になれば、骨格及び齒を溶解中和して生命の保持を計るやうに出來てゐるため、我々の骨格は輕弱となり、又むし齒になるのは當然の歸結で小兒に於いては胸幅が狭く、丈の高い病氣に罹り易き體質にならしめるのである。

又肉類或ひは精白せる穀類には野菜に多量に含まれてゐるVBが殆んどないため、砂糖或ひは澱粉の如きものを多量に含む菓子を食べる時には、これが體內で不完全燃焼して乳酸その他各種の有機酸が血液中に鬱積することになり、又澱粉、砂糖の如き含水炭素が不完全燃焼する時には我々の活動するエネルギーを出す體中の脂肪の燃焼も妨げられて有機酸成分となり、二重にも三重にもこの恐るべき酸血の度を高めるのである。穀類及び肉類を多量に攝る害はこれ丈に止まらず、これ等の食物にはVCが全然含まれてゐないため、特に冬季は運動不足に陥り易いことに關聯して便秘を起し腸内の有害物が吸収され、血液中に移行して健康を害するのである。

斯く偏食には種々の弊害を伴ふが、要するに従來日本人が滿洲に來て病氣に罹り又罹り易いのも、偏食に陥るからで、上述の如き健康状態のものが少くなかつたことは見逃し難い事實である。これを防止するには云ふ迄もなく肉類の過食を避け野菜を充分に攝取する必要がある。食物と榮養及び健康との關係は表に示すと次の如くである。

第一表 榮 養 素 表

種 類	作 用	多 量 に 含 む 食 品
蛋 白 質	2.1. 身體の實質、(血肉)の形成 熱及力の源泉	獸肉、鳥肉、牛乳、卵、豆類及其の製品、麩
脂 肪	2.1. 熱及力の源泉 一部は身體力實質形成	バター、ヘッド、牛豚肉、脂肪に富む魚肉、菜種油、胡麻油、大豆、落花生、大豆
炭 水 化 物	熱力の源泉(一部は脂肪に變ず)	穀類、澱粉及其の加工品、薯類、糖類
無機物(礦物質)	2.1. 骨、齒の主成分となる 組織、體液中にあつて生理作用の調節	一般に蔬菜類特に豆類に多い、その他牛乳、卵
例1 カルシウム	2.1. 骨、齒の主成分 組織の緊張性	牛乳、チーズ、卵、鶏、魚の骨、落種草、キャベツ、小麥、モヤシ
例2 燐	1. カルシウムと共に骨、齒の主成分 2. 生理作用の調節	牛乳、肉類、種子類(豆類、胚芽米、玄米)
例3 鐵	2.1. 血液成分となる 組織呼吸に關與す	卵黄、赤肉、糖蜜、豆類、小麥粉、落種草、玄米
例4 沃 度	2.1. 甲状腺内分泌液の成分となる 熱河の甲状腺腫は主として沃度の缺亡による	海藻、海魚類
ビ タ ミ ン	生理作用を調節	第二表参照

附 1. 纖維素嗜好素 食品中にあつても直接榮養にはならぬのが、消化器管を刺戟して蠕動を高め、便通をよくする纖維素と食味を現はし、食欲の作用のあるエキス分の如き嗜好素とがある。これも亦榮養素に入れてもよからう。

2. 日光と空氣 日光中の紫外線と空氣中の酸素とは消化器外から攝取される重要な榮養素と見てよく、明るい晴天下の日光と清涼な空氣に身體を晒す事は食物と同様必要である。

第二表 ビ タ ミ ン 表

種 類	極 端 な 缺 亡 症	最 も 多 く 含 む 食 品
V A	3.2.1. 夜盲症 眼乾燥症 發育停止、その他	肝油、バター、卵黄、クリーム、牡蠣、鰵、チーズ、牛乳、肝臟、鱈、牛肉(脂肪部) 落種草、大根葉、青豌豆、トマト、人蔘、甘蔗
V B B 2 1 B	脚 氣 ペラクラ病(發育停止)	肝臟、牡蠣、酵母、玄米、麥粉、トマト、落種草、キャベツ 豆類、玉葱、林檎、馬鈴薯、小麥胚子、半搗米、大豆、トマト、糖蜜、落種粉
V D	佝僂病 カルシウム、磷の同化不良の爲骨、齒の發育不良又は畸形を呈する病氣	レモン汁、オレンジ汁、苺、チサ、玉葱、蜜柑、キャベツ、落種草、食物 大根、材檜、人蔘、豆モヤシ、生バイナップル等、その他生の植物性
V E	不妊症 鐵分吸收不全	鱈、鮭、鰵、肝油、バター、全乳、椎茸類(エルゴステリンとして含有) エルゴステリンは紫外線によりビタミンDになる 牛肉、小麥胚子、米胚子、小麥、玄米、胚芽米、カブラ菜、小松菜、落種草、その他葉菜類

總べてのビタミンの軽度の缺乏状態は吾人の眼にその障害は認識されず、不知不識の中に全身的生理異常を起し消化器病、呼吸器病、其他傳染病に罹患され易き性質を作る。

この潜伏状態にある缺乏症こそ滿洲に於いては最も恐るべきもので大いに注意しなければならない。

(二) 混 食 奨 勵

滿人の主食物たる小麦粉は不足勝ちで高粱粉、玉蜀黍粉等の代用粉一、二割混入の奨勵が行はれ、すでに奨勵だけでなく、強制的に混入が實行されてゐる。日本人の主食物たる米は内地と同様七分搗米が一般に供給されて居り、その量は新京に於いては一日、大人一人當り三合である。従つて混食することは強制的には實行に移されてゐないが、その奨勵は行はれてゐる。日本内地では混食と云へば主に大麥であるが滿洲では大麥だけでなく、高粱、玉蜀黍、粟、大豆等その種類は豊富である。

滿洲で穀類の混食には生産の豊富なる點より又日本人の嗜好上より、高粱の混食が最もよいと云はれてゐる。高粱は勿論精白されるのであるが、その精白には從來都會に於いても精白するのに水を打つて表面を軟化させ、これを原始的な石頭碾子(ローラー)と云ふ道具で行つてゐたため精白は不完全であつた。元來高粱の外皮には色素やタンニンを含んで居り、このタンニンのため味覺が劣り、又色素は水に溶けて飯全體を煉瓦色に染めて外觀を悪くし、日本人の嗜好に合はなかつたし、又精白する時水を打つため水分(四〇%前後)を

含み全く貯藏に耐へぬものとなり、夏季は二三日で青黴が生える有様であつた。従つて日本人は實質以下に評し極端な下等食品と思ひ込んで居るのである。しかし最近機械精白が行はれ、以上の缺點は除去されたので混食の試食會等に於いては粟を混ぜた飯よりも評判がよい。

尙、玉蜀黍は引割つてそのまま混飯することも出来るが、粟よりも未だ遙かに一般日本人の嗜好に適しないやうである。しかし製粉して小麦粉に混用したものはそれ程味は悪くはない。

従來日本人の主食物は米に限られてゐたが、他の雜穀を利用する事にすればそこに非常に弾力性が増すのである。又日本人が嗜好に慣れてゐる大麥、蕎麥等は滿人の食糧になつてゐなかつたため今まで殆んど作られなかつたのであるが、然し増産は比較的容易で、日本人の増加と共に年々その産額が増加してゐるので近き將來には充分利用出来るやうになると思はれる。

滿洲に住む日本人の米食單一主義はその生産上、保健上より、又現非常時局に際してこれを精算して米と高粱、粟、麥等の混食に移行されんことを推奨したい。混食は大陸に即した食である。次に粟、高粱との混米飯の炊き方を示してみよう。(量は日本榊)

一、粟 混 米

分量(一人分) 七分搗米一合、粟三勺、水一合五勺

炊き方 粟を前日洗つてそのままに浸して置く。粟には小砂が多いため砂の除去を充分にする必要があ

る。米は先づ最初米のみ炊く場合と同様に洗つて釜に水加減して火にかけ、沸騰後別に引き上げておいた粟を釜の上部に入れ、粟が下層に沈まぬ様に攪拌し、然る後再び蓋をなし、沸き上つた後火を弱めて充分蒸らすのである。

一、高 梁 混 米

分量(二人分) 七分搗米に精白高粱二割混合せるもの一合三勺、水一合五勺

炊き方 材料は前日洗ひ水加減して少量の鹽を混入し、炊き方は普通の飯の炊き方と同様であるが、強火にかけ沸騰せる後火を弱めて特に充分蒸らす必要がある。尙高粱は精白の充分ならざる場合が往々あるが、かゝる場合には最初より混合をせずして、高粱の澁抜きを行つた後用ひるがよい。その方法は一日以上高粱を微温湯に浸漬し、その間水を二、三回取りかへれば澁が抜けて美味になる。

營養より見た滿洲人の食料と作り方

滿洲には數千年來より發達せる支那料理があり、支那料理は營養的に見て頗る優れ、寒い滿洲に最も適した食物である。如何に優れてゐるかは次表に示す如くである。

支那料理(主食物)の營養價表

品 種	水分 %	蛋 白 %	脂 肪 %	含 水 炭 素 %	百 瓦 の カ ロ リ	纖 維 %	灰 分 %	一 個 の 重 量 (カ ロ リ)	百 カ ロ リ 値 段	備 考
1 饅頭	四二・七	七・六八	一・〇〇	四八・四四	二二九・四	〇・三三	〇・五八	二二五・〇	〇・三三	
2 包米饅頭	四九・五	六・五三	〇・八五	四二・四三	二〇八・六	〇・二〇	〇・六四	二七五・〇	〇・二〇	
3 油 餅	四一・〇	六・七八	一・八〇	四九・五九	二四七・〇	〇・四〇	〇・五八	二八八・八	〇・三三	
4 尖 餅	三三・〇	一〇・九七	三・五四	五九・一三	三三〇・三	一・九二	一・一六	三二五・〇	〇・二〇	
5 餅 子	五二・四	五・五八	二・二六	三八・七五	二〇六・五	〇・七三	〇・八六	二四六・〇	〇・三三	
6 鍋 餅	五三・六	六・六〇	〇・六〇	五九・六九	二六五・〇	〇・四八	〇・七七	二四二・一	〇・三三	小麦粉に鹽若干
7 包米鍋餅	四四・五	五・三〇	一・七三	四六・四五	二二八・六	〇・七九	一・〇九	二二七・三	〇・三三	下等小麦粉に包米若干
8 糖 餅	三三・五	七・六二	〇・六二	五九・一	二四九・八	〇・三〇	一・〇〇	二五〇・三	〇・三三	糖入り
9 鍋 餅 角	三三・九	七・四三	一・七三	五三・三	二六〇・六	〇・六六	一・〇〇	二五〇・三	〇・三三	一名烙餅
10 糖 火 燒	三三・九	六・八〇	〇・四七	六八・四	三二二・九	〇・一五	〇・七四	三二二・九	〇・六六	一種の燒餅
11 燒 餅 (一)	二九・二	八・〇六	五・三三	五九・九	三三三・四	〇・四九	〇・七三	三三三・四	〇・六六	小豆餡入り
12 燒 餅 (二)	一八・三	八・〇三	六・二六	六九・一	三六五・四	〇・二〇	〇・四九	四〇七・七	〇・六六	砂糖餡入り
13 燒 餅 (三)	二七・七	八・九二	六・四三	五五・七	三三三・七	〇・五三	〇・七八	三三三・七	〇・六六	外胡麻内油鹽
14 燒 餅 (四)	二六・九	七・二八	〇・六六	六四・八	三〇一・五	〇・三三	〇・四一	三〇一・五	〇・六六	小麦粉に鹽若干
15 包 子	六三・四	五・〇三	三・五〇	二六・八	一六三・三	〇・五〇	〇・六四	二五七・〇	一・九〇	圓包子

に胡麻油をいれたり、また焼く時に炒つた胡麻を表面につけたものもある。

餃子 豚マンヂユウとして日本人に知られてゐるのはこれである。小麦粉に湯を入れて充分捏ねて徑七、八分大の團子を造り、麵棒を轉がして圓い板状にする。これにひき肉とネギ、白菜等を細かく刻んだものを包み込み、油をひいたフライ鍋で焼き熱湯を注ぎ、直ぐ蓋をして水の蒸發するまで加熱したもので鍋貼兒クオチアゴール（焼餃子）と云ひ、焼く代りにゆでたものを水餃子、蒸したものを蒸餃子と云ふ。

包子 小麦粉に少量の鹽、胡麻油、フクラシ粉を加へ、微温湯でよく捏ねて手につかぬ程度になつた後、長い棒状にのばし片方より千切り煎餅のやうに麵棒でのばす。その中に豚肉の挽肉に、白菜、韭、玉葱の細かく刻んだものを加へて醬油、味噌、胡麻油などで味付けしたものを饅頭のやうに包んで蒸して作る。

(三) 滿 洲 の 水

滿洲の都會では殆んど水道の設備があつて水に恵まれてゐるが、地方的には日本内地に於いて云はれてゐる如く、可成り水質が悪い。而して滿洲の水は一般に硬度高く、石灰、マグネシウム鹽類、鹽素、鐵、マンガ、その他各種の有機物を含んでゐる。かゝる水は勿論飲料不適水であるが、全滿を通じて行はれた井水調査の諸結果をみれば、その大半は飲料不適水で、この不適水の半數餘りが細菌によつて汚染されたものとなつてゐる。

斯くの如く滿洲の飲料用水は一般に良質とは云ひ難い状態にある。然し土地開發の進展するに伴ひ、飲料用水としてのみならず工業的にも水の問題が切實なる問題となつて來たため、最近は地方的にも夫々急速にその解決が計られつゝある。

而して水は我々日常生活に必要缺くべからざるものであると同時に、他方疫病の傳染とも密接なる關係があつて腸チフス、バラチフス、赤痢等消化器系統の傳染病は水によつて媒介されることが少くないため、生水を飲むことは危険である。而も滿洲に於いては一般に未だ滿洲人の衛生思想が乏しいのである。

滿洲人の飲料用水の取扱ひ方を見ると、彼等は井水を沸騰せしめずして絶対に飲まないのも（水道水の如く安全なる水は良く飲まれる）、自然に體驗せる自衛自守の立場からで、彼等は盛夏と雖も必ず開水と云つてぐらぐら沸騰せしめた湯を飲用に供してゐるのである。これは日本人の大いに學ぶべき點で、飲用に供する熱湯は常に魔法瓶によつて保有するのがよい。井水で食器等を洗ふ場合には熱湯を用ふることは最も賢明なる手段であるが、それは多少困難なことを考へられる。従つてかゝる場合には日本でも地方によつて行はれてゐる方法であるが次の淨化方法を採用するのがよいと思はれる。

(イ) 晒粉による場合

晒粉七・五瓦をビール瓶に入れて水を加へ振盪せる後密栓して沈澱せしめ、その上澄液を次表の如き割合にて投入する。この際井戸水と混和を行へば一層有效である。

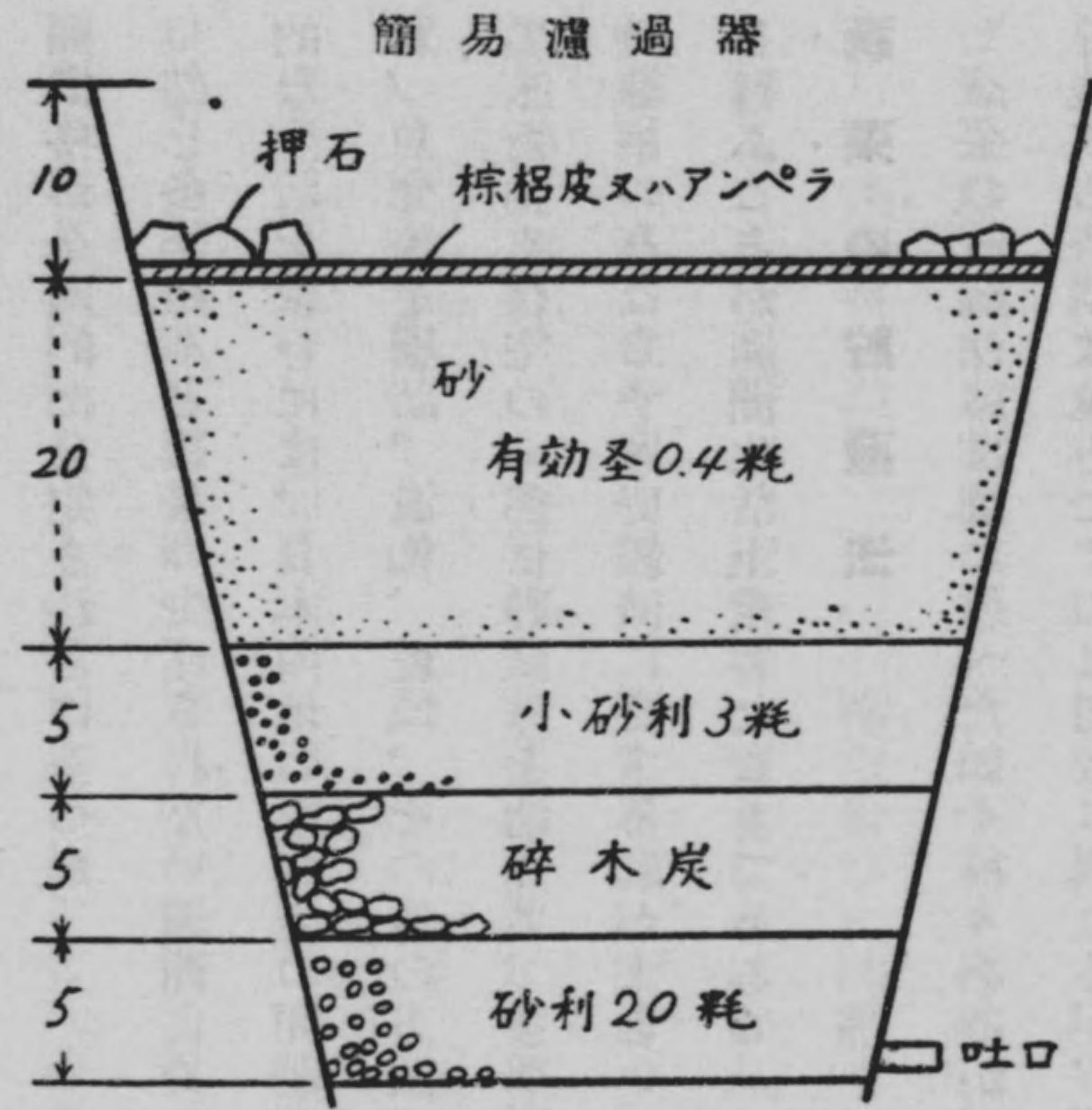
消毒用晒粉投入量表 (兒玉博士による)

井徑	二尺		三尺		四尺	
	水量	藥量	水量	藥量	水量	藥量
五尺	二四	四	五四	五	一五	二瓦
四尺	一六	三	四六	四	一三	一瓦
三尺	一〇	二	三〇	三	九	一瓦
二尺	七	一	二一	二	六	一瓦
一尺	四	〇	一〇	一	三	〇
水量	1/2	1/2	1/2	1/2	1/2	1/2
藥量	1/2	1/2	1/2	1/2	1/2	1/2
液量	1/2	1/2	1/2	1/2	1/2	1/2
水量	1	1	1	1	1	1
藥量	1	1	1	1	1	1
液量	1	1	1	1	1	1

晒粉消毒による有効期間は六時間位であるため、朝、晝、晩の三回に投入するが好ましい。然し分量を入れ過ぎると晒粉中の鹽素が悪臭を放ち飲用不可能となるため注意を要する。

(口) 濾過器を使用する場合

濾過器はその種類多く、何れも特徴を有し一概にその優劣を決定し難い。又價格も低廉でなく、購入に際しては一應専門家に相談して決定すべきである。然し家庭に於いて手軽に行へ、又比較的成績の良いのは四斗樽を利用して水を濾過する方法で、地方に移住するものは特に知つて置く必要のある方法である。



四斗樽の下部に吐口を設け、次に下より二〇耗大砂利を樽高四五に對して五の割に入れ、順次上へ碎木炭を同じく五、三耗大小砂利同五、〇・四耗以下の砂二〇耗を入れ、最上部には棕栢皮又はアンペラを敷き、最上部に押石を並べる。最上部は水を入れるため全高四五に對し一〇の割に残して置く。

この濾過器は最初水の通りが極めて良好であるが、この時期は完全に濾過されてゐるのでなく、數日後通水が最初より悪くなつた時に初めて效力を發揮し、細菌まで濾過されて淨水が得られる。従つて通水が悪くなつても濾過層を攪拌すべきではない。然し普通約半年も使用すれば濾過能力が著しく減少して來るので、かゝる場合には上層部の細礎層のみを取出して洗滌するか或ひは別に用意せる清淨砂と取替へるのである。

(四) 食糧品の貯藏

滿洲に於いては氣候の關係で夏季には各種蔬菜類が可成り豊富であるが、一度冬季に至れば南滿の一部を

除いて殆んどその生産は不可能となるため、冬季間の蔬菜は總べて秋季收穫物の貯蔵せるもの或ひは日本其他からの輸入品によらねばならない。かゝるため従来は冬季は小さな林檎が一箇十五錢も二十錢にもなり、又内地産大根の凋びたものが一本五十錢以上にもなり、かつて滿洲に於ける冬季の野菜の不足と高價な事は日本に居てはとも想像出来ぬ程であつたが、國都新京では全國にさきがけて、市營の貯蔵庫を設け既に相當な成績を見せて居り目下全國的に圓滿な配給につき研究されてゐる。又物價抑制政策により各種蔬菜の最高價格が全國的に公定されるに至つた。

然し冬季殆んど蔬菜の生産されない滿洲に於いて蔬菜を貯蔵することは生活安定の必要條件で滿洲で合理的な生活を營むには、日本内地の嗜好上の問題が多分に介入してゐる貯蔵とは異なつた意味で夫々野菜、果實、魚介等を曝詰、漬物、乾燥、その他の方法で加工し貯蔵して置く事が必要である。従来ロシア人が行つて来た如く住宅の一部に貯蔵庫を造つて、冬季缺乏する様な食糧品殊に蔬菜を貯蔵する準備をして置くのは時節柄のみならず家庭經濟に資する處が大きい。兎に角、量の多少に拘らず家庭に於いては特に蔬菜の貯蔵を行ふことが滿洲生活上重要なことである。

蔬菜の貯蔵法

蔬菜の貯蔵法には既に述べた如く種々あるが、こゝでは主として生蔬菜の貯蔵法に就いて述べる。蔬菜を貯蔵する時期は地方によつて可成り異なるが、新京を標準にすれば十月中下旬以後からで比較的氣溫の高い

新京以南の地方に於いてはこれより遅く、早く寒さの襲來する北滿地方に於いては新京より早く行はなければならぬ。一般家庭に於いて貯蔵を本格的に行ふには臺所の床下に穴を掘り、煉瓦或ひは木材を用ひて出入口兼換氣口を設けて蔬菜の腐敗並びに凍結を防ぐ必要がある。この窟内の溫度は大體攝氏一度乃至五度迄を適當とされて居り、設備さへ完全ならば貯蔵の容易な根菜類より、難しい葉菜類に至るまで各種の蔬菜が長期間に亘つて貯蔵し得る。然し滿洲の家には玄關或ひは臺所の如く一重窓の箇所があり、かゝる場所は低溫となるため、かゝる場所を貯蔵に困難な葉菜類貯蔵に當てるのも一法である。以下各種蔬菜類の貯蔵法に就いて記すこととする。

白菜、玉菜の如き葉菜類は一、二日天日で軽く乾燥せしめて貯蔵に入れ、一週一回位の割で上下積替を行ひ、その際腐敗部は腐敗せる箇所のみ切捨てる。貯蔵庫の設備のない所では新聞紙に包み冷所に置けば一月頃まで容易に貯蔵し得るのである。尙、これ等の蔬菜は凍り易いが、若し凍れる場合は急激に暖所へ入れず、多少暖い箇所に移し徐々に解氷せしめれば大體舊狀に復するもので凍傷激しく惡變せる箇所は除去して再び前述の如く貯蔵する。然し一度凍結したものは未凍結のものより貯蔵力に乏しい。

菠薐草は一回軽く凍らしめ、然る後藁苞にして零下二度乃至八度の箇所に保存する。葱も大體この方法に従つてよく、何れも使用前には徐々に解氷せしめれば貯蔵前の如き生々とせるものが得らる。胡瓜の如きものはなるべく晩秋に收穫せるものを選びポルドー液（市場に販賣せられるものを使用すると便利である）で表皮を消

毒し、一本づゝ軟かき清潔な紙で包み冷所に一時貯へ、然る後白菜の間へ挿入して貯蔵する。斯くすれば一月頃まで貯蔵し得らる。

次に、人蔘、牛蒡、里芋、蕪薯、玉葱、じゃが薯等の如きものは頗る簡單で充分乾燥せる砂に貯蔵すればよく、一般家庭では木箱を用ひ乾燥せる砂と十日位陰乾したこれ等蔬菜と交互に入れて貯蔵すれば、約半年間貯蔵し得ると云はれる。大根も大體この方法でよいが、日本種は一般に鬆が入り易く稍々長期の貯蔵に困難で大根の貯蔵には寧ろ滿洲在來種（長圓形で肉質が固い）が適する。

七、住 宅 の 話

住居と云ふものは建築技術上の問題と共に生活保健上の問題を含めたもので、従つて地理的に又社會的環境に最も即應せる合理的なものでなければならぬ。かゝる故に滿洲の如く冬季氣温の低くなる所では種々の點で日本内地とは餘程趣を異にしてゐる。即ちこの低温と云ふことより建築の基礎地盤凍結膨脹による建物基礎の被害を防ぐために、基礎の深さを土地の凍結する箇所まで深く掘り下げてあり、その深さは凍結以下一・五米乃至二米に及んでゐる。又壁體より温度の逃避を防ぐために壁の厚さは頗る厚く新京附近では普通壁厚三〇厘米餘りで、防寒に就いて異常な關心を持つロシア人建築物中には壁厚六〇厘米内外に及ぶものも見られる。その外滿洲の建築の特徴として床板が二重張りにしてあるとか、天井に土を載せるとか、或ひは窓を小さく且つその數を少くし、而も硝子窓を二重にしてあるとか、何れも寒さに對する特殊施設がしてある。加ふるに日本とは異なり暖房装置が完備されてゐるため、室内は冬季の酷寒の候と雖も保健上理想的な温度が保たれる。以上の如く滿洲の住宅は頗る防寒的に造られてゐる。かゝるため夏に於いては室内は涼しいのであるが、防寒防暑的に勝れてゐる逆効果として、四季を通じ光線特に紫外線の室内入射の不足、換氣の不良な缺點等が擧げられる。この室内光線の不足、換氣の不良なことは滿洲に於いて生活する場合充分認識し

て置かなければならない。而して室内は日本人の居住家屋に於いては畳が敷かれて居り、殊に日本人の住宅として建てられたものの室内構造は殆んど日本内地のそれと大差なく押込、床の間障子等も設けられてゐる。たゞ煖房装置にペーチカ(後述)が取付けてある住宅は、間取りの中央に大黒柱の如くこれがとりつけてあるため見なれぬものにとつては異様に感ぜられる程度に過ぎない。尙、滿洲に於ける日本人の住宅は洋式に近いため、内壁の大部分は日本の如き土壁でなく、石灰モルタルが塗布してある。(壁が多いため、室内裝飾を行ふ場合ロシア人の室内裝飾法が頗る参考になる)

建築材料は石、煉瓦、竹、木等であるが、地震が殆んどないため石及び煉瓦を積み重ねた積立式建築物が一般に多く、竹や木を組合せた結構式建築法によるものは少い。煉瓦には赤煉瓦、黒煉瓦、空洞煉瓦(ホロタイル)等の種類があり、又滿洲特有の日乾土煉瓦(土坯子)と云ふ粘土に藁切を混ぜて固め天日で乾かしたものもある。煉瓦が一般建築物に用ひられてゐることは言を要しないことで、土煉瓦は農家の壁に多く用ひられ相當の耐久力があり、又製造及び建築の容易なること等により開拓民の住宅には盛に利用されてゐる。尙都會地では鐵筋コンクリート又は鐵骨を使用した家屋が漸次増加してゐる。

石材は建築の基礎工事、石垣下積、窓及び出入口の迫持用として用ひられてゐるが滿洲では一般に石材が不足してゐるため一般に使用されない。木材は北滿及び鴨綠江岸産の紅松、白松材が多く用ひられる。尙滿洲に於ても三河地方(興安嶺東南地方)に居住するロシア人は木材を主要材料として住宅を作つて居り、木

材の容易に得らるゝ地に居住する日本人(林業開拓民)のために、その建築法が盛に研究されてゐる。

(一) 防 寒 と 保 温

滿洲に於ける建築物が極めて防寒的に造られてゐることは先に述べた如くである。然し如何に防寒的に造られてゐるとは云へ、建物より熱は常に放射され冷却される。この手段として家屋より放射される熱の防止即ち外廊による防寒方法と採煖方法とがとられる。

(イ) 外廊による防寒、保温

外廊による防寒、保温方法を述べるに先立ち、先づ建物の熱發散を起す箇所、即ち外氣に直接面してゐる部分からどんな割合に熱が逃げるかを、普通の二階建の住宅について調べられた概略的な數字を示すと、(但し次の數字は太陽の直射で受ける熱の供給を考慮してゐない)

窓硝子全面より	二五%
壁	三〇%
天井(普通防寒層のあるもの)	一五%
床及び畳	五%
窓、扉の隙から入る風で起る空氣の入替り	二五%

右の如く熱の放射損失は壁、窓硝子及び窓、扉の隙間より入る風により生ずる空気の入れ替りが最も多く、天井、床及び畳の順に少なくなつてゐる。

而して壁體による防寒は、それに用ひられる材料及び構築方法如何等によつて差があるため、一般家庭に於いては行ひ難い。然し壁以外の箇所による防寒は行ひ得るのである。即ち窓硝子及び窓には特に冷える夜にカーテンを張るとか、隙間風を防ぐには目張り(室内温度の項参照)を行ふことにより略その目的が達せられるのである。

(口) 煖 房

煖房には種々の方法があり、これを大別すれば中央煖房法と局所煖房法とがある。

中央煖房法 スチーム、温水、ホットエア等でこれらは家屋内の空気を平等に温め、而も塵埃が少なくなき衛生上極めて良いが、設備費並びに燃料代を多く要するので、學校、會社、銀行、アパート等に用ひられる。而して一般住宅には温水煖房が比較的經濟であるため、近時かなり多く用ひられる様になつたが未だ都會地の中級以上の住宅で見られる程度に過ぎない。

局所煖房法 火鉢、炬燵、炕、ペーチカ、ストーブ等があるが、火鉢や炬燵は滿洲の酷寒には殆んど用をなさない。炕は炊事と採煖兼用の長所を持ち、床下の溝(煙道)に煙を導いて室を煖めるもので燃料は何でも差支へなく極めて經濟的である。滿洲人の住宅は概ねこれによつて煖房してゐる。ストーブは滿洲では石炭

のものが多し。而して滿洲に最も一般的に用ひられてゐるのはペーチカ及び炕である。

一、ペーチカ ペーチカと云ふのは煉瓦造りの大型煖爐とも云ふべきもので、爐中の内部煙道に火焰を通してその構築材たる煉瓦自體を煖めて室内全體を煖めるものである。ペーチカはロシアの東漸時代に滿洲に輸入された煖房装置で、その形は種々あるが滿洲に普通見られるのは圓筒形のもので壁ペーチカである。

圓筒形のペーチカは主として新京以南の都會地に多く見られ、室内に恰も日本の大黒柱の如く突立つてゐる直徑一米位の大きさのもので周囲には薄鐵板が張り廻らしてある。

壁ペーチカは新京以北の寒地に多く見られ、室内の一方の壁全體に採煖装置が仕掛けてあつて、内部の装置は地方によつて多少の相異がある。

ペーチカの焚き方 ペーチカは總べて内部に設けられた煉瓦に熱度を吸収せしめてこれを室内に放射せしめ更にこれを室内に放射せしめて採煖するのであるから、ペーチカで燃焼された熱量は及ぶ限りペーチカを構成する煉瓦に含ませなければならぬ。

ペーチカを焚くには、始め薪に石炭少量を加へて火種を造り、その後所要の石炭を短時間の中にくべるのである。少量づゝ一日に何回となく焚くのは不經濟で普通朝夕二回、氣候の未だ暖い時には一日一回で充分でその一回量は凡そ馬穴に一杯乃至二杯位である。石炭を入れる時は兩側に高く積んで眞中を薄くして、空氣の流通をよくし、片方の石炭が燃えてゐるとき、片方は新しい石炭が赤い火の上にかぶさつてゐる程度

にして、これを交互に行ふと、右、左の熱度が高くなつたり低くなつたりして瓦斯分の渦巻を生じ、眞中から空氣が引かれるので完全燃焼する。然し石炭を投入するために屢々投入口を開けば竈内は急に猛烈なるドラフト(突風)を生じ、熱氣が煙突より逃げ内部が冷えると同時に又燃えるべき瓦斯體も燃焼せずして終りペーチカの温度は伸々上らないのである。この點屢々投炭しても差支へはないストーブの焚き方とは大いに異にしてゐる。

一定量の投炭後は、灰出口より入る空氣で盛に燃え、竈内の温度も上つてゐるのであるが、石炭全部が眞赤になつたときには竈の温度は數百度に上つてゐる。こゝで灰出口並びに遮斷板を密閉する。これ等の開閉口を餘り早く閉めれば、ガスが洩れてその中毒を起す場合があるため、特に遮斷板を閉める時期は考慮すべきで、その時期は凡そ焚き始めてより一時間位經過した後である。然し最も安全な遮斷板の閉ぢ方は、最初の時一寸位残してこれを閉め、更に一時間後即ち焚き始めて約二時間近く經過した後に閉めることで、かかる場合室温が餘り上らないものゝ如く考へらるが、室温も一回に閉ぢた場合と殆んど大差がないのである。

尙ペーチカはストーブの如く焚いても直ぐ室温が上がるものではない。従つて直ぐ室温を上げるべく石炭をどしどし焚けば、ペーチカが熱くなり過ぎて火事を起すことがある。又煙が灰出口及び焚口より出る場合は主に煙突が塞まつてゐるため掃除を行へばよい。

二、炕 これは部屋の床を土坯子(土煉瓦)又は煉瓦を以つて作り、床下に煙道を設け、これに煙を通して床を

暖める型式で、滿洲式と朝鮮式の二種類がある。前者は炕、後者は鮮語でオンドルと稱される。

炕は室内の空氣温度を暖める目的のものでなく、床下を通る煙によつて床面を觸つて多少暖く感ずる程度に採暖するものである。従つて日本にある炬燵に類するものと云つてよく、徐々に暖くなつて人體に快感を與へる。かゝるため寒いからとて火をどしどし焚きつけても室内そのものけ暖かにならず、徒らに床上に敷いた敷物を焦がすのみである。

炕の焚き方 炕の燃料は滿洲に於いては一般に栽培せらるゝ高粱、玉蜀黍の莖程及び木片が用ひられる。石炭は油煙が多いため炕の煙道を寒くするので好ましくない。焚き方はこれ等の燃料が長い間焚口に火となつて残り、それによつて可及的に長く床を暖める如くすればよい。これを換言すれば炕はなるべくよく焚き、然る後僅かな穴を残して焚口に蓋をしておきの燃焼を長く保たしむるのである。この際焚口を密閉すれば火は消える憂ひがあるので、その閉ぢ方には注意を要する。

炕は夏の手入が必要である。炕の内部が主に土で作つてあるため、夏季は濕氣を帯び易く、濕氣を帯びれば破損し易い。又濕氣で冷えた床面にゐるのは、地面に起居するに等しく健康に好い筈はない。故に夏季に於いても一週間に一度は火を入れることを忘れてはならない。床下の濕氣を除くことは炕の耐久のため又保健のためである。

尙、床面より煙の上る時は、直ちに土を塗りつけなければならぬ。それは煙中に有害瓦斯を含み、窒息

する心配があるからである。

(二) 室 内 温 度

従来一般在滿邦人の冬季に於ける室内温度は一般に高く、二、三年前までは會社、役所に於いてはワイシャツ一枚で仕事をしてゐる所が少くなかつた。又一般家庭に於いてはセルの單衣或ひは浴衣で暮し得る程高温であつた。これも石炭の入手が自由であつたからであるが、かゝる室内高温により一層外出を厭ふやうになり寒さに對する抵抗力を失ひ、一寸した外出にも直ちに風邪を引き、又風邪を引き易いため外出を厭ふこととなり、益々以つて體の抵抗力を弱めたのである。而も日本人は小窓を開いて換氣することもなく、その上家屋の隙間には目張りを行ひ空氣の流通は極力防止してゐたため、室内空氣は甚だ汚濁せるものと化してゐた。斯く高温汚濁せる室内では必然的に各種微菌の好繁殖場となり、頗る非衛生的な室内となつて居り、斯くの如き非衛生的なる室内に於いて冬季約半年間に亘る滿洲生活が如何に健康を阻害するものかは全く贅言を要しないところである。

かゝるため協和會は滿洲國政府と一體となり、國民保健と石炭消費節約の見地より、適温生活即ち晝間攝氏一四度乃至一八度、就寝時二三、四度の保健上最も理想的なる温度(日本内地の春秋の候の温度)及び採暖期間の設定、石炭の切符制度(後述)等の實際運動に乗り出し漸次従來の弊は改められつゝある。

而して協和會の設定せる採暖期間は康徳六年より次の如く行はれてゐる。

安東地區 自一月五日至三月二〇日(二三六間)

奉天地區 自一月一日至三月二五日(二四五日間)

新京地區 自一〇月二六日至三月三一日(一五七日間)

哈爾濱地區 自一〇月一六日至四月一〇日(二七七日)

海拉爾地區 自一〇月五日至四月三〇日(二〇八日)

現在石炭は配給制度のため、室内温度は従前より低く適温となつてゐるが、それ丈に暖房に馴れぬ場合、屋内の温度が下り、臺所及び便所水道を凍結させる事がある。水道が凍結すれば、無駄な水を流すばかりでなく修繕費も多額にかゝり、その上漏水のため壁が落ちたり、品物を濡らしたり、種々の被害が起り易いので注意を要する。水道の一番凍結し易いのは床下の鉛管で、その他北向きの便所、臺所の水栓、或ひは外壁中の埋込水道管等で、地下室の量水器の破裂する場合もある。各家庭に於いては充分凍結防止の方法を講ずる必要がある、その方法はこれ等の露出部分を繩、布、又はウール等で充分被覆すればよいのである。尙適温を保ち又水道等の凍結防止上、寒暖計の一、二個を室内に備付けることは便利であり又必要である。

(三) 滿洲住宅の管理法並びに健全生活

滿洲の住宅は滿洲の冬季に於ける氣象を頗る考慮に入れて建築されたものである。従つて滿洲の氣象を度外視して滿洲の住宅に入れば、甚だ芳しからぬ結果を健康的に又日常生活に齎すもので、その對策を完全にすれば、他方その逆効果を招來することが少くない。又その對策法を知らなかつたがために不慮の災難に會ふことがあるので、次にこの對策法に就いて記すこととする。

(滿洲生活と疊或ひは目張り等の項の如きは人により多少その中に議論の餘地があるかと考へられる。故にそれ等は一意見として取扱つて置きたい)

(イ) 目 張 り

目張りは冬季寒冷なる隙間風を防ぐために行はれるものである。然しそれ丈にたゞさへ換氣がなるべく行はれないやうに建てられてある滿洲の建物は益々換氣が行はれないこととなる。換氣の不充分が保健に有害作用を及ぼすことは今更云ふまでもないことで出來得れば目張りは行はない方がよいのである。然し現在に於いては日滿兩國にとり採煖に用ひる石炭は出來得る限り節約すべき状態にあり、而もかゝる結果よりその配給は通帳制が採用せられてゐるため、從來の如く石炭の自由に使用出來た時とは異なり目張りを行ふのも亦止むを得ない實情にある。

即ち現在制限されてゐる石炭によつて採煖せる場合(後述)、目張りの有無によつて生ずる室温の差は、目張り無き時八度位、外側の窓に目張りせし時十二、三度、内側の窓にも目張りせし時十七、八度となつたと

云ふ報告がある。

たゞ保健上の問題より一日に幾回か小窓を開けること、努めて外出して新鮮な空氣を吸ひ又紫外線に浴びるやうにすれば目張りも大した害はないと思はれ、且つ掃除の時はなるべく埃を立てないやうに注意して行はなければならぬ。

目張りをする時期は霜が下りる頃になるべく早く行ふがよく、寒くなり硝子が凍る季節になつては糊が凍りその目的を果すことが出來ない。又目張りに用ひる糊は普通の糊では剝がれ易いので公主嶺陸軍病院長小川正男氏の研究發表による次の糊を用ふるがよい。

- 小 麥 粉 一〇瓦
- 粉 末 石 鹼 五瓦
- 水 八五瓦

作り方は、先づ少量の水で粉末石鹼を完全に溶かして置き、次に残りの水で小麦粉をよくとき、箸のやうなものでかきまはし乍ら普通の糊を煮る時と同じやうに弱火で煮るのであるが、その前に作つておいた石鹼液を加へてよく混ぜ合せて煮上げるのである。斯くして作つた糊で目張りすれば絶對剝げる心配はない。

尙、目張りを除く時期は春暖くなれば成る可く早く除くに越したことはない。然し滿洲に於いては春四、五月頃蒙古風が激しく砂塵を吹き上げ、これがため目張りを春早く取り除けば窓の隙間より砂塵が室内に入り

込み、日に幾回となく掃除しなければならぬことになる。従つて目張りの除去は激しい蒙古風の弱くなつた頃、即ち五月初旬頃に行ふとよい。目張りを春遅くまでして置くことは甚だ不健康的なる生活と一應考へられるが、蒙古風の吹く頃は既に滿洲も暖く外出は容易であり、又蒙古風は毎日吹くものでもなければ、終日吹き続けることも極めて稀で、たとへ蒙古風の吹く日でも一時風の止んだ時に小窓を開けて換氣を行へば永く目張りすることも強ち不健康なこととは考へられないのである。

(口) 滿洲生活と疊

疊は日本人の生活にとつて不可分のものとなつてゐるが、滿洲は勿論日本内地に於いても近來生活様式の改善、能率増進の見地よりその不合理性を唱へてゐる建築家が少くない。然し永い傳統を持つ様式が一朝にして總べての人に捨て去られ、又疊が無くなるとは考へられない。この日本人の住居様式特に疊、床の間等が冬季の長い而も換氣口の小さい滿洲向家屋に應用された場合、疊、床の間は徒らに塵埃の溜り場となる。今その掃除に就いて考へれば、日本の開放された家と異なり、その掃除を徹底的に行ふことは極めて困難なことである。而も日本式のはたきとかけることは徒らに塵埃を一时的に飛散せしめるのみで疊、床の間等は塵埃及び微菌の溜り場となり起居の動作と共にそれ等は室内に飛散し、在室者は塵埃と微菌を無意識の中に呼吸することになる。これを防ぐために室内掃除の場合茶殻或ひは濡めせる紙を撒いて行ふとか、はたきを^{タキ}用ふべき箇所に、滿洲人の行つてゐる揮子^{タキ}(羽で作つたはたき様のもの)で塵埃をとれば相當清潔に掃除す

ることが出来るが、これとても完全な方法ではない。雑布で布き取るとは塵埃を立たしめず最善の方法であるが、日本の住居様式ではこれを凡ゆる箇所に毎日行ふことの不可能に近いことは云ふまでもない。

又坐る生活と腰掛ける生活を比較するとき、保健上後者が優れてゐることは多くの學者が證明してゐるところである。加ふるに疊は滿洲に原料がなく、經濟上の不合理で、かゝる點より考へれば疊を廢し、滿洲人或ひはロシア人の如く板張りに廉價な敷物とか衛生的な他の床材料を用ひ、又床の間、寢具の押入等の相當な空間は造り付けの家具と取り替へ、室内の各配置を合理的に行ひ、これに採光、換氣、保温の實驗的研究結果を應用することが必要で、これを行つてこそ滿洲に於ける保健住居が實現し得るものと考へられるのである。

住居に於ける休養、慰安に、日本人は日本人自體の習慣より、疊式でなければならぬと考ふる人も中にはあることと思はれるが、滿洲には疊の原料たる藁は産せず不經濟であり、又滿洲の室内の掃除は疊であればそれが埃を吸つて完全には行ひ難いものなるため、斯くの如く考ふる人は數部屋の中疊を敷く箇所を一部屋位に止むるやうにされたいものである。

(ハ) 窓の防露法

滿洲の窓は殆んど二重窓となつてゐる。而して冬季は外部の温度と室内の温度差が甚しいため外側窓硝子内面に眞白に結氷し、屋外を見ることが出来ない状態となる。結氷する硝子面はその時の状態で一定でなく、

内側窓外面に結水することもあり、外気温著しく低下し室内湿気の多量なる場合には室内硝子面にも結水するに到る。

この結水を防ぐため二重窓間の湿度を少くする方法を講ずればよいのであるが、完全に窓の結水を防ぎ得る方法はない。然し次の方法は一般に行ひ易く、又相當の効果が期待し得られる。

即ち吸水劑を二重窓間に置く方法で、吸水劑として砂、鋸屑等を窓の底部に置き、吸水と室内側膳板への流水を防ぐか、又は綿を敷きつめ、木炭、濃硫酸を小瓶に入れて湿気を吸収させるのである。

(四) 滿洲の住宅並びに家賃の統制

支那事變勃發以來滿洲國に於いても經濟統制が行はれ、而もそれが戰時經濟の國防的諸要請に基く一貫方針に従つて強行せらるゝこととなり、生産より消費に亘る各部門に對し國策の發動を見るに至つた。即ち滿洲國政府は資源開發、生産擴充、物資確保、需給調整等に關し強力なる統制を加へて、民力の涵養、民心の安定を圖る大方針の下に積極的にこれが計畫實現に邁進してゐるのである。

而して産業開發五箇年計畫、國防地區建設（康徳六年五月北邊地方の積極的開發による國防の完備化と文化の確立を目的とする計畫）及び開拓政策に伴ひ人的資源の大量吸收が行はれ、これがため人口の急激なる移動と關係地方の都會化等の現象を生じ、遂に住宅難は年と共に深刻化し、家賃も亦昂騰しこの緩和對策として滿洲房產

株式會社が康徳五年二月に設立され、康徳七年一月一日には家賃統制法が發布されたのである。

(イ) 滿洲房產會社

滿洲房產會社は右の如き實情のため全滿に於ける住宅その他の家屋の建設を促進する目的を以つて康徳五年勅令によつて設立された特殊會社で、爾來時局の影響に因る建築資材の暴騰、勞働力の不足等各種の障害を受けつゝもよくこれを克服し直接的に間接的に一般住宅の建設促進に貢献して來たのである。従つて滿洲の住宅難は近き將來に於いて解消するものと云はれてゐる。尙その營業内容を示せば次の如くである。

- 一、家屋の建築又は購入資金及び宅地の購入又は借受資金の貸付
- 二、賃貸又は賣却を目的とする家屋の建築
- 三、宅地建物の賣買賃貸借及びその仲立
- 四、宅地建物の受託管理
- 五、前各號の業務に附帶する一切の業務
- 六、火災保險業の代理
- 七、その他特に政府の命を受けたる業務

(ロ) 家賃統制法

先述の如く房產會社の積極的造築に拘らず東亞の諸情勢は建築資材、工事勞力等に影響し軍需的その他の制約を受けるに至りその確保並びに獲得は可成り困難となり、加ふるに建築費も諸物價の騰勢と歩調を同じ

くして昂騰した。茲に於いて新築家屋の家賃は勢ひ高くならざるを得ないが、貸家業者はこの状態に乗じて家賃を不当に釣り上げんとする傾向が漸次顯著となつて來たのである。

而して家賃は滿洲國都會生活者の生活費中約三割を占むるもので、斯くの如き家賃の騰貴は必然的に國民生活の安定を脅かすと共に諸物價の騰勢に拍車を掛ける原因となり得る惧れがあるため、滿洲國政府は康徳七年一月一日より新京、哈爾濱、奉天の三大都市をはじめ全滿二十二都市に家賃統制法を實施するに至つたのである。

この統制法による家賃所謂公定家賃と云ふのは各市に於いて借家夫々一戸毎に家賃を決定公示せられたもので、これと同時に從來慣行されて來た敷金の額、前取り家賃の額、修繕費其の他經費負擔方法等の賃貸條件に就いても或る程度の制限が加へられ、賃貸借人はその制限の範圍内に於てのみ合法的に賃貸借が可能となつた。従つて公定家賃が決定された家屋はその公定家賃を超えたり、又制限された賃貸借の範圍を超えては賃貸借は出來ない。若しこれに違反せる場合は處罰されるのである。従つて先の房產會社設立と云ひ又この家賃の統制により滿洲の住宅難は漸次緩和の氣運に向ひつゝあるのである。

次に賃貸借條件に就いて述べてみよう。賃貸借條件の制限は家賃の公定と共に市長が適宜定めることになつてゐるので、各都市によつて多少その條件の制限状況は異なるが概ね次の如き方法によつて制限される。

一、敷金は左の範圍を超えてならぬ。

1. 家賃前納の契約の場合は家賃の二箇月分に相當する金額

2. 家賃後納の契約の場合は家賃の三箇月分に相當する金額

二、公定家賃は左の賃貸條件を基礎として授與される額であるから、これと異なつた條件を以つて賃貸する場合は市長の許可を要する。

1. 公課、修繕費その他家屋の維持に必要なる經費は賃貸人の負擔

2. 光熱費、水道料等の經常的支出に關する經費は賃借人の負擔

三、賃貸人は如何なる名義を以つても家屋の賃貸借に就いて賃借人又は第三者より公定家賃及びその附帯條件の範圍を超えて利益を取得することが出來ないことになつてゐる。従つてこれにより權利金又は謝禮の如き名義を以つて公定家賃及びその附帯條件以外の利益を家主が取得することは禁止されてゐる。

(國都新京一三四頁より一三八頁抜萃)

以上述べた如く滿洲國の住宅は、現在可成り不足してゐるが、要するに滿洲房產會社による住宅の大量建築並びに民間建築業者に對する資金の融通による建築の助成、更に家賃の公定等によつて時局が少しでも緩和すれば住宅難も急速に解決されるであらうことは容易に想像される。

八、滿洲生活と物價

戰時經濟の強行に伴つて日滿を通じ物價對策が重要課題として取り上げられて來た事は極めて當然の成行である。即ち戰時經濟下に物價を自然の傾向に放任するとすれば、それは必然的に物價騰貴を惹起し、それが低度に止まる間は單に戰時體制を弱體化せしめるにすぎぬが、更に高度に進展する場合は所謂惡性インフレーションに導く虞があり、惡性インフレーションの現象形態こそ國內物價の恐るべき暴騰に外ならぬからである。従つて戰時體制下に於いては統制經濟は益々強化を要し、戰時統制經濟の重要問題の一つとして物價抑制政策が必然的に前面に押し出された譯であつて、一度物價對策に於いて策を誤つた場合戰時統制經濟の運営に破綻を來す事は絶対に避け難いものと云はねばならない。蓋し物價問題の重要性はそれがあらゆる經濟現象の綜合的表徴たる點にあるのである。従つて滿洲に於いても各種の物品に對し統制が行はれて居るのであつて滿洲で生活する場合にも日本と同じ、贅澤は禁止すべきものであり（德康八年一月一日實施さる）又物を節約利用する心持で生活すべきことは蓋し當然のことである。

(一) 滿洲物價騰貴の原因とその統制

滿洲に於ける物價は支那事變發生以來、その間多少微落したこともあつたが、日々昂騰の狀況にあつた。而して中央銀行調査課に於いて調査された結果によれば、支那事變發生以來、過去三箇年餘に亘る滿洲戰時物價の様相は次の如くである。

- 一、物價安定期（康德四年六月—十二月）
- 二、物價昂騰期（康德五年一月—七月）
- 三、物價漸落期（康德五年八月—十二月）
- 四、物價再騰期（康德六年一月—七月）
- 五、物價激動期（康德六年八月—十二月）
- 六、物價奔騰期（康德七年一月—九月）

斯くの如き状態となつたその根本的原因に就いて考へてみるに、それは目下進行中の産業五箇年計畫並びに支那事變の影響によるものと考へられる。然らば産業五箇年計畫並びに支那事變の影響が何故滿洲國の物價昂騰の原因となつたかこれに就いて次に述べてみよう。

先づ最初に産業五箇年計畫であるが、この産業五箇年計畫と云ふのは世界屈指の富源たる滿洲國の石炭、鐵、木材、大豆、豚毛、その他の資源を五箇年の短期間に於いて劃期的に其の生産力を増大して大産業國を建設せんとするものである。これを達成せんが爲には多量の開發用機械又は資材を必要とするが、滿洲國は

斯かる機械及び資材の多くを第三國よりの輸入に俟たねばならぬ状態にあり、而も現下の貿易状況に於いては輸出の異常なる促進を見ない限り、これが充分なる輸入を期待することが出来ない。従つて開發用機械或ひは資材を輸入するためには假令一般の消費に充當せられてゐる輸入品を差止めてもその餘力を凡ゆる産業開發計畫の遂行に必要な資材の購入に當てねばならない。又資金關係に於いても消費物資を生産する資金をこの開發計畫の遂行上必要な方面に動員する等の措置が必要となつて来る。この結果より一般に消費せらるゝ物資の供給が従前に比して窮屈即ち物價が昂騰となつたもので現今物價の高いのは眞に已むを得ないのである。

次に日支事變の影響であるが、これは日本帝國が東洋永遠の平和を目指して東亞新秩序建設のため、支那各地に聖戰を展開し、その戦線にある將士をして充分にその任務を果さしむるためには、後方より不足なき様物資の補給を必要とし、従來一般消費に當てられた物資も、その消費材の生産に向けられてゐた資金及び生産力の一部も夫々軍需方面に轉換されることとなり、日本に於ける一般消費材の生産量は必然的に低下せざるを得なくなつた。従つて生活必需品の供給について日本と依存關係にある滿洲國はその影響を直接受け茲に諸物價が昂騰するに至つたのである。

而して日本の聖戰の目的達成のため多少の不便はこれを耐へ忍ぶとしても、従前の如く商人に價格の自由を認めては生産資材の價格騰貴は事變又は開發計畫に必要な物資の調達を困難ならしめ、又生活必需品の急

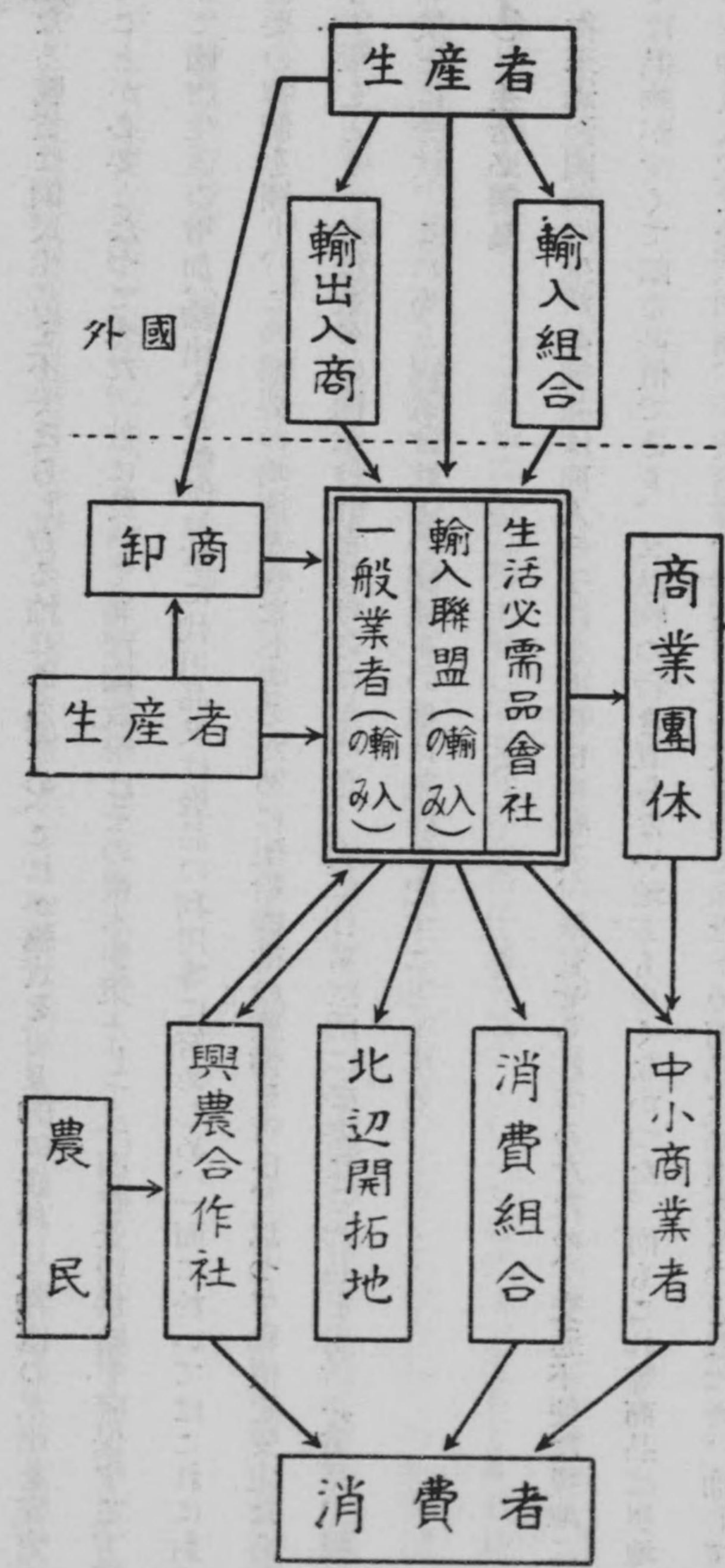
激なる騰貴は國民生活を不安ならしむる怖れあるため、これが騰貴を可及的に緩和し、物價の水準を安定にすることが必要となつて來た。茲に於いて滿洲國政府はその根本對策として一面物資の供給を確保する方策として國內生産の増加、輸出入の統制並びに代用品又は廢品の利用等に努めしめ、一面に於いてはこれに對する需要の抑制を圖り、この需要の均衡を保たしむるために配給機構の整備を行ひ、以つて物價を安定ならしむる方策をとり、茲に數多の國策會社を設けるに至つた。次に日常生活に必要な物品を生活必需品、糧穀、石炭とに分け、これ等と國策會社との關係その他に就いて記すこととする。

(イ) 生活必需品

従來滿洲國內の生活必需品は商人の手により自由に輸入、販賣せられてゐたため、交通不便な奥地に於いては品物が少くて頗る高價であり、又品物の行き互らない地方も少くなかつた。而もこれ等商品は奥地に至る程仲買人、輸入商、卸商、小賣商等、縦横に數階段を経て來たため商品は高價なものとなつた。而して支那事變、産業開發五箇年計畫等の影響によつて生活必需品の輸入が減じたことは既述せる如くであるが、かゝる結果量の少い必需品は勿論、合理的な配給さへ行はれれば不足しないものまで、商人の買留、賣惜しみ等の悪弊を生ずるに至つた。而して生活必需品の昂騰が悪性インフレーションを招き又人心攪亂の結果種々の弊害を生ずることは云ふ迄もないことである。従つて國民の一日も缺くべからざる生活必需品を従來の一般商人の自由經濟機構の下に放任して置くことは出来ない。就中滿洲國の如く第一線にある國防國家は生活必

需品を國家の充分なる指導と管理の下に於いて圓滑に國民の手に配給しなければ、大事に及んで不慮の破綻を來すのである。斯くの如き事由によつて滿洲生活需品株式會社が設置された。然しそれは一般商人と對立して獨善に仕事をせんとして設置されたものではない。

この會社の取扱ひ商品は商品として重要性の強い砂糖、鹽鮭、鹽鱒、協和服、同服地、昆布、茶、澱粉、ゴム靴、地下足袋、運動競技用具、蜜柑等で、これ等は輸入より配給に至るまで、全くこの會社によつて行



はれてゐる。又石鹼、罐詰、海産物、乳製品、洋品雜貨、琺瑯鐵器等の品物に就いては、生活必需品會社を中心輸入業者が組織せる輸入聯盟で一手に輸入統制を行つてゐるのである。

又國內に於ける生活必需品の自給自足に或ひは又全滿に配給が圓滑に行はるゝ如く努力せられてゐるのである。されば今日の滿洲に於いては如何なる邊疆の地と雖も國內に於いて生産される生活必需品は勿論のこと日本より輸入されてゐるものも容易に又安價に入手し得らるゝ状態になつた。

(口) 糧 穀

滿洲國に於ける米穀の取引過程は從來精米業者を中心として集散が行はれてゐたのであり、又米穀の生産地帯が偏在して居る結果、建國後急激なる人口の増加に伴ひ、先に述べた一般生活必需品と同じく或ひは地域的に、或ひは季節的に不當な價格による買付又は販賣が行はれ、更に無用なる需給の不圓滑を生じ勝であつた。而も精米業者を中心とする配給業者は自由に放任されてゐたため、その亂立による競争の結果友食ひの状況を呈さんとしてゐたのであつて、配給價格の如きもこの實情に左右され頗る不安定の状態にあつたのである。この不合理を除かんがために滿洲糧穀株式會社が設立された。

滿洲糧穀株式會社は農民の販賣用生産米を農民の收支を考慮せる適正な價格を以つて購入し、その購入せる米穀は精米し或ひは籾のまゝ會社の經費を最少限度に見積つた適正な價格を以つて米穀販賣者に賣却してゐる。又その間にあつて地方間の需給調節を行ひ、從來の如き弊害を除くと共に中間經費の低減を圖つてゐる。

るのである。又全滿各地に於ける従来の米穀商中、卸賣業者は會社の代理商とし、精米業者及び小賣業者は申請によつて米穀販賣業者として許可し、而もこれ等米穀販賣業者は夫々の地方に組合を結成せしめ、各自の米穀販賣數量、小賣價格を自治的に決定せしめ、當該市縣旗長の認可を受けしむることとして、従前の如き商賣上の自由競争の弊を脱却し、その營業を堅實ならしめるやうに考慮されてゐるのである。又更に會社の買入、販賣價格は政府の認可を受けることになつてゐるので、間接的に消費者に對する小賣價格の公正が期せられてゐるのである。

(註) 滿洲糧穀株式會社は米穀のみならず、玉蜀黍、高粱、粟等も取扱ふ。

(ハ) 石 炭

石炭はその消費量が一國の國力を象徴するとまで云はれる程近代文明の原動力で、一國の存亡を決定する生産力の根源をなし、殊に日滿支東亞經濟ブロック建設の重大なる鍵を持つてゐることは今更多言を要しないところであらう。

滿洲國に於ける石炭の需給關係は康德五年頃までは大體需給相償はれてゐたのであるが、爾後支那事變の影響並びに産業五箇年計畫の進行と共に伴つて、前者は勞力、資材の供給を不圓滑ならしめるに對し、後者は急激なる石炭の消費量を増大するに至り、滿洲國内は勿論日本内地へも大恐慌を與へ、工業用並びに家庭採煖用炭の配給不圓滑を來し、各方面に多大の障害を招くに至つた。

石炭は滿洲生活上採煖用炭として冬季煖房上必要缺くべからざるもので、その配給の良否如何は國民生活上ゆゑしき問題として等閑に附することを得なくなり、康德六年秋より採煖用炭に限り優先的に配給されることになり、又康德七年秋には全滿的に通帳によつてその配給が行はれるに至つた。その配給にあつては必ず日滿商事株式會社の手を一度通じて行はれるのであつて、こゝより指定販賣人又は小賣業者の手を経て一般家庭に圓滑に配給されるのである。

(二) 統 制 品 の 購 入 法

生活必需統制品はその種目が頗る廣範圍に亘つてゐるが、それは價格に於ける統制で、購入する場合量的に制限されてゐるものは日本内地に比し甚だしく、全滿に行はれてゐるのは現在石炭のみで、米穀、砂糖の如きものは未だ一部の地方に行はれてゐるに過ぎない。これ等統制品の購入には大體次の如き手続き並びに注意を要する。(但し新京を主とす)

(イ) 申 告 の 方 法

市地區内に新たに居住せるもの又は他の町(屯)會地區に轉居せるものは新舊住所、世帯主名、職業、家族數、異動事實發生年月日、米、小麥その他の統制品の一箇月所要量等を記し當該組長を通じて區長宛に申告するのである(日本軍關係の軍人、軍屬の家族は此の限りに非ず)。然し統制品の中石炭に就いて申告する場

合はその性質上建物の種類及び所在地、居住又は管理者の氏名並びに職業、家族數、建物の大きさ、煖房器具名並びにその數量、月別石炭使用量、異動事實發生年月日等を具へて當該組長を通じて區長宛に申告するのである。

以上の手續を完了すれば、區長と行政官廳と合議の上、各家庭の實情を考慮に入れた公正なる統制品の量が決定され、然る後直ちに購買通帳又は購買カードが支給される。

尙、組員は前各項の申告事項に異動を生じた場合には、事實が発生せる直後にその異動事項に就いて當該組長を通じて區長宛に申告するのであるが、若し虚偽の申告又は異動申告を行はずして標準配給量以上の配給を受けた時には一定期間その配給を停止されることがある。

(口) 購買通帳又は購買カード

發給を受けた購買通帳又はカードは絶対他人に譲渡又は轉貸は出来ない規則になつて居り、若しこれに違背せる行爲をした場合は、その行爲を行つた兩者に對し一定期間その配給を停止されることがある。統制品を購買する時は原則としてこの購買通帳又は購買カードを小賣又は販賣業者に提示して所定の手續を得なければならぬ。

尙、購買通帳又は購買カードを焼失、紛失、汚損等をした場合には、區長宛にその旨を申告すれば再發給を受けることが出来、又他に轉居する場合は購買通帳又は購買カードを必ず組長を通じて區長宛に返還しな

ければならないことになつてゐる。

(三) 生 活 費

滿洲に於ける生活上の諸物品はその七、八割迄が日本品に依存してゐると云はれてゐる。かゝるため價格數量共に直接日本内地の影響を蒙つてゐるが、然し滿洲國政府は前項に於いて述べた如く、國民生活安定のため各特殊會社と協力して、その配給及び價格の統制に當つてゐるので、生活必需品に就いては生活上豪も不安を感じることはない。價格は輸送経路、破損等の關係により奥地へ行く程高價となるが、収入も亦それに比例して多くなるので収入に對する生活支出の割合は各地とも大體同一の比例になると思はれる。

次に最近に於ける滿洲大都市と東京との生計指數を比較對照してみれば、

新京、奉天、哈爾濱の生計指數

品 目	新 京	奉 天	哈 爾 濱
飲 食 費	一九二・一〇	一九二・一〇	一七七・〇二
住 居 費	一三九・一三	一三九・八五	一二八・九九
被 服 費	一三六・五一	一六八・二九	一一六・四二
光 熱 費	二二七・三七	二二七・七二	二〇六・九一
雜 品 費	一四九・七五	一六〇・〇九	一六一・七一
總 指 數	一六四・七〇	一八〇・八二	一六四・一一

この指數表をみれば日本内地と大差はないが、こゝで注意を要すべきは燃料費特に煖房用としての經費で東京に於ける石炭の價格は新京の約二倍となつてゐるが、東京では普通の家庭で使用する石炭の消費量は頗る少く、これに反し滿洲は石炭が煖房用として生活必需品で、結局東京より燃料費が嵩むことになる。而して一般生活費が内地よりどの位多くを要するか、これは内地と生活條件を異にしてゐるため、明確なことは表示し得ないが、次に掲げる主要生活品目の公定價格並びに住宅料を内地のそれと比較することによつて大體推定し得らるものと考へられる。

米穀類の價格は産地種別によつて一定してゐないが、左に一般の標準となつてゐる滿洲産の無砂米の價格を示す。然しこれは公定標準價格で、實際購入の場合はこの價格に各地販賣組合の手數料として一圓内外が加算される。

文 化 費	同	一〇五・九	一一一・一
交 通 費	同	一四〇・〇	二〇〇・〇
衛 生 費	同	九九・〇	九五・三
修 養 費	同	九二・五	一〇〇・〇
娛 樂 費	同	七六・六	一一三・二
總 平 均	同	一〇〇・九	一一八・八

大連、東京、新京、生活費比較表

品 目	大 連	東 京	新 京
飲 食 費	一〇〇・〇	一〇六・六	一二四・四
白 米 費	同	一一六・六	一〇九・一
麥 類 費	同	一〇〇・四	一二六・三
野 菜 類 費	同	八一・七	一四六・七
野 果 類 費	同	八一・七	一四六・七
味 噌、醬 油、砂 糖、鹽	同	一四九・一	一五七・八
乾 物 類 費	同	一〇一・四	一三五・八
漬 物 類 費	同	一〇六・〇	一五二・一
飲 料 類 費	同	一二四・〇	一四六・三
煙 草 類 費	同	一五〇・〇	八三・三
鮮 魚、肉 類 費	同	一二〇・八	一一七・八
居 住 費	同	五七・九	一一一・一
家 賃 費	同	五〇・〇	一三三・三
水 道 費	同	五四・四	一〇〇・〇
其 他 費	同	六九・五	一一二・〇
被 服 類 費	同	七七・五	一一二・七
衣 料 類 費	同	八一・八	一一四・四
身 體 類 費	同	七〇・九	一一〇・八
光 熱 費	同	一五六・八	九四・八
燃 料、石 炭 費	同	一八七・四	九九・二
電 氣、瓦 斯 費	同	九五・九	九二・一

産地	單位	無砂上米	無砂中米
南部地方 奉天省、安東省、通化省、錦州省、熱河省の全部及び興安南、西南省の一部	一〇〇斤 六〇 四五	三六・九八 二二・一九 一六・六四	三五・九二 二一・五五 一六・一六
中部地方	一〇〇 六〇 四五	三六・二八 二二・七七 一六・三二	三五・二二 二一・一三 一五・八五
北部地方			
南部地方を除く區域			

(康徳七年四月六日實施)

衣服に就いては今尙公定價格の實施に至つて居らず、従つてその日本内地價格との比較は示し得ないが、凡そ日本内地の五割乃至一〇割高と見ればよいと思れる。

住宅料は現在全滿各地の住宅拂底のため騰貴の狀勢にあり、取締當局はこれを阻止すると共に適正な料金を定めんとしてゐることは既述の如くである。現在各地に於ける大要次の如くなるも、調査先が一定してゐないため、全滿に亘つての比例を正確に算出することは出来ないが大體の標準になることと思はれる。

大連 (大連商工會議所調)

貸家料金 疊一疊富 二圓乃至三圓
 貸間料金 同 三圓程度 (冬季煖房料三圓乃至五圓増)

奉天 (房産會社住宅)

甲 八疊、六疊、四疊半、瓦斯、水道、風呂付、五八圓
 乙 六疊、四疊半、瓦斯、水道、風呂付、三五圓
 丙 六疊、四疊半、井戸共同風呂、二四圓
 貸間 四疊半二食付、四〇圓以上 (冬季煖房料金五圓程度増)

新京 (新京特別市公署調)

貸家 (一疊富) 上 九圓、中 五圓四〇錢、下 三圓四〇錢
 貸間 四疊半二食付、四五圓乃至五〇圓 (煖房料金一疊富一圓二、三〇錢)
 哈爾濱 (市營住宅、哈爾濱市公署調)

家族住宅 A 洋式三間、洋式風呂、水洗面所、スチム煖房、甲 六〇圓、乙 五五圓、丙 五〇圓
 家族住宅 B 洋式二間、設備 A と略同し。甲 三八圓、乙 三六圓、丙 三四圓、丁 三二圓
 獨身住宅 洗面所、寢室、机付、スチム煖房、浴室、便所、食堂は共同設備 A (約十疊) 二五圓、B (約十疊、三階) 二三圓、C (約八疊) 二〇圓、D (約七疊) 一八圓、但し右市營住宅料金は市内のもので遠隔地のものはいずれも稍低廉である

アパート貸間 (哈爾濱商工會議所調)

アパート四疊位、三〇圓内外、素人貸間四疊位 (食事なし) 二〇圓内外
 齊々哈爾 (市公署調)

標準貸家平均料金 甲 四〇圓乃至六〇圓、乙 三六圓、丙 二二圓
 平均貸間料金 疊一疊富四圓七〇錢位 (煖房料金一疊富一圓五〇錢内外)
 住木斯 (市公署調)

標準貸家料金 二間四〇圓、三間六〇圓、標準貸間料金一疊富四、五圓 (煖房料金一疊富二圓)
 承德 (街公署調)
 貸家平均料金 甲 平均七八圓 (四〇圓乃至一二〇圓)、乙 平均二〇圓 (代用官舎)、丙 平均一〇圓 (滿人家屋五圓乃至一五圓)

尙、煖房費に就いて最近日滿商事に於いて調査された石炭一噸當りの價格を示すと、

新京	一圓五錢乃至一六圓一五錢	奉天	一圓二五錢乃至一四圓〇五錢
大連	二圓一五錢乃至一六圓一五錢	哈爾濱	一四圓二〇錢乃至二〇圓七〇錢
牡丹江	一三圓七〇錢乃至一九圓七〇錢	住木斯	一三圓一〇錢乃至一五圓一〇錢
齊々哈爾	一三圓九五錢乃至一八圓四五錢	錦州	一〇圓九〇錢乃至一二圓四〇錢

以上は貯炭場渡の價格で實際の場合にはこれに運搬の車馬賃適當一、二圓乃至三圓内外が加算される。一噸の石炭は新京を中心とすれば二間乃至三間程度の家で大體一箇月の煖房に用ひる量で爾後一室を増す毎に一割乃至二割を増加し、又東より西へ、南より北へ進むに従つてこれを標準として一割乃至二割位増加する程度であらう。

註 康徳七年十月二十一日附を以つて物品販賣價格の表示に關する法令が出て、日本と同様販賣せらるる品物に對して必ずその價格並びに符號を明示することゝなつた。その符號に就いて記せば、

- ㊦ 物價及物資統制法其の他の法令に基いて、販賣價格の公定、指定、許可、認可其の他の方法に依つて定められたる商品例へば綿糸布(綿花聯合組合規格品)酒精、米、鹽、マツチ、巻煙草、味の素、ビール等。
- ㊧ 不當利益等取締規則に依り標準價格の指定されたる商品、これは各省に依つて區々に決定せられたものが多い。
- ㊨ 物品の販賣をする業者の團體及組合に依つて販賣價格を協定し、經濟部又はその他省長、警察廳の認可を受けたる商品
- ㊩ その他の種目は自肅價格として發令日である十月二十一日現在に於ける販賣價格に依つて價格を決定せられたる商品。

九、滿洲の病氣

人間の最大の幸福は健康體であることは屢々聞くところであるが、常に斯くあることは東亞諸民族をとり下し、東亞新秩序達成の大事業の完遂に努力しつゝある我々日本人の絶對缺くべからざる條件である。

然るに從來の在滿日本人の健康状態を見るに甚だ寒心すべき状態にあつて、在滿邦人兒童の體格は日本内地の都會に生活する兒童のそれと同じく、概して狭長型で身長が高くと同時に、胸圍狭く體重劣り、持久力或ひは疾病に對する抵抗力に乏しいのである。又成人に於いては從來滿洲は氣候風土悪いところと云ふ觀念より體格の良いものが來てゐるにも拘らず、結核、チフス、赤痢等の疾病により死亡するものが未だに日本より幾分高いのである。この原因として日本内地に於いて屢々云はれてゐるが如く、滿洲人の衛生思想の乏しいため或ひは醫療施設の不備なる點が擧げ得るのであるが、醫療施設に對しては現在着々と完備擴充されつゝあり、又法律により日本と同じく腸チフス、パラチフス、赤痢、コレラ、天然痘、チフテリア、猩紅熱、發疹チフス、流行性腦脊髄膜炎、ペスト等十種の急性傳染病は絶對に隔離することになつてゐるので、醫療施設の不備なる原因は從來の考へ方を寧ろ是正する必要がある。この原因より寧ろ既に述べた如く衣、食、住の様式が滿洲生活に不適當なることは絶對見逃し得ないところである。これに加ふるに従前の在滿邦人の

生活状態は所謂植民地的氣分より麻雀その他娯樂にふけり、又過度の飲酒等不攝生なる生活をするものが少なく、斯くの如き不合理なる生活状態が必然的に在滿邦人の體格を衰弱せしめ、罹病率、死亡率共に日本内地のそれより高くならしめたのは蓋し當然のことと云はねばならない。

(一) 醫 療 施 設

建國前迄は軍閥時代の無統制的衛生行政のため、滿鐵沿線の舊附屬地を除き、醫療施設は頗る不備不完全なものであつたが、建國後は日本内地或ひは朝鮮よりの應援を得て、その日未だ浅いにも拘らず、保健衛生指導擔當委員が逐年擴充され、開拓地その他邦人の進出の多い地方には公醫が置かれ、又滿洲赤十字事業も康德六年より事業を開始された。又民生部(日本の文部省及び厚生省とを合併せるが如き組織となつてゐる)は民生振興の立場より、取敢へず一縣一診療所の醫療網を全國に擴大しつゝあり、その他傳染病取締の實施、地方に於ける保健所(診療、健康相談を行ふ機關)或ひは傳染病棟の増築、結核豫防施設等の如きも逐年その整備が急がれてゐる。

又醫療に關しても、日本に於いては醫療の配分が醫師の自由營業に任されてゐる形にあるが、滿洲に於いては將來の目標を醫療の國營に置き、一般國民健康保險制度も日本に先んじての實施が豫想される程である。又醫療擔當者の養成も奉天、新京、哈爾濱、佳木斯の四醫大學及び安東、通遼、通河の三開拓醫學院によつ

て行はれ、保健衛生研究所も數多設置されてゐる。

斯くの如く滿洲國では醫療に關する一切の施設に就いて急速なる充實を見つゝあるのであるが、こゝで蛇足ながら一言して置きたいことは將來滿洲に如何にこれ等醫療施設が増加完備され、又醫者の數が多くなつても、病氣の大部分は自己の保健上の注意を缺くことによつて罹るものである以上、各自が保健に心掛けるべきことであつて、若しかゝる注意を怠つて罹病しても、それは唯徒らに醫療施設、醫者の不足を來すのみで、滿洲は日本人にとつて決して住みよいところとはならないであらう。

(二) 在滿日本人の健康状態

滿洲に於ける日本人の保健状態が醫療施設の急速な普及を見つゝある今日、如何なる方向に進みつゝあるか、それを死亡統計によつて述べてみよう。

先づ總死亡率より述べる。單位を人口一千人として一九二〇年より一九三五年までの一五年間に於ける死亡率を、五箇年平均一區間の三區に分ちて作られた左の表を見ると、一九三一年より一九三五年迄の死亡者總數は一一・五人で以前の約七五%に減少して居る。又日本内地同年間の死亡率より一七・九より遙かに少くなつてゐるが、然しこれは在滿日本人人口が元氣な青壯年の割合に多い結果からで、在滿日本人の人口構成状態を日本内地の同年間に於ける人口構成状態に訂正された死亡率によると一六・五となり、それに結核死

亡者を日本内地より幾分多く見積れば日本内地同年間のそれと殆んど大差がないもの如く想像される。

在滿邦人總死亡率累年比較表 (人口千人付)

	一九二〇—二五年	一九二六—三〇年	一九三一—三五年
一般死亡率	一五・二	一五・二	一一・五
訂正死亡率	一八・七	一九・六	一六・五
日本内地死亡率	—	—	一七・一

次に年齢別に死亡率を見れば、老年期を除き凡ゆる年齢階級に於いて従前よりその減退が見られ、就中一〇歳前後の少年期に顯著で内地と比較しても略同一状態にある。而して青壯年期に於いては常に内地より二・三%低くなつてゐるが、その原因として一つには滿洲は不健康地であると云ふ従来の觀念より渡滿者が比較的強壯であること、又一つには渡滿青壯年が結核の如き慢性病に罹れば歸國療養し、滿洲の死亡數に表はれないこと等が考へられる。

何はともあれ最近に於ける在滿日本人の死亡率は非常に下つて來て、同じく下りつゝある日本内地に比較しても大差がない程に至つてゐる(次表参照)。この在滿邦人の死亡率が急速に減少しつゝあることは全滿的に醫療施設が普及化しつゝあることに起因すると云ひ得るのである。

在滿内地人及日本内地人の主要疾患死亡率比較 (人口萬に付)

年 代	幼 少 年 に 多 き も の			青 年 に 多 き も の		老 年 に 多 き も の									
	下 腸 炎	肺 炎	赤 痢	猩 紅 熱	麻 疹	腦 膜 炎	脚 氣	結 核	腸 炎	腸 結 核	腸 結 核	癌	腎 臟 炎	腦 出 血	心 臟 病
在滿内地人 一九二〇—二五年	九・五	一六・五	七・一	二・二	二・五	二・三	三・二	二・三	二・六	七・〇	七・〇	九・九	一六・五	四・九	四・九
日本内地人 一九二〇—二五年	一六・二	一五・二	二・三	〇・二	一・四	五・四	一・四	一・九	一・二	七・一	八・二	一六・五	五・八	五・八	五・八

(三) 病 氣

病氣にはその種類が極めて多いが、こゝでは保健上特に注意を要すると思はれる病氣と飲食物によつて傳染する經口傳染病、寄生蟲その他の原因による傳染病、内臟寄生蟲病等に分け、これに滿洲特有の風土病等に就いて記して置きたい。

(イ) 經口傳染病

經口傳染病と云はるゝものは飲食物により傳染する消化器系傳染病のことで、赤痢、腸チフス、パラチフス、コレラ、疫痢等はこれで傳染力は可成り強いものである。然しこれ等の菌を飲食物と共に嚥下しても總べてのものが罹病するものでなく、今チフスを例にとれば、一集團が本菌の襲撃を受けたが如き場合でも發

病率は一五%乃至二五%で、最大四〇%と云はれてゐるのである。従つて平生各自がいささか飲食物に注意をすればその罹病率は遙かに低下し、又殆んど皆無にすることもさして困難なることではない。次にその豫防法に就いて多少述べてみることにする。

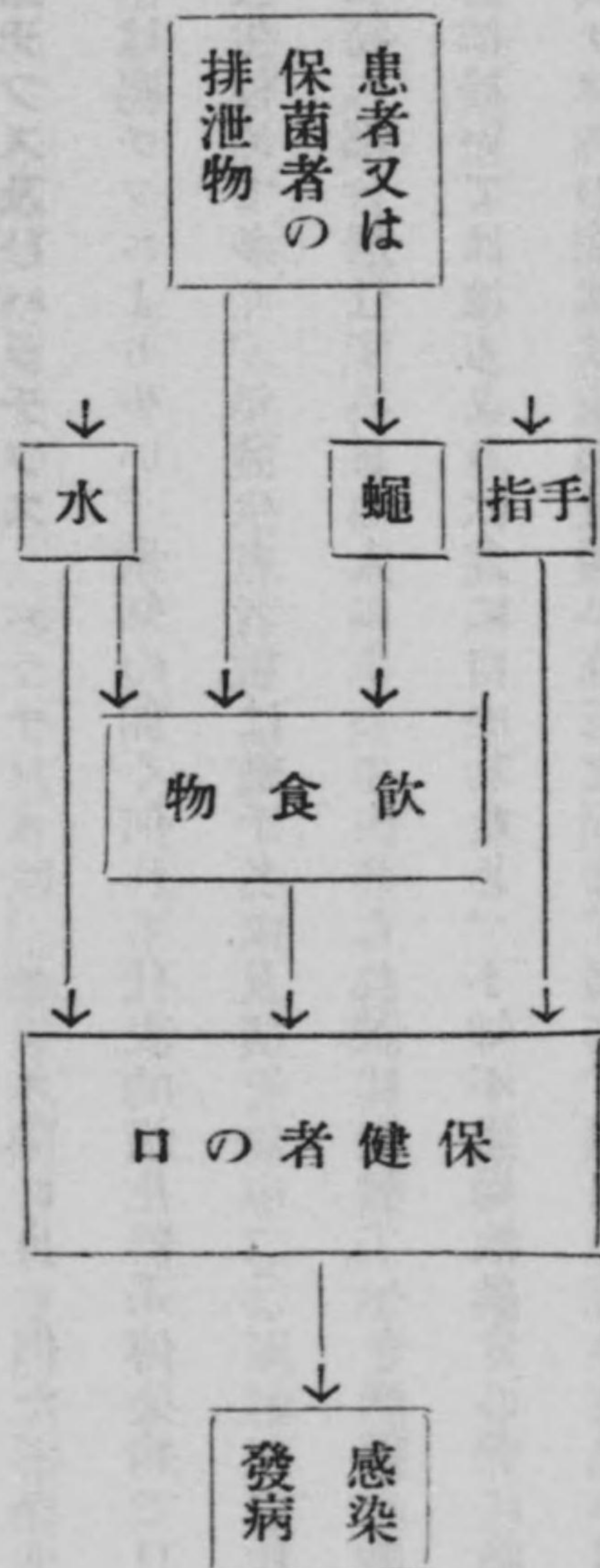
豫防法として先づ第一に飲食物の生食を避けることで、特に野菜類はこれ等の生菌を有するものの糞尿が肥料として用ひられる危険があり、又滿洲人は汚染せる水で野菜、その他の食物を洗つて販賣することが少くないので、煮食するのが最も安全である。然し野菜の煮食はビタミンの如き栄養素が損失され、ビタミンの缺乏症を起し易いので野菜の生食も實際問題として避け難い。従つて野菜を生食する場合はサラシ粉二匁を水一斗に溶解して二十分位充分浸漬消毒して水洗後用ひるか、或ひは内臓寄生蟲の卵も同時に死滅させ得るところの熱湯に十秒位浸漬振盪して利用すべきである。この程度の熱湯にはビタミンは殆んど破壊されないと云はれてゐる。

第二には蠅の驅除である。蠅による害は實に豫想以上で、最も不潔な銀蠅は八十萬から五億の微菌を背負ひ、普通家蠅も五萬以上を保有してゐる。微菌は肉眼で視えないため遂蠅の害を知りつゝも深く注意しないが、一度思ひをこゝに向ければ慄然たらざるを得ない。滿洲人に蠅はつきものゝ様に考へ蠅の撲滅を不可能視する事なく蠅退治に全力を挙げなければならない。その方法は蠅を網戸を張つて室内に入れない様にすると同時に、蛆の發生場所に石灰乳や、石油乳劑やクレゾールやマゴチンの五十倍稀溶液を撒布することで、

それにより容易にその驅除が出来る。然し一層徹底的に蠅を殺すには便池の蛆を殺すことで、便池内容物の三十分の一に相當する生石灰を混入して攪拌するのである。

第三の豫防としては夫々の細菌に對して夫々注射用、或ひは服用のワクチンが製造されてゐるので注射或ひは内服が挙げられる。ワクチンは經口傳染病のみならず他の傳染病に對しても製造されて居り、その有効期間は傳染病によつて各々異にしてゐるが、經口傳染病は概ね一年位である。従つて經口傳染病のワクチン豫防は毎年發生前の五、六月頃に實行して置けば理想的と云ひ得る。

その他の豫防法として食事前に手を洗ふこと等日常注意すべきことが多いのであるが、一度感染すれば不經濟で本人の苦痛のみならず、他人の迷惑も亦甚大なることを考へ、兎角繁雜に思はるゝ豫防も充分講じなければならぬ。



腸チフス及びバラチフス バラチフスは、チフス菌に良く似たバラチフス菌により起る病氣であるが、死亡率は腸チフスより少い。衆知の如く何れも代表的消化器系傳染病で日本にも多い病氣であると共に滿洲にも發生極めて多く、年發生患者数は數千名に及びその中二〇%が死亡してゐる。而して罹病者の大部分は日本人特に都會居住する日本人によつて占められ誠に慨歎すべき状態にあるが、これは日本人が生食を好み又都會に於いては地方より飲食に自由なため、不知不識暴飲暴食の弊に陥るからだと思はれる。

腸チフスの症狀は最初身體に倦怠を覚え、頭痛、腰痛を伴ひ食欲が減退してゐる中に、徐々に高熱を發するに至る。これに屢々胸及び腹等に小赤粒の發疹を生ずることがある。高熱は一、二週間餘り續き頭痛、腰痛はなくなるが、それに代つて讒言を云ひ、又幻覺を起す様になる。元來チフスは精神朦朧と云ふ意味で、この病氣の特色を良く現はしてゐる。この時期を越えれば熱も徐々に下り、意識及び食欲が恢復して來るのである。

腸チフス菌の生存力は赤痢菌、コレラ菌のそれに比して遙かに長く、日本の東京の秋より冬にかけての氣温でチフス菌生存期間に就いて調査された結果によれば、殺菌力の強い食酢中に於いて六分、日本酒は二時間、食鹽は二六時間、ビール及び醬油中に於いては七日間で死滅し、殺菌力のない飲食物或は衣服等に附着したものは二週間乃至一箇月半も傳染力を有する。又海水中では一箇月、糞中では三〇日乃至四〇日間生存する。斯くの如くチフス菌の生存期間は極めて長く、従つて飲食物には特に注意を要するが、發生前の

五、六月頃に豫防上内服ワクチンの服用又は注射を受けることが最も賢明なる方法である。

アミーバ赤痢 滿洲赤痢とも云はれ、支那及び全滿に廣く分布し、更に蒙古地方迄蔓延してゐる。罹病者は滿洲人に多く、日本人は未だ入植年月の浅いためか現在のところ幸に少い。この病氣に罹ればアミーバが腸に寄生するため猛烈な下痢を起すが、日が経てば自然に下痢が止まる。下痢が止まればなん等健康と異ならないが、一寸食事上の節制を缺けばアミーバのため直ぐ下痢するのである。下痢が止まったが故に治療を怠れば慢性となり、長年の間に腸壁は該菌寄生のため厚化し、便秘に傾き胃腸障害を訴へ、甚だしい場合には腸が穿孔して生命を失ふに至る。治療法は初期にエメチンの注射を行へば直ぐ全治するが、慢性になつたものは、現在のところ的確な藥劑がないと云はれてゐる。従つて本病豫防のためには未消毒の食物を絶対避けなければならぬ。

尙、本病は渡滿後環境が變つたために起り易い下痢、冷腹或ひは水あたり等による下痢と混淆されて日本内地に報道されるためか、渡滿すれば直ぐアミーバ赤痢に罹るものと思つてゐる日本人が少くないものゝ如くであるが、然し開拓地衛生視察隊その他の報告書に依れば、渡滿後間もなく下痢したものを診察する際殆んど自らアミーバ赤痢に犯されたと云つて來るが、檢診して見れば眞實の有菌患者は極めて少いと報告されてゐる。

赤痢 赤痢は勿論赤痢菌によつて起る消化器傳染病であるが、赤痢は大人も罹るがチフスと異なり主に子

供が罹り、これが小兒に對し急性に働けば一夜にして生命を奪ふものである。

その發生期は五月中旬頃で、六月に入れば急激に増加し、七月に最高頂となり、八月に入り滿洲に秋風が吹き初むる頃には下火となつて來る。赤痢も亦食物の暴飲暴食、或ひは生食等がその直接原因で、注意する必要があるが、飲食物以外の間接的原因にも注意を要する。就中寝冷え、風邪引きはこれのみにても赤痢の誘因となり、滿洲の如く日中は暑く、夕方より急激に氣温が降下するところでは特に注意を要する。

寝冷えを防ぐためには腹巻をすることが考へられるが、新京千早病院(傳染病の醫院)長安部篤惠氏は同醫院に來る赤痢患者の大部分が腹巻常用者にして偶々夜腹巻を脱いだものによつて占められてゐるので、腹巻常用を極度に排撃され、夜間の如く氣温の低い時にはこれに相當するやうな方法を推奨されてゐる。

コレラ コレラは經口傳染病中最も死亡率高く罹患者の八〇%に及び且つ傳染力の強いもので、主に夏季發生する。然し滿洲には發生地がなく、その發生原因は日本と同じく上海その他支那各地より保菌者が入國することによつて傳播されるのである。かゝるため發生時期には支那方面より滿洲國內に入る旅行者に對しては嚴重なる防疫検査が行はれ、現今ではその發生は極めて稀であると云つても過言でない状況にある。

(口) 寄生蟲その他の原因による傳染病

寄生蟲その他の原因による傳染病は前記の經口傳染病と同じく可成り悪性且つその傳染力の著しいものが少くない。例へばペスト、發疹チフス、痘疹、マラリア、流行性腦脊髄膜炎(日本に多し)、猖紅熱、チフテ

リア等であるが、滿洲に於いては前四者を擧げることが出來よう。

ペスト ペストは明治四三、四年滿洲に大流行して四萬數千名の患者が發生し、その八〇%餘りが死亡した記録がある程極めて傳染力強く、又死亡率の高い病氣である。ペストは本來鼠類、栗鼠類等の嚙齒類に發生する傳染病であるが、これ等の病獸を吸血せる蚤はその體内に多數の菌を保有し、偶々かゝる蚤が人に附着する時はその排泄物中の菌が微細なる損傷より人體内に浸入或ひは螫刺吸血により移行して發病する。症状は體内に浸入した菌のため高熱を發し、腋、股、首等の各淋巴線が腫れ、局部を抑へれば疼痛を感じ短時間にして死亡する。然し時には病勢が多少遅延し、種々の臟器特に肺臟を犯せば所謂肺ペストとなり、健康者もかゝる患者の咳嗽を呼吸すれば肺ペストになつて死亡し、その傳染力は極めて著しいものがある。豫防は注射並びにマスク(肺ペストの場合)をかけることによつてその目的を達することが出来る。

ペストは前述の如く嚙齒類に發生する傳染病で、その原發生地帯は滿洲國の奥地に限られてゐるが、同政府當局に於いてはこれ等の地方にペスト調査所、隔離所及び監視所等を設けて極力防疫に盡力してゐる。従つて年々その患者發生數は年々著しく減少し、交通の開けた都會地方は過去十數年來、殆んど發生を見ないのである。

註 ペストが新京に康德七年秋發生したことは、各種報道機關により傳へられたが、これは極めて稀な事故で、軍部及び各種衛生機關の必死的努力により、新京全市民四十數萬人中患者の發生は僅かに二八名に止まり、恢復者も數名あつた。

發疹チフス 戦争の時に屢々流行するので戦争病の名がある。日本に於いても青森縣の山奥に局限して僅かに小流行するが、滿洲に於いては東邊道及びその近接地帯にその根源があり、建國當時は鐵道沿線の各地方に蔓延し、日滿軍官等治安工作に従事するものは頗るこれに悩まされたものである。然し治安の統一された今日に於いては一部の地方にその發生が局限され、都會地では殆んど發生しない。死亡率は重症發疹チフスになれば約二〇%を示すものである。症状はやゝ特有で固有の熱型とその経過のもとに發疹が表はれ、悪感と戦慄を伴ひ激しい頭痛及び腰痛があり、急に高熱を發し約二週間熱が持續する。發疹は發熱後三、四日目に現はれ、肩胛部より始まり次第に全身に及び、短時日の間に斑點は褪色して紫藍色となるが、この間に氣管支炎を起すとか、痙攣を起したりその症状は最初より重要で、前記症状のある時は直ちに醫者の診療を請はねばならない。

然し本病は戦争病の名がある如く不潔即ち不潔に關聯のある虱によつて傳播されるものであるから、虱の驅除並びに衣服の清潔化を計れば容易に豫防し得るのである。

註 發疹チフスは俗に滿洲チフスと稱され、病保有者は鼠族で、羅患鼠を吸血せる病菌保有者が偶々人を吸血することにより、最初發疹熱患者が發生する。然し患者より本病々原が虱を介して逐次人より人へと傳播される場合その過程に於いて發疹熱の病原體が發疹チフスの病原體に變移して發疹チフスの流行を招くこととなる云はれてゐる。而して發疹チフスの病原體は虱であると云ふ見解は實驗醫學上略々歸結證明されてゐるところである。

マラリア 滿洲に於けるマラリアの發生地域は奉天省以南、安東省及び通化省等で、流行地は撫順、鞍山

等の炭業地並びに遼陽、營口其の他水田の多い地方である。然し新京以北に於いては少く、マラリア病増加の傾向も先づないと云はれてゐる。

マラリアには種々あるが、滿洲に發生するのは三日熱マラリアのみで、四日熱マラリアとか熱帯マラリア等は發生してゐない。三日熱マラリアは三日目毎に高熱を發して悪感を伴ふのでこの名がある。特效薬はキニーネ劑で、發熱發作の約八時間前に服用すれば効果が顯著である。罹病初期に完全に治療して置かなければ慢性となり、治療に數年或ひはそれ以上を要し、當人の苦痛は勿論、マラリア蚊の出現と同時に感染源となり多くの人に迷惑を及ぼす事になる。従つて徹底的に治療する必要がある。尙、流行期には約〇・五瓦のキニーネを一週一回乃至二回服用すれば完全に豫防し得る。

天然痘 天然痘は寒くなれば發生し、特に十二月、一月はその最盛期で、春になれば漸次少くなる。感染は患者との接觸又は空氣によつて傳染し、感染すれば高熱を發し皮膚には水泡を生ずる。死亡率高く、治療するも痘痕を残し所謂菊面となるもので、衆知の如く種痘によつて完全に豫防出来る。然し、その効力は一年乃至數年と云はれてゐるが故に、出來得れば毎年種痘を行ふに勝ることはない。尙、本病豫防のため一般民衆に對して強制的に種痘が行はれて居り、その根絶も近き將來にあると思はれる。

(ハ) 體 内 寄 生 蟲

體內寄生蟲は人體内に寄生し、榮養分を吸収して我々を榮養不良ならしめ、甚だしき場合にはこれがため

死に致ることもある。然し体内寄生蟲の最も恐るべきことは栄養不良に起因して各種病に對する抵抗力の減少を來たすことで、兎角滿洲生活に不馴れた日本人にとつては、特にたかゞ蟲一匹と輕々しく取扱ひ得べき問題でないと思はれるのである。就中、日本と同じく滿洲に於いても最も普遍的な蛔蟲に於いて然りと云ひ得る。而して体内寄生蟲はその大部分が飲食物を通じて感染するものなるが故に、その豫防法は頗る簡單で要は飲食物を充分に透熱することにより容易に防ぎ得るのである。

蛔蟲 蛔蟲は日本内地と同じく滿洲に於いても最も普遍的な体内寄生蟲で、その保蟲者パーセントも日本と大差なく、少い地方は二・三〇%、多い地方になれば九〇%以上に達してゐる。衆知の如く蛔蟲は體長二・三〇厘米に及ぶ黄白色ミミズ様の蟲で小腸の上部に寄生し、貧血を起さしめ、又小兒に寄生すれば發育停止となる。蛔蟲の害はこれだけに止まらず肝臟、脾臟その他各種内臟諸器官に迷入して吾人の生命を奪ふことすらあり、又蛔蟲の出す毒素により悪感、嘔吐、食慾並びに視力減退を起し、小兒には更に幻覺、臍語等種々の神経的障害を伴ふことがある。斯くの如く蛔蟲の及ぼす害毒は多種多様且つ甚しいものがあるが、その感染は主に生野菜、漬物、不潔なる手等を介して行はれる。従來体内に飲食物と共に入つた蛔蟲卵は小腸に於いて成蟲になるものゝ如く云はれてゐたのであるが、實は必ず一旦体内を移行して成蟲になることが明かにされた。従つて蛔蟲の及ぼす害は決して輕微でなく、日本と環境の著しく異なる滿洲に於いて生活せんとするものゝ大いに警戒を要する寄生蟲である。而してその驅除豫防法は充分に飲食物を煮沸、燒炙すると共に、

又海人草、マクニン等の驅蟲劑を用ふれば容易にその目的を達し得るのである。

肝臟ヂストマ 一名篋形二口蟲と呼ばれ、肝臟に寄生して重篤なる病變を惹起する内臟寄生蟲で、日本内地でも縣により濃厚なる浸潤を見てゐる所がある。滿洲に於いては未だ調査が不充分で明確なことは知り得ないが、義州、奉天、撫順、新京、哈爾濱等に産する川魚には肝臟ヂストマの幼蟲が認められ、その魚の種類は一〇餘種ある。而して最も寄生率の多いのはモツゴ、ヒガヒの類、カラスナモドリ、タナゴ等の肉の軟いもので、鮎、鱸の如く肉の緊つたものには少い。肝臟ヂストマに犯されれば下痢、貧血等を起し、下肢に浮腫を生じ又黄疸、夜盲症を伴ひ極度に衰弱して死亡する。これには適當な特效薬がないため總べて醫者に任せざるより方法がない。従つて刺身或ひは加熱の不十分な魚肉を避けることが賢明なる方法と云ひ得る。

註 滿洲に於ける肝臟ヂストマの分布は従來奉天、撫順、大連、旅順等にて僅かに糞便中よりその卵が檢出された報告が齎されてゐるに過ぎなかつたが、最近、新京郊外、哈爾濱、奉天省鐵嶺縣下、錦州省義縣下等の淡水魚中にもその幼蟲が含まれてゐることが明かになつた。従つてその分布は可成り廣いものと考へられる。

肺臟ヂストマ 東洋に廣く分布し、人類及び犬、猫、その他の動物の肺臟に寄生する恐るべき寄生蟲で、従來滿洲國には全然發生せぬものとされてゐたが、最近滿洲國內にも存在することが明かにされたものである。肺臟ヂストマの感染経路はその被囊幼蟲を保有する淡水産河蟹の生食或ひは調理の不十分なものを食ふことによつて起り、若しこれが寄生すれば人體に發疹を生じ、肺臟に侵入して萬病の根源となる。而して肺臟ヂストマの中間宿主たる淡水産蟹の種類は多いが、滿洲に於いては現在ザリガニ及びシナモクツガニが發

見されてゐる。これ等の蟹は相當に美味であるが、酢漬又は不充分なる調理で食用に供することは甚だ危険であるから充分加熱する調理法に據らねばならない。

註 滿洲に於ける肺臓チストマの發生地域は、敦化、五常、磐石、額穆、珠河、輝南縣等、日本内地に於いては岡山、大阪府下、岐阜、徳島、新潟、山口、福岡、熊本各諸縣。

條蟲 一名眞田蟲とも稱せられ、その種類は多いが普通知られてゐるのは裂頭條蟲、無鈎條蟲、有鈎條蟲の三種類で中間宿主は夫々異にし、裂頭蟲が淡水魚主として鱒、無鈎條蟲が牛、羊、有鈎條蟲が豚である。滿洲に多いのは無鈎、有鈎の二條蟲で裂頭條蟲は少い。而してこれに犯されてゐる者の分布状態を見ると北進する程多くなつてゐるが、これは羊を常食とする蒙古人が多くなるためで、蒙古人の一〇％は少くも條蟲保蟲者と云はれてゐる。然し日本人の罹病者は極めて少い。

而して條蟲で最も恐るべきことは人體が中間宿主となつて身體各部に幼蟲が結節を作り、且つ家族に一人のかゝる患者が出れば他の家族も亦これに侵されることである。然しこの現象は有鈎條蟲の場合に起ると云はれてゐる。

尙、條蟲の特效薬として漢藥靈丸が擧げられる。

(二) 風 土 病

土地廣汎なる滿洲國に於いては各地特殊の事情があり、極く地方的に特有の症状を呈する病氣がある。即

ちカシン・ベツク氏病、克山病、カラ・アザール等であるが、これ等の病氣は恰も日本の北陸特に新潟に於いて發生する恙蟲病の如く一部の地方に限られて發生するもので、現在までのところ土着の農民等に多く、外來者たる日本人でかくの如き病氣にかゝつたものは極めて少い。

カラ・アザール(黑熱病) 奉天以南の地域に多い病氣であるが、本來は熱帯及び亞熱帯地域に於ける一種の熱帯病で、従來は或る一種の吸血蟲によつてのみ媒介されるものと考へられてゐたのである。然るに最近普通の蠅によつても傳播されることが明かにされたのである。本病は主として一〇歳未満の小兒が犯され易い病氣であるが、かつて熱河地方に駐屯せる皇軍勇士が凱旋後、日本で發病した記録もあり、従つて絶対に成人は犯されないとは云ひ得ない。症状は不規則な發熱を以つて始まり、發熱後二週間乃至六週間後には脾臓及び肝臓が犯され、腹部が恰も妊婦の如く膨脹する。治療さへ早くすればアンチモン製劑の注射により簡單に且つ又完全に治療し得らるのである。

地方病性甲状腺腫 地方病性甲状腺腫はドイツその他歐洲諸國にも見られる。滿洲で本病の最も濃厚な蔓延地域は熱河省及びその近接地帯であるが、その他南滿地方にも多少見られる。罹患するのは概ね青年期からで而も生活程度の低い住民に多く、生活程度の高い者には罹患者が低いものゝ如くである。而して土着年數に比例して罹患者が多く、又甲状腺腫も大となる。

本病の原因に關する學説は多種多様で未だ歸一するに至つてゐないが、その一因子としての沃度缺乏説は

數多の學者の一般に認むる所である、従つて海産物特に海藻類の攝取は單に本病豫防上、又營養も具備せる最も良い方法と云ひ得る。

註 土民は地方性甲状腺腫を粗脖子と呼んでゐる。これは甲状腺腫の肥大のため「首が太く」なることを云つたもので、甚しく首の太くなつたものは瘰癧或ひは疽と云つてゐる。尙、地方により氣腫と稱してゐる所があるが、この意味は生氣即ち怒り過ぎるから首が脹れると云ふ考へより生じたものであると云はれる。土民は若い娘がこれに罹るのを恐れ、これに罹らぬ前に、即ち早婚する風習がある。

克山病 克山病と云ふのは康德二年の秋、龍江省管下に病狀並びに原因不明の疾患の發生せることが喧傳され、殊に同省克山縣下が最も顯著であつたため、克山病と稱せらるゝ様になつた。本病の發生は概して男子より女子に多く、且つ年齢的には一六歳乃至二五歳位迄のものが最も高率を示してゐるのである。その病狀は極めて急激に悪心、嘔吐を以つて始まり、或ひは時に悪寒を伴ひ發作を起し、次いで胸内苦悶、呼吸困難等の心臟機能障害に因る主徴を訴へ短時日にして死の轉期を取るものが多いのである。

本病の原因に關する學説は數多あり一定してないが、その中一酸化炭素中毒説は本病の發生せる住宅が殆んど貧家特に炕の不完全なものに多いこと及び動物實驗の結果より最も有力視されてゐる。目下のところ開拓民には未だその被害者はなきものゝ如くであるが、何れにしる一酸化炭素は猛毒なるが故に、炕その他の暖房機具の取扱ひ及び通風には特に注意すべきである。

カシン・ベツク氏病 カシン・ベツク氏病は東滿、朝鮮の北部、シベリヤの一部にも發生する關節の疾患で

主として四肢の骨が犯されて發育障害を起し、遂に畸形を呈するに至るのである。發病期は概ね十四、五歳前後のもので、稀に一〇歳未満で發病するものもある。

本病の原因に就いては従來種々の學説が唱へられてゐて、動植物性物質を以つて汚染せられた水の飲用、重金屬中毒説、鐵中毒説、或ひは内分泌腺相互關係の障害による學説等があるが、最後の二説は可成り有力なるものである。その豫防對策法も未だ明確なるものがない様であるが、肝油攝取は相當効果があると云はれてゐる。

(四) 滿洲保健生活要項

大體疾病に密接なる關係のある滿洲の氣候、衣、食、住を始め、滿洲の病氣に就いて記したため、こゝに滿洲保健生活法を要約して記すこととする。

住 宅

- 1、滿洲の室内空氣は極めて不潔である、寒さを恐れず戸外に出ること。
 - 2、室内空氣も出来るだけ新鮮な空氣を入れて、換氣を計ること。
- (一) 窓の目張りをなるべくしないこと。
 - (二) 時々窓を開いて換氣すること。

(三) 掃除は窓を開き、茶殻を撒いて掃くこと。

(四) 炊事場には換気管を利用すること。

(五) 夏は夜間窓を開けて眠ること、夜氣は決して毒ではない。

冬 季 の 室 温

3、部屋の過熱は身體を弱くして風邪を引くもと。

晝は攝氏一三度―十八度、夜は十三、四度が健康に最もよい。

4、煤煙は健康に悪いばかりでなく家計の損失である。

5、炭火、煉炭は恐しい毒瓦斯を出す。成可く火鉢を用ひぬこと。

暖 房

6、ペーチカの焚き方は加減板を注意して毒瓦斯を部屋に漏らすな。

衣 服

7、冬の女子の服装は防寒的に工夫せよ。

8、子供の衣服は氣温に應じて調節せよ。

食 物

9、喰べ物は栄養本位に、成可く土地の産物を利用せよ。

10、冬の喰べ物に野菜と脂肪を取ることを忘れるな。

傳 染 病

11、夏は野菜を消毒せよ、これが悪疫豫防のかなめ。

12 豫防注射を受けて悪疫を防げ。

一〇、文化・教育

滿洲が最近迄文化的に非常に遅れてゐたと謂ふことは屢々指摘されてゐる處である。これは滿洲の位置、地勢、氣候等種々の原因にもよらうが、舊軍閥張作霖、學良父子の永年に亘る虐政が最も大きな原因であらう。即ち滿洲の實權を承握した張家父子は中原に覇を唱へんと謂ふ野望より極端な搾取を行ひ、軍備擴張に狂奔したため、滿洲三千萬民衆は塗炭の苦しみ陥つた。斯くの如き状態にあつたため文化施設は殆んど顧みられず、教育機關に就いても極めて不完全な状態に捨てられてゐた。當時に於いて統計上では可成り多數の學校があつたのであるが、その大部分は貧弱な私塾の類で、奉天、吉林等には大學も設けられてゐたが、設備、學生の素質共に劣悪で、學術研究の府と謂ふよりは寧ろ排外、排日運動の策源地の觀を呈してゐた。

この間にあつて滿鐵は莫大なる經濟的犠牲を忍んでその經營に係る滿鐵沿線の附屬地内に各種學校及びその他の文化施設を完備して滿洲文化の向上に努めた。然るに建國後はかゝる情勢が一變し滿洲國政府に於いては極力國內の教育、文化施設の改善充實に努め、舊軍閥時代の三民主義に基く誤れる排外思想を更め、民族協和、王道政治の新精神を鼓吹することに努力した。今や舊軍閥時代の教育文化機關の整理を終へ、積極的活動時代に入り着々その實績を擧げて居り、日本人の教育文化機關に對しても深甚なる關心を持ち、年々

四百萬圓餘りに達する莫大な費用を計上し、以つて有形的に無形的にその充實を期してゐるのである。又官立の大學に於いては日本人も入學せしめ、日滿共學をさせると共に、授業料全額免除を全般的に行ひ、又大學によつては衣服、教科書等も支給するところがある。

(一) 日本人教育施設

日本人の教育施設は、建國前迄は關東州内が日本の政府、滿鐵附屬地内が滿鐵の管轄にあつた。然るに建國以來日本人の激増に伴ひ就學兒童も全滿的に増加したため、滿鐵附屬地行政權が滿洲國に移讓されると同時に關東州内の教育施設は關東州廳の管轄するところとなり、一時國內の日本人教育施設は駐滿日本大使館教務部の管轄するところとなつた。然し日本人の教育の重大性に鑑みこれを關東局在滿教務部となし(昭和十五年四月)、一層その充實が計られてゐる。

その經營に當つてゐるのは青年學校、小學校及び幼稚園が日本學校組合及び小學校組合(昭和十五年四月一日内鮮一體の趣旨に依り普通學校(鮮系)が小學校と改稱されたため、従前その經營に當る普通學校組合も小學校組合と改稱さる)中等學校が學校組合聯合會で、本來日本人の大學たる滿洲醫科大學は滿鐵で行つてゐる。而して教育制度並びにその體系は、小學校より大學に至るまで概ね日本内地の教育制度及び系統に準據してゐるが、たゞ滿洲の特殊事情に鑑み、滿洲語が必須科目として小學校及び中等學校に課せられてゐる。

尙、小學校は日本内地に於いても昭和十六年より修業年限八年、その名も國民學校と改稱されることになったため、我が國內の日本人小學校もかく改稱されることになったがそれに就いては後述することとし、以下學校別に分けて若干の記述を試みよう。

小學校 小學校は全滿各地に數多存在し、最近の統計によれば、關東州二六校、就學兒童數二萬二千三百人餘り、滿洲國內に於いては一般地の小學校(在外指定を受く)のみで一九〇校、就學兒童數約七萬名となつてゐる。在外指定を受けてゐる小學校は勿論一般地のみならず開拓地のものも存在するが、開拓地の小學校はその特殊事情より多少都會地のもの或ひは日本内地のものとは趣を異にしてゐるのである。

即ち、開拓地に於ける小學校は開拓地の特殊事情を參酌し、學校開設當初若干年間は開拓團長に經營を委託し得る如く融通性が持たしてあり、學校經費の負擔に就いても能ふ限りの軽減が圖られてゐる。斯くの如く開校當初開拓團に委託經營を行はせるのは、各開拓團の持つ郷土色独自の理想を加味する必要がある、且つ一般の建設との間に跛行を生ずる憂があるためで、開校後一年乃至二年を経過し、教員並びに設備が整へば先に述べた在外指定學校に指定せられ、同時に學校組合の直營とされるのである。而して昭和十五年五月に於ける在滿教務部の調査によれば開拓地の小學校一〇五校(中在外指定を受けたもの四七校)、その就學兒童數は八千名餘りに達してゐる。

以上の如く一般地にも開拓地にも小學校が數多く存し、又ぞく／＼新築されてゐるので義務教育には如何

なる地に居住するも殆んど不自由がなく、極めて片鄙な地方で日本人少く、小學校もないところでは然るべき都會の小學校に寄宿舎が設置されて居り、これ等地方の兒童をそこに收容し、先生が親代りになつて教養してゐる。

尙、鐵道によつて通學する小學生に對しては國鐵線、滿鐵線を問はず鐵道乗車賃全額を免除して初等教育の徹底を期してゐるのである。

在滿國民學校に就いて

在滿教務部では文部省の教學刷新に伴ふ國民學校制の實施と關聯して、同制度の實施について種々検討を行ひ在滿邦人教育の特殊性に基く独自の在滿國民學校案が作成されたので、新學年から初等科一、二年に對し實施することになった。而してこの國民學校案の教育の本旨と方針並びに教科の統合、綜合教授、教科課程の各大綱を決定したものであり、従つて康徳八年度は國民學校制度實施準備期ともいふべきもので、同案を實施する一方研究指定校、教育會研究部等によつて教育内容、教授上の關係その他について充分研究したうへその結果に基いてさらに具體的な教科案を作成、康徳九年度から實質的な國民學校制が實施されるのである。在滿國民學校案は學校の名稱を××在滿國民學校とし修業年限は八年で、その課程は初等科(六年)高等科(二年)となつて居り、その内容は次の如きものである。

在滿國民學校案

一、在滿國民學校教育の本旨

皇國の道に則りて普通教育を施し國民の基礎的鍊成を爲す。

二、在滿國民學校の教育方針

- 一、教育の全般に亘りて皇國の道を修鍊せしめ特に國體に對する信念を深からしめ盡忠の赤誠に徹せしむること
- 二、滿洲國建國の精神を體得せしめ滿洲國民族の中核たる責務を遂行する志操の涵養を力むること
- 三、國民生活に必須なる普通の知識技能を體得せしめ情操を醇化し健全なる身體の育成に力むること
- 四、我が國文化の特質を明ならしむると共に東亞及世界の大勢につきて知らしめ皇國の地位と使命との自覺を促し、他民族より信頼を受くるに足る品位と實力の養成に力むること
- 五、心身を一體として教育し教授、訓練、養護の分離を避くること
- 六、團體訓練並に作業を重視し克己、責任、協同、規律等の徳性の涵養に力むること
- 七、各教科並に科目は其の特色を發揮せしむると共に相互の關聯を緊密ならしめ之を國民鍊成の一途に歸せしむること
- 八、様式、學校行事等を重んじ之を教科と併せ一體として教育の實を擧ぐるに力むること
- 九、家庭及社會との聯絡を緊密にし兒童教育を全からしむるに力むること
- 十、教育を國民の生活に即して具體的實際的ならしむること
- 十一、兒童心身の發達に留意し男女の特性、個性、環境等を顧慮して適切なる教育を施すこと
- 十二、勤勞尊重の念を涵養し就勞の氣風を振作して職域奉公の礎地を啓培すること

而して在滿國民學校案の大本となるべき教育方針は從來の教育五大綱領に基き制定されたもので、その本旨にも明示されてある如く「皇國の道に則り普通教育を施し國民の基礎的鍊成をなす」ものであり、特に「盡忠の赤誠に徹せしむる」「他民族の信頼を受く」「克己」「責任」「協同」「規律」「職域奉公」の諸點を強調し、時局觀念に立脚して個人のうちから團體生活を見出して行く所謂國家教育の實踐を狙ひ、飽くまで時局と人と環

境の三者を一體とした教育を實施せんとするものである。なほこの教育方針に於いて、

- (一)の滿洲國民族の中核たる責務を遂行する志操を涵養する
- (四)の皇國の地位と使命を自覺し他民族より信頼を受くるに足る品位と實力の養成
- (六)の團體訓練ならびに作業を重視し克己、責任、協同、規律等の徳性の涵養に努むる
- (十三)の勤勞尊重の念を涵養し職域奉公の素地を培養する

といった四點が文部省の教育方針にみられぬ在滿邦人教育の特殊性をなすものであり、また初等科目に於いて國民科に大陸事情と滿語、體鍊科の教練が正課として附加されてあるのは注目されるが、教科目の統合では國民科の國史と地理が一本となり「國史地理」として教授することになつてゐる。

中等學校 中等學校はこれを關東州廳管轄のものとして記すこととする。

關東州廳管轄の中學校は大連第一、第二、第三中學校(官)及び大連中學校(公)、旅順中學校の五校(生徒數四千八百名餘り)があり、高等女學校には、神明高等女學校(官)、彌生高等女學校(公)、羽衣高等女學校(私)、昭和高等女學校(私)及び大連高等女學校(以上大連)、旅順高等女學校の六校(生徒數約五千六百名)がある。又實業學校として大連工業學校(官)、大連實業學校(公)の二校がある。

而して在滿教務部管轄中學校には新京第一及び第二中學校、奉天第一及び第二中學校、その他鞍山中學校、安東中學校、撫順中學校、哈爾濱中學校、牡丹江中學校、錦州中學校計一〇校(生徒數六千五百名)、高等女

學校には新京敷島高等女學校、新京錦丘高等女學校、奉天朝日高等女學校、奉天浪速高等女學校、鞍山高等女學校、安東高等女學校、撫順高等女學校、哈爾濱高等女學校、錦州高等女學校、吉林高等女學校、齊々哈爾高等女學校、牡丹江高等女學校、延吉高等女學校、四平街高等女學校の十四校(生徒數八千二百名餘り)がある。又實業學校には新京商業學校、哈爾濱商業學校、奉天商業學校、奉天女子商業學校、遼陽商業學校の外に公主嶺農業學校、撫順工業學校、奉天工業學校等計八校がある。師範學校には旅順師範學校及び旅順女子師範學校があり、又醫學校に旅順醫學校が昭和十五年に新設された。この醫學校の程度は中學校と専門學校の中間に位する。

中等學校は以上の如く殆んど全部都會に限られて存在してゐる現状にあるが、開拓地に於いても將來は原則として各種實業學校が適當に分布配置せられる。

大學及び高等専門學校 大學及び高等専門學校は關東州に旅順工科大学、旅順高等學校、南滿洲工業學校(大連)、大連高等商業學校、旅順醫學校等があるが、滿洲國內には僅か奉天に滿洲醫科大学があるに過ぎない。

旅順工科大学 旅順工科大学は大學令に據り、大正十一年四月、元の旅順工科學堂を基礎として設立された單科大学で豫科を設け、別に滿洲國學生のため豫備科を附設してゐる。修業年限は豫科、學部各々三年で、學部は機械工學、電氣工學、採礦冶金工學、航空工學、應用化學に分け、他の諸大學の如く學科制を採らず、所謂工科目の範圍内に於て選擇科目は成るべく自由ならしめる方針をとつてゐる。

滿洲醫科大学 滿鐵が奉天に最初日滿共學の南滿洲醫學堂を開設したのが初まりで、康德三年五月大學令により昇格した。學部、豫科、専門部、藥學専門部及び滿洲國學生のための附屬豫科等に分たれ、日滿共學で、修業年限は學部及び専門部は四箇年、豫科は三箇年である。

南滿洲工業専門學校 滿鐵が設立せる中等程度の工業技術者養成機關たる南滿洲工業學校が、康德三年五月に専門學校に昇格せる學校で、建築科、土木科、鑛山科、農業土木科、電氣機械工作科、機械科、通信工學科、應用化學科(最後二科は康德七年五月新設)の八科に分たれ、修業年限は三箇年である。

大連高等商業學校 康德四年四月關東局の認可を得て大連に開設された私立高等學校で、本科、別科の二科に分れ、本科の修業年限三箇年、別科修業年限は一箇年である。

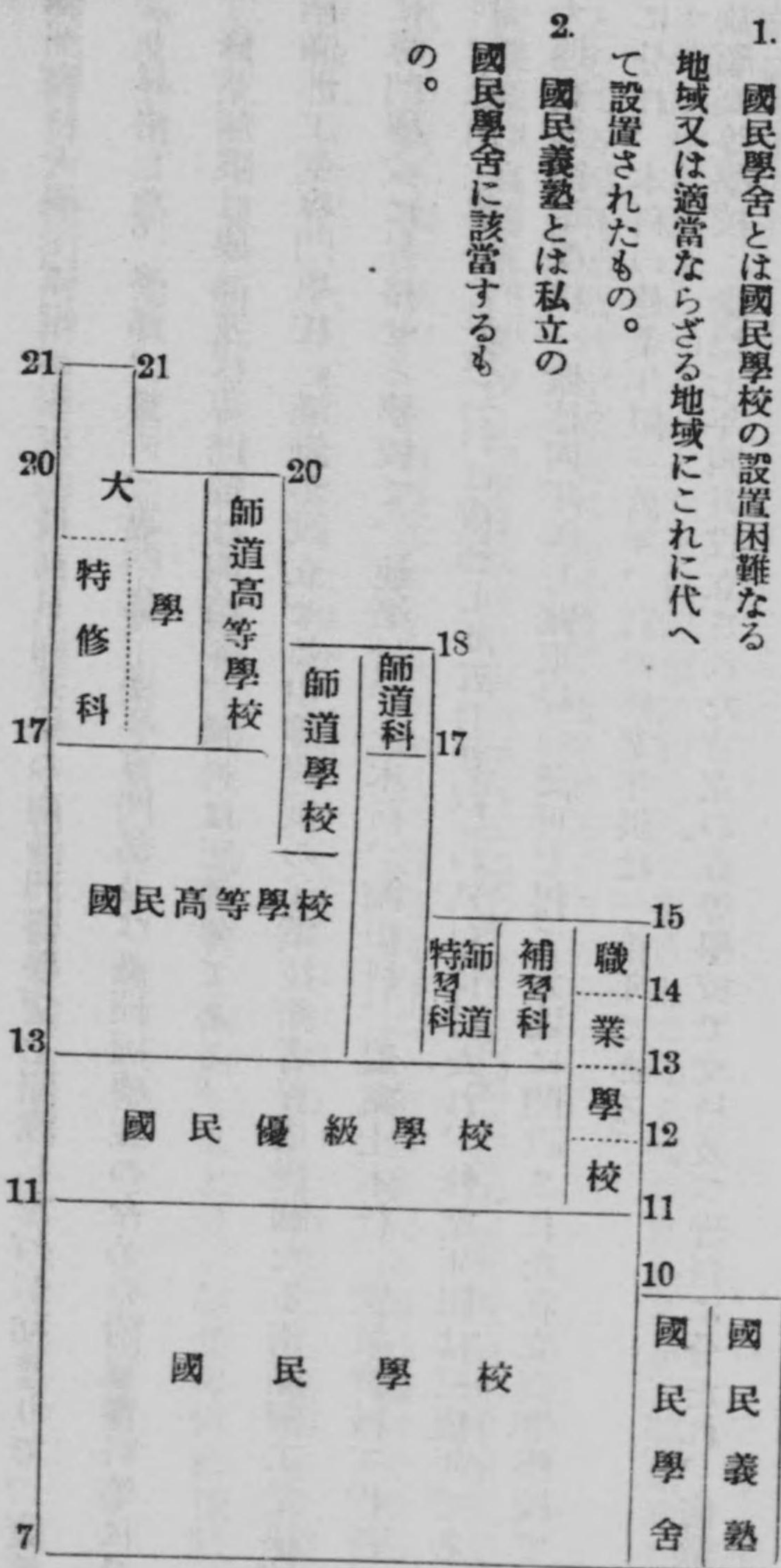
旅順高等學校 康德七年四月設立された官立の高等學校で文科及び理科に分たれ、修業年限は三箇年である。

(二) 滿洲國の教育施設

日本人を就學せしめる滿洲國教育施設には特殊教育或ひは再教育を目的とする學校が少くない。例へば中央警察學校、中央農事訓練所、中央師道訓練所、軍官學校、大同學院(主に高級官吏の養成を目的とする學校)等であるが、此處では中學校卒業者より募集する教育施設たる國立大學及びそれに準ずる學校のみに就いて記すこととする。

而して滿洲國の大學は國務總理大臣(日本の内閣總理大臣に相當す)の直轄に屬する建國大學を始め民生部直轄の農業大學、工業大學、醫科大學、法政大學、哈爾濱學院等の大學及び大學に準すべき開拓醫學院がある。而してこれ等の大學に於いては授業料免除及びその他各種の特典が夫々與へられてゐる。滿洲國の大學は修業年限が概ね三年乃至四年で大體日本の専門學校程度になつてゐるのである。これは次の滿洲國の學校體系表により明かなところであらう。

滿洲國の學校體系表 (數字は年齢を示す)



1. 國民學舍とは國民學校の設置困難なる地域又は適當ならざる地域にこれに代へて設置されたもの。
2. 國民義塾とは私立の國民學舍に該當するもの。

尙、入學時期は本來は毎年一月となつてゐるが、特に日本人中學校卒業期日の關係より日本人の入學は四月に行はれる。應募資格は大學によつて多少の相異はあるが、一般に中學校四年修了程度の學力を有するもの、或ひは協和會市縣旗本部に於て適當と認められたもので、募集に際しては國內は勿論日本内地に於いても行はれる。以下各大學に就いて若干記してみることにする。

建國大學 滿洲國独自の極めて顯著なる特色を有する教育機關で、建國精神の眞髓を體得せしめると共に、學問の蘊奥を究めたる先覺的指導者を養成することを目標として、康徳五年五月新京に開設された滿洲に於ける最高の大學で、國務總理大臣の直轄に屬し、在學生の所要學費は一切國家に於いて負擔せられることゝなつてゐる。

修業年限は前期、後期各三年とし、前期には中等教育修了以上の學力ある者を選抜して入學せしめ、後期には前期修了生及び他の大學専門學校出身者を詮衡して入學せしめる。

教育科目は前期に於いては高等普通教育を主として建國精神の體得及び勤勞的實習に意を用ひ、後期では法制、經濟、論理、哲學等を課すると共に前期と同じく勤勞的實習を行ひ、而して規律と自治の訓練に資するため全員を塾に收容する。

注 建國大學には別に大學院、研究院を設け、大學院には本科後期卒業生及びこれに相當するものを入學させて専門的研究をなさしめ、研究院は教授を以つて組織し、諸問題の共同研究機關としてゐる。

國立醫科大學 これには新京、哈爾濱、佳木斯の三箇所に設置されてゐる。

哈爾濱醫科大學 哈爾濱醫科大學は康德五年一月に哈爾濱醫學專門學校より昇格し、又康德六年一月當時露人經營中の私立齒科醫學院が本學に接收されて附設の教育機關となつてゐた。而して康德七年一月には從來の財團法人哈爾濱醫科大學は國立哈爾濱醫科大學に移管され現在に至つてゐる。修業年限は醫學部四箇年齒科部三箇年である。

新京醫科大學 新京醫科大學は、元官立の新京醫學校であつたが、康德五年一月新學制が施行されると同時に昇格したもので、修業年限は四箇年である。

佳木斯醫科大學 佳木斯醫科大學は康德七年に開拓團に最も必要なる醫師及び衛生指導官養成のため設置されたもので、修業年限は四箇年である。尙、本學のみは現在徵兵猶豫の特典を有してゐないが、目下その手續中であるから近い中にその特典を有するに至ること、思はれる。

國立農業大學 國立農業大學には奉天農業大學、哈爾濱農業大學及び新京畜産獸醫大學の三大學がある。

奉天農業大學 奉天大學は康德二年七月奉天に設立され、初め高等農業學校と稱し、農學科、林學科及び獸醫學科の三學科を置き修業年限は三年であつたが、康德五年五月大學令により大學と見做され、茲に昇格するに至つた。本科は農學科、林業科、獸醫學科、農業土木科の四科に分たれ、修業年限三箇年、特修科は林學特修科があり修業年限は二箇年である。

哈爾濱農業大學 哈爾濱農業大學は康德七年に新設された大學で、特に北滿農業開發の指導者養成を主眼

としてゐる。而して修業年限は三箇年で農學科及び醫學科が設けられてゐる。尙、本學は近き將來に於いて日系も募集せらるゝ筈である。

新京畜産獸醫大學 新京畜産獸醫大學は康德七年五月に設置された大學にして、畜産獸醫に關する高等の學術技能を教授してゐる。修業年限は三箇年で農學科及び獸醫科が設置されてゐる。

開拓醫學院 開拓醫學院は民生部直轄の學校で龍井開拓醫院(間島省龍井街)、哈爾濱開拓學院、齊々哈爾開拓醫學院の三校があり、入學資格は日系醫學專門學校二年修了程度で、修業年限は二箇年である。

國立工業大學 これには奉天、新京、哈爾濱の三箇所に設置されてゐる。

哈爾濱工業大學 哈爾濱工業大學は民國九年(大正九年)に設立せられた工業專門學校(後民國十六年東省特別區立大學と改稱、翌年更に哈爾濱工業大學と改稱す)を康德二年北滿鐵路接收に際し、滿洲國に移管せられ、舊態のまま國の補助經營となり、康德三年四月哈爾濱高等工業學校と改稱し、後康德五年一月國立哈爾濱工業大學に昇格し現在に至る。

修業年限は四箇年で豫科はない。各學年共土木學科、建築學科、電氣學科、機械學科、應用化學科、採鑛冶金學科に分れてゐる。

新京工業大學 新京工業大學は政府が康德五年四月滿洲國立工鑛技術員養成所を設置したのが始まりで、翌六年一月國立大學新京工鑛技術院と改稱され、更に康德七年九月五日新京工業大學と改稱されたものであ

る。

修業年限は豫科一年、本科三年に分たれてゐるが、豫科は滿系に限られてゐる。本科は採鑛科、冶金科、電氣科、機械科、應用化學科、土木科、建築科の七科に分たれてゐる。

奉天工業大學 奉天工業大學は康德六年一月創設された國立大學奉天工鑛技術院が康德七年九月五日に前記新京工業大學と同じく滿洲國工業大學令によつて昇格したものである。

修業年限は豫科一年、本科三年であるが、豫科は滿系に限られる。本科は採鑛科、冶金科、應用化學科、電氣科、機械科の五科に分たれてゐる。

國立大學哈爾濱學院 滿洲國立大學哈爾濱學院は大正八年日露協會學校として創始され、康德六年四月昇格せるもので、露語、法律、經濟及び滿、蒙語等に關する高等の學術の理論及び實際を修得せしめる學校であるが、本學院は主として日系の學生を收容教育してゐる。

(三) 社會文化教育施設

一般民衆を對象とする社會教育は學校教育と同様現代文化國家の等しく重要視するところである。滿洲國に於いても建國以來、舊軍閥政治時代の放任主義を一擲し、眼に一丁字もなき成人無學者及び一般民衆に對し知識、技能を授くる目的の民衆講習所、或ひは地方に於ける社會教育の中心機關たる民衆教育機關即ち講

演會、講習會、展覽會、ラジオ及び映畫等による教化善導を行ふ機關を各地方に設け、又圖書館、博物館の新設等の社會文化教育施設の完備普及を期してゐるのである。然し文化の發達は産業の場合に於ける僅かの施設によつても直ちに統計的に躍進するものと異なり、施設の充實並びにそれによる民衆の知識向上如何によつて始めて現はれる。従つて滿洲國の文化は世界の驚威の的となつてゐる産業の華々しさに眩惑され、依然として舊政權時代の状態の如く一般日本人に思はれてゐる憾みがないが、事實は著しい發展をしてゐるのである。次に日本人に深い關係のあるラジオ、映畫、圖書館、博物館等に就いて記してみよう。

(イ) 放送

放送の使命に就いては今更贅言を要しない所であるが、近時に於ける國際情勢の變遷は從來放送に課せられてゐた所謂文化的使命より國家的機關としての使命が多分に課せらるゝこととなつた。茲に放送無線電話は國家生活、社會生活に緊要缺くべからざるものとなり、又國運伸長、文化の向上等に至大の關係を有するものとなつた。特に支那事變の勃發により、日本、滿洲國並びに全東亞は未曾有の轉換期に直面し、且つ最近の歐米國際情勢は刻一刻複雑を極めつゝある秋、滿洲國の放送事業の使命も亦その重要性を一層加へらるに至つてゐる。

沿革及施設 滿洲に於ける放送事業は舊政權時代に奉天及び哈爾濱に於いて今より十數年前既に開始されてゐたが、その發展狀況は奉天は兎も角哈爾濱は露支紛争等により殆んどその發達が見られなかつた。

然るに建國後は大同二年八月國內及び關東州に於ける電氣通信事業が統一されて以來、急速なる發展を示した。この統一に當り、日滿兩國政府の監督による日滿合辦の滿洲電信株式會社が創立されたのであつて、當時の聴取加入者は僅か六千に過ぎなかつたが、然し當事者の不斷の努力と官民の多大なる援助等によつて逐次事業的基礎は固まり、康徳四年に入るや逐年國內の放送事業は躍進的發展を示した。即ち康徳三年聴取加入者約四萬、放送局も大連、奉天、新京、哈爾濱の四局だつたものが、康徳四年には一躍八萬八千餘りに達し、而も牡丹江、承德、安東の三局が増設された。更に康徳五年には聴取加入者十三萬、新設放送局は延吉、齊々哈爾、佳木斯、黑河、海拉爾の五局で、舊設のものを入れて十二局に達し、最近では聴取加入者四十萬餘り、新設放送局は營口、錦州、海拉爾その他合計十七局に達した。

この間建國當初國內に蠢動する匪賊の宣化を行ひ或ひは民衆に對する教化、生活向上等に頗るその性能を發揮し、又日支事變勃發による滿支國境地帯の民心の動搖を防ぎ滿洲國をして益々王道樂土たらしめてゐる。現況 放送施設に就いては康徳五年に「放送施設擴充五箇年計畫」が樹立せられ、それによつて進行を見てゐるのである。従つて現在はまだその計畫完成の域に達してゐないが、五箇年計畫の第四年目の康徳八年に早くも放送局十七に達し、全滿放送網の密度が急速に増し聴取者もそれに比例して増加してゐる。而も放送聴取の困難な邊疆地域には有線放送による共同聴取を行はしむる方法を採り、その普及が急速に具現されつつある。又對日支及び對外放送のため二〇軒短波施設が増設され一段とその威力が加へられることになつて

ゐる。

註 共同聴取施設所謂有線放送共同聴取は日本に於いては既に數年前に部分的に行はれ、漸次それが擴張されつゝあるので知らない人はないと思ふが、これは近時放送局増設に伴ふ放送周波數の不足即ち各放送局の電波が互に干渉して受信に困難を生ずるやうになつたこと及び國際電波線の關係より國境地帯等に於いて好ましくならざる他國電波の國內侵犯妨遏と云ふ要請、並びに電波を目標とする航空法の研究に依り無線電波送出が敵機に對する誘導の目標を呈するに至ると云ふ國防的事情等によつて急速に發達したもので、滿洲國の如く周圍が外蒙或ひはソヴェト聯邦に取圍まれてゐる處では特にその施設の重要性が認められてゐる。その聴取方式は電燈發電所より需要家へ送配電線に依り連絡送電せられて各家庭に點燈する如く一定の場所へ親受信機を裝置して受信すると共にその出力であるラジオ放送プログラム音聲周波電流を數多加入者各戸へ夫々有線連絡に依り送電し、各加入者宅に裝置せる高聲器を同時に動作せしむるのである。従つて各戸に受信機を必要とせず、唯高聲器のみを裝置すればよいのである。

放送内容 放送は第一放送と第二放送とに分れて居て、第一放送は日本人のために、第二放送は滿洲人のために行はれてゐる。而して第一放送はその番組の中約半分が内地の中繼によるもので、これがため日本内地の番組に左右されることが多い。

(口) 映 畫

映畫はラジオと同じく教育の普及、文化の促進或ひは娛樂機關として極めて重要な地位を占めてゐる。これがため世界各國に於いて早くより映畫國策を行つてゐるのであるが、滿洲國に於いて映畫政策統制の國策的大道が確立されたのは康徳四年八月公布の株式會社滿洲映畫協會法及び同年十一月一日公布の滿洲映畫法を見てからである。

沿革 今、上述の佈告が行はれた當時の世界各國の映畫國策をみるに、統制國家と目せらるゝ獨、伊、ソ聯の各國政府が映畫を通じてその國家意志の弘布徹底を圖つてゐるほか、その他の諸外國にあつてもその國民道徳的、國家經濟的見地より如何にして外國映畫の輸入を防止し、且つ自國の映畫事業を發展せしむるか云ふ問題に就いて多大の關心を拂つて皆相當徹底せる映畫對策を實施してゐたのである。然るに滿映設立以前の滿洲國映畫の實狀は附屬地を除く全國の上映映畫中、滿洲國産及び日本映畫の數は全體の一割に過ぎず他の九割強がアメリカ及び支那映畫と云ふ實に寒心すべき状態にあつた。この事態に對應して康徳四年八月滿洲映畫協會が設立され、直接國務總理の監督指導下に業務を開始し、政府及び關東軍の指導的連絡提携を受けて鏡意映畫の製作、輸出入、配給等の統制の緒についたのである。

現況 滿洲映畫協會、通稱滿映が設置されて以來外國映畫は量的にこそ制限されたが、漸次國內配給映畫即ち外國映畫も國産映畫も質的に向上し、同時に優秀なる映畫が一般大衆にとり廉價に觀賞し得るやうになつた。又滿映は政府及び協和會と緊密なる聯絡の下に、全滿に亘り鐵道沿線の常設館施設なき地方への巡回映寫、或ひは开拓村巡回映寫、僻地巡回映寫(東部及び北部國境地方を對象として宣撫教化を行ふもの)その他各種の巡回映寫を行つてゐるので、僻地の日本人或ひは滿洲人に對して重要な健全娛樂機關又は文化向上機關となつてゐるのである。

而して映畫製作狀況は如何にと云へば、その設立年月の日尙淺きにも拘らず日本人向或ひは滿洲人向の大作を發表し、前者には東寶或ひは松竹の提携作であるが、「東遊記」、「黎明曙光」があり、又東寶の「白蘭の歌」にも協力してゐるのである。

更に一般文化映畫の製作に就いても活潑なる動きを見せ、大衆の生活と密接な關係を有する各種の事項を對象として康徳七年より年六〇本を製作する方針が確立され、映畫の重要機能としてのニュース映畫製作に就いて同盟通信社と提携して日滿のみならず世界各地ニュースとの交流が行はれ、ノモンハン事件に於けるニュース班の活躍は滿映ニュース特報となり、全部を取纏め再編輯せるノモンハン事件は日、獨、伊語版となつて各國に輸出され好評を博したことは衆知の如くである。

以上滿洲の映畫に就いてその大略を述べたが、要するに滿洲國の映畫は滿洲映畫協會と稱する國策會社によつて製作、輸入、配給等映畫に關する一切の事項が統制され、これにより映畫を通じて民族協和を説き、更に文化、教育の普及徹底をはかり又主要なる慰安、娛樂機關或は海外宣傳機關となつてゐる。これに加ふるに、最近日本に於て各社ニュース映畫を統合する日本映畫會社の設立により文化映畫並びにニュース映畫の日滿交流も漸次活潑な氣運に向ひつゝある。

(ハ) 音樂、演劇

音樂は各民族によつて夫々特徴を持つてゐるのであるが、音樂も亦高度の文化を有する民族のそれに壓倒され、原始民族の音樂はその影をひそめつゝある。

抑々音楽は、單に趣味、娛樂として必要なものであるばかりでなく、人心を集中させるために最も効果のあるものである。音楽の効果は人の行くべき道を正しくするものである。それは歴史の上から見ても、また現實の情景から考へても、容易にそれが確かな事實であることが理解出来る。

音楽は人心が物に感じて生じたものであつて、従つて喜怒哀樂の情により、夫々その調子が變つて来る。「音楽は感情によつて動く。治世の時の音楽は安泰怡樂の情が自ら現はれてゐる。亂世の音楽は怨嗟憤怒の情が見え亡國の音楽は何となく哀愁と自暴自棄の情に溢れてゐる。」と古くから云はれてゐるが、これは正に明言で、而もよい音楽は凡ゆる民族に好まれるものである。

滿洲にある音楽に就いて云へば 一、滿洲雅樂 二、滿洲民謡 三、滿洲芝居と影繪 四、大鼓調 五、ラマ教の歌舞音楽 六、蒙古音楽 七、シヤマン歌舞 八、ロシヤ民謡及び洋樂等であるが、この中には日本人が聞いてよいものが少くない。殊にロシヤ民謡はその代表的なものであらう。

滿洲雅樂は吉林、蒙古に僅かに其の片影を遺して居り、漸く保存されてゐるに過ぎない。滿洲雅樂は清朝宮廷で用ひられた雅樂で、滿洲族の最も親しんだ音楽である。莊嚴な音楽であり重厚な味があり、如何にも滿洲の音楽らしく感ぜられるものである。かゝる滿洲族の最も親しんだ雅樂の保存、普及のため國民舞樂の創設は早くから日滿人の手によつて研究されてゐる。

滿洲民謡は滿人の平常好んで歌はれるもので、廣く歌はれるものであるらしいが、現状のまゝ放置されれば

流行歌或ひは西洋音楽に壓倒され、漸次その姿がなくなるであらう。民謡は民衆の聲の現れであるから、その發展は滿人の協和に裨益することは滿洲雅樂以上であらうと云はれてゐる。

滿洲芝居は一種の歌劇であるので觀衆は芝居を見ると云ふより俳優の歌を聴くのである。民衆の大多數に喜ばれ、滿人でこれを好まぬものは殆んど無いと云つてよい位で、名優が來れば場内は立錫の餘地が無い程に埋め盡してゐる。民心和合に最も適したものの一つである。

ラマ教の歌舞音楽は滿洲獨特のシヤマンの舞踊音楽と佛教音楽とを混入して居り、滿洲雅樂に次ぐ優秀な音楽で滿洲各地に流布されてゐる。その舞踊は日本雅樂の舞踊形式に類似し、また其の音楽は佛教的で、しかも祭りの樂しさを現して居る點はことに東洋風である。

蒙古音楽は蒙古にある。この地方のみで用ひられる馬頭琴といふ西洋樂器のセロに似た樂器が使はれるが支那樂器の笛や胡琴なども使はれる。古來傳はる英雄史の斷片などを日本の俚謡に見るやうな歌調で歌つてゐる。支那文化に感化されない古めかしい、しかも遊牧的な歌で、東洋の古歌といった感じのするものである。蒙古人はこれを歌つてはその日その日を楽しく暮らし、吟遊詩人は詩を馬頭琴に合はせ乍ら歌ひ歩くなど北方的な悠暢さが見られる。

薩滿教の歌舞は立派な古典劇であり、滿洲古文化を語るものとして重要な意味を持つてゐる。元來薩滿教は古くは全滿洲に擴がつてゐたものである。祈禱者は特有の着物を着け、腰につけた鈴をちやら／＼と鳴ら

し、片皮の太鼓を打ちながら舞ひ、一種の歌を唱ひ乍ら祈るのである。支那劇の起源は薩滿教にあると云はれてゐる。

ロシア民謡は北滿哈爾濱にロシア固有のバラライカ演奏や民謡が白系ロシア人によつて僅かに保有されてゐるが、之こそ哈爾濱の持つ誇りであつて、白系ロシア人の最も愛好する、しかも唯一の娯樂である。

その他洋樂は日本人のみならず滿人の知識階級にも愛好され、一時は中々盛であつたが、滿洲事變以來消極的になり、有名な外人音楽家や一般の演奏會は減少し火の消えた状態で好樂家の悩みとなつてゐた。然し現在は新京音楽院の設立を始め大なるものだけでも十指に餘る。演劇團體は大同劇團をはじめ五十内外に達してゐる。

(二) 圖 書 館

圖書館は社會教育上最も重要な施設の一なるに拘らず、滿洲國にはその數極めて少いのである。而もこの中、國立圖書館一、省立圖書館一、及び治外法權撤廢に際し日本側より移讓を受けたる十數館を除き、その大部分は見るに足るもの少く、藏書の如きも甚しきは百冊をも超えざるものあり、而も藏書は主として漢籍を以つて占められ、新時代の圖書は極めて寥々とし、殆んど圖書館としての使命を果し得ない現状にある。かゝるため目下その内容改善、施設の充實等に就いて鋭意研究が進められてゐるので、その充實、完備も近き將來にあることと考へられる。

(本) 博 物 館

博物館は現在新京に國立博物館、奉天にその分館があるに過ぎないが、同館は古今内外の自然及び人文科學資料を蒐集、整理、保存展覽し、政府各機關の政務の参考に、又一般學術研究及び社會教育に資せしむるがその目的となつてゐる。本館は主として自然科學、産業關係資料が集められてゐる。又民俗關係の資料も少くないが、近く國內に居住する各民族の生活形態を復原し、又その理想形態を見せる所謂民族博物館の完成を見る筈である(新京南湖)。奉天の分館には歴史的考古美術工藝品等の人文的資料が蒐集されてゐる。

滿洲國の博物館は從來の陳列本位の博物館觀念を打破し、飽くまで實際的博物館としての設立に向つて計畫されてゐることが特徴で、盛に講演會、展覽會、研究發表、移動博物館が開催される。

(四) 娯 樂 ・ 趣 味

娯樂、趣味は各人によつて異なり、その大衆化したものは滿洲に於いても著しい發達を見せてゐるが、これを述べる前に娯樂、趣味と生活との關係に就いて一言して置きたい。

娯樂、趣味は人間の生活に密接なる關係を有して居り、その選擇利用法の良否は人の肉體に又精神的に好影響を與へし、又悪影響も與へる。彼の麻雀は一般の人が夜ふかし易く、又これにおぼれ易いためどちらかと云へば悪い娯樂の一つと見做されてゐるが、これを一時的の慰安を求むる對象物とし或ひは一家團樂の

一手段として行ふ時は、必ずしも悪い娯樂と見做すことは出来ない。又スポーツは一般によいものとして扱はれてゐるが、これとても若し過度に陥れば體を損ふものである。この例によつて解る如く趣味、娯樂はその運用如何によつてその良否が定まると云ふことが出来る。

然し日本人は寒さの酷しいところでの生活に馴れぬため、兎角冬季は外出を厭ひ室内に引籠り易い。而も室内的娯樂にその慰安を求める結果、益々外出を怠り、不知不識の間に健康を損ねることは屢々述べた如くで、滿洲で生活する日本人の娯樂、趣味は室内的のものより寧ろ戸外的なものに求めるがよいと云へる。勿論これは室内的趣味、娯樂を排斥する意味でなく、戸外によく出て健康を保持し、支那芝居、小説、或ひは滿洲各民族の音楽その他多種多様の趣味娯樂を得て日本人としての健全なる生活を行はれんことを求むるのである。

スケート 兎角運動不足勝になり易い滿洲の冬季の生活中最も容易に行はれる快適なスポーツの一つであらう。北滿は十一月初旬から南滿では十二月初旬から大體一月までがシーズンで、都市村落を問はず沼、池、川などの天然スケート場の外、學校の校庭、陸上競技場、公園の一部、裏庭の空地に至るまで隨所に大小のスケート場が作られ、寒夜數百米平方もある大リンクに煌々たる電燈をあびて老若男子のスケーターが疾走し亂舞してゐるのは滿洲獨特の一風景であらう。

註 スケート靴は新京では凡そロング(滑走用)が三十四、五圓、ホッケイは三十圓位、ファイギニアは二十五圓位で求められる。

スキー 滿洲のスキー場は總體的に内地のスキー場と比較して見ると非常な特色を持つてゐる。第一地形的に於いて緩やかな起伏をなし、急峻にして且つ長い斜面を有してゐる所が少い。而してスキーに適する山形を整へてゐる南滿には生憎積雪少く、やゝ積雪に恵まれてゐる北滿は地形的に餘り良好とは云へない。然し東部山岳地方はスキーに絶好な場所が少くないが、大體に於いて滿洲のスキーは山岳スキーとしてよりも寧ろゲレンデ、スキーと云ふ點にその特長を有してゐる。

スキーに最も關心を持たれる雪質は、温度、湿度等の關係より頗るよく、大體十二月より二月下旬頃迄絶好の雪質が保たれる。而も降雪の量と度数の少いため一般スキー場は非常によく手入れが行はれ、五、六種の降雪があれば充分スキーを楽しむことが出来、又貸スキー、汽車賃割引等の便が與へられ、容易にスキーを楽しむことが出来る。

滿洲のスキー場は現在十數有餘を算し、その主なるものを挙げると、吉林では北山をはじめ江南、龍潭山の各スキー場のほか土們嶺があり、哈爾濱の北滿地方には玉泉、帽兒山、更に濱洲線に札蘭屯、白温線のハロン・アルシャン・スキー場、南滿の奉天方面には鐵嶺遼海山スキー場、奉吉線の南雜木、吉林寄りに山城鎮、撫順に老虎臺スキー場と何れも優秀なるスロープを有してゐる。

釣魚 北滿には松花江及其の支流、烏蘇里江にすむ各種の夥しい淡水魚があり、又呼倫湖、貝爾湖、鏡泊湖、興凱湖等も有名な魚の産地であつて、日曜を利用して出掛ける程度ならば何處の小さな川や湖沼でもよ

く釣れる。釣を全くしない人でも一日百匹位はわけなく釣上げられる程で釣魚の種類は鯉、鮒、鯰、鱖等種類は多い。鱖は蛇斑紋のある泥鰌を大きくした様な醜怪な魚であるが洗ひにすれば頗る美味であると云ふ。

狩獵 九月一日に獵鳥は解禁となる。獸類はこれより二箇月遅れて十一月一日に解禁される。吉林附近一帯は雉の有名な狩獵場である。雉獵は十月初旬農作物の刈入れがすんでから始められる。その他獵鳥には雁、鴨、鴨、鶉、雉、山鳩、鶉、白鳥、沙鷄、山七面鳥等四、五十種もあり、獸類には麕、兔、黄羊、狐、狼等がある。日本では狩獵はブルジョアの娛樂とされてゐるが滿洲では普通の娛樂である。

其他 圓板投、砲丸投、槍投、競走等の各種陸上競技、排球、卓球、庭球、野球、日本古來の角力、武道等があつて學校、會社等で盛に行はれ、立派な記録が残されてゐる。開拓地では野球や角力が主な娛樂的運動として行はれ、手製のバットで行はれてゐる。冬季は地上が凍結寒氣が酷しいため、戶外運動は二、三のものを除いて先づ不可能となる。

一一、滿洲人に接する心得

習慣と云ひ、禮儀と云ひ夫々一國一地に於いて幾百年を経て來たものであるので、これを傍より見て正しくないからと云つて一片の法律或ひは訓示等によつて速急に改正出来る譯のものでもなければ、又新しい習慣を普及させんとしたところで直ぐ普遍的に實行出来るものではない。故に滿洲に來る以上は必ず滿洲人の國民性、習慣、禮儀等を一應充分に研究しておかなければ、及びもつかぬところに感情の行違ひ或ひは誤解を招くことがあり、稍もすれば相手に禮儀を辨へぬとか或ひは下等な人間だと思はしめる憂ひがないとも限らない。それには彼等の禮儀、作法、習慣等を知ることが勿論必要であるが、彼等の性質を知ること亦頗る大切である。

(一) 滿洲人の特性

滿洲國の住民は殆んど漢民族で、支那河北省、山東省より移住して來た彼等農民は幾千年と云ふ長年月に亘り戰亂、虐政、天災等に虐げられ、唯自己の力によつて生活を營んで來た。その結果彼等の性質は純朴で忍耐力に頗る富み平和を愛好し、獨立心が強いと云ふ性質が自ら培はれたのであるが、その反面個人主義で

利欲の念が強いと云ふ缺點も培はれた。又彼等は古來大家族主義をとり、農業を以つて天職とし、且つ打積く天災、人禍のため戦闘よりは外交に、武事よりは文事に秀でるに至り、その性質は一般に女性的で内省的、柔弱、臆病に思はれる點がある。

尙、滿洲人の性質を次に述べるに當り、彼等の性質はたゞ表面的にこれを見る時甚だ單純なものに思はれるが、これを深く掘りさげて考ふる時、そこに冷熱矛盾せる兩極端があり、甚だ複雑なる性質を有し、その性質を究めることは極めて難しいことを附記して置きたい。

(イ) 面 子

滿洲人が面子即ち體面を重んずることは國民的習慣で、官吏には官吏として、商人は商人として、子供には子供としての夫々の面子を有し、甚しい例としては乞食までそれ相當の面子を有し、若し通行人に叩頭數回に及んでも一文も與へられない場合には、その乞食は面子を潰されたと憤慨するのである。斯くの如く最下級者に於いても面子を立てるには甚だ神經過敏で、滿洲人はこの面子を立てんがために利益を放擲し死も亦辭去しないことがある。殊に面子は社交場に於いては重要な意義を有し、自分の面子を要求するのみならず又相手の面子も尊重し、自分の意圖に反することでも直接自己に利害關係がなければ相手の面子のために強ひてそれに就いて反駁をしないのである。これは潔白な日本人にとっては彼等が不信なるためと一應考へられるが、彼等に云はしむれば相手の面子を尊重した立派な一行爲であつて、日本人の考ふるが如き不信なる

結果より行はれた行爲ではない。

斯くの如く自己の面子の保持に努め、又相手の面子も尊重する結果、萬事が甚だ遠慮深く行はれ、親友に對する忠告すらも遠廻しで間接的である。況や公衆の面前で叱責されることは自己の面子を傷付けられることで滿洲人の最も忌み嫌ふところである。滿洲人の使用人が主人たる日本人に痛罵されたため、主人を始めその家族に血腥き復讐をしたと云ふ事件が起ることがあるが、これも彼自身の面子を失つたと云ふ體面上の行爲のしからしむるところで、面子尊重に關しては特に注意をしなければならぬ。

(ロ) 利慾の念に就いて

滿洲人は利慾の念が強いと云はれる。漢人の利の強い事は孔子が「放於利而行多怨」と戒めた如く、元來臆病な國民であるが、一度利益の問題になれば忽ちこの性質を没却する。客と車夫が摺み合はんばかりに路傍で一錢の事で數時間も口論し、又かつては社會組織が悪かつたためか官職の賣買、賄賂の授受、節操の賣買、官金の贓匿が行はれたこと等は金錢萬能と思はるゝ好例であらう。

斯くの如く金錢に對しては甚だ執著心が強いが、一度町内或ひは部落の祭事になれば、その寄附は全く身分不相應と思はるゝ程多額に出し、又家族、親族、同郷、同業、朋友が若し金に困れば刻苦精勵によつて貯蓄された金を總べて提供して、自己の苦しみを省みないと云ふ反面をも有してゐる。前者の例は面子の然らしむるところであると考へられ、後者は滿洲人の長所たる義理固い性質の然らしむる行爲であらう。